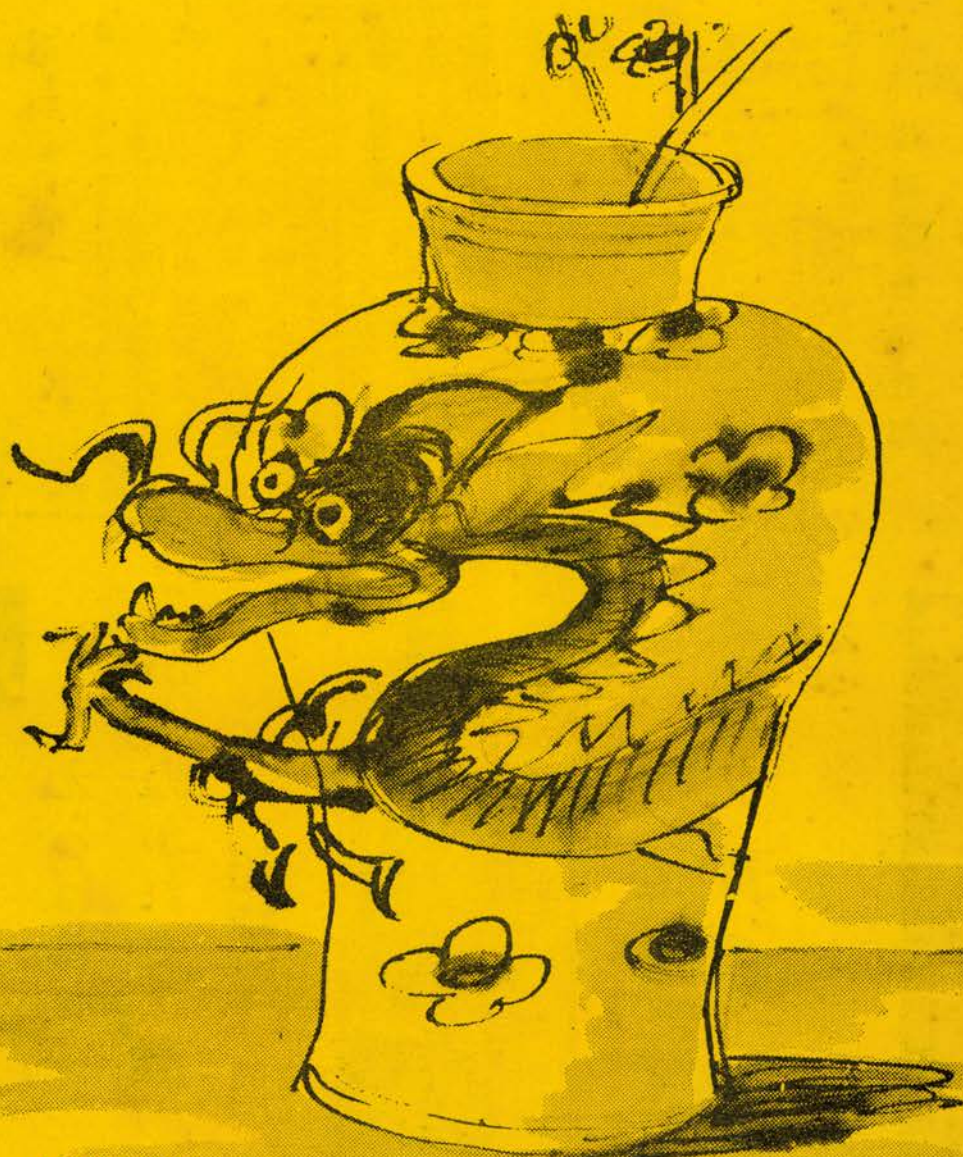


証雅の柳川

麻生路郎☆主宰



KAZUYA.

二
月
号

No. 441

Pensoj flugas trans la land - limon
THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

—3月本社句会予告—

花 兼題
むだ 聲
煙 突
くしゃみ

本社二月句会

暖かい会場で楽しく作句をいたしましょう。
最近には特に新人の方がふえました。

日時 二月七日（金）午後六時

会場 自安寺（〒211）一四七八番

大阪市南区千日前電停スグ北側

兼題「日溜り」（二句） 麻生路郎選

「冷 静」（三句） 戸田古方選

「スリル」（三句） 菊田いさむ選

「介 抱」（三句） 橘高薫風子選

席題 三題（当日発表）

清水 白 柳

呈賞 六各題天位・各題天位から路郎選により不朽洞賞

会費 百円

幹事 紫香・いさむ・南宗・文秋・南佑・八郎・

与呂志・清人・水洞・すゑむ・薫風子・柳

雲子・舟遊

★投句だけの方は郵券三十円同封

（〆切二月三日）

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・大阪 六〇八一



えらばれ

みがきぬかれた 灘の酒

超特撰 日本盛



超特撰（お徳ケース入）一、八リットル詰・一、二〇〇円

清 酒

日本盛

ニホンサカリ

灘西宮酒造 醸



不朽洞句帖

麻 生 路 郎



わが時計二つとも停止^{とま}りぬ 終焉の如く

足を地につけてというが そんな地が見つからぬ

地球あわただしく揺れる淋しさ 蒼く黄色く

一本のマッチの軸となつて投げだされ

税吏を遁がれたらしい 蒼空^{あざぞら}を讃美する

前号に一月一日前書のように組んだのは
誤りにつき訂正

川柳雑誌★二月号目次

題字：麻生路郎・表紙：河上一也

不朽洞句帖……………麻生路郎……………(3)

移りゆく世態……………北川春巢……………(18)

ヒマだね財界人……………東野大八……………(26)

堺の文学散歩……………八木摩天郎……………(30)

川傍柳初篇研究 (二)

丸十府・岡田甫……………(14)

川端柳風・高須啞三味・前田喜代人……………(14)

岡崎重義・清博・美・藤井和雄……………(14)

石原青竜刀を語る……………高木夢二郎……………(12)

随筆 孫と私……………築山快夢起……………(27)

私達の地下街……………木山遠二……………(34)

★続・川柳書架……………麻生アト……………(35)

金に繋がる話……………麻生路郎……………(28)

柳志寸言……………本多柳志……………(36)

明治・大正柳誌順礼……………奥津啓一郎……………(21)

いざなみのみこと……………富士野鞍馬……………(33)

大万川柳「美少年」発表……………(40)

★……………(40)

川柳塔……………麻生路郎……………(6)

同舟近詠……………諸家……………(11)

近作柳櫛……………麻生路郎……………(22)

金泥集……………北川春巢……………(27)

各地柳壇……………麻生路郎……………(41)

★柳界展望……………(38)

★飛・燕・往・来……………(39)

★柳梅室……………路郎生……………(46)

一路集……………川村好郎……………(36)

「孤独」……………西森花村……………(37)

「ライバル」……………工藤甲吉……………(46)



川柳 題詠句の鑑賞

麻生路郎

雑誌の募集する課題句や、句会での課題吟などを軽視する作家も、いないことはな
いが、前述したように、課題句には課題句と
してのいい点もあるので、今すぐには捨て
たりはしないだろう。

課題「大阪弁」

老社長大阪弁を卑下してず

(東雲楼)

大阪弁でとうとうものにして帰る

(圭井堂)

おたやんは大阪弁で喋りそう

(薰風子)

そのいい点の一つに、同じ題で作るの
で、他の作家の作品と取材や叙法などを比
較検討して、その優劣を教えられる点であ
る。いくら自信作であっても、みすみす自
分の作品よりも秀れた作品を目の前につき
つけられては眼を覆うことは出来ない。取
材は同じだが、読み下して見ると自作の方
が叙法に於いて、たるみがあり、迫力の弱
い句になっているというようなことは、す
ぐうなずけるものである。それでも自作の
方が秀れていると思うものはそれでもいい
が、しばらく経ってから又引っぱり出して
見るのである。必ず何等かの発見がある
ものである。

次に課題句の中から三句ずつを抜き出し

と、第一句は「老社長」「大阪弁を」「卑

下してず」と淀みなく読み下せ、第二句は
「大阪弁で」「とうとうものにして帰
り」とこれまた、すらすらと読み下せるの
である。では第三句はどうかと言えは「お
たやんは」「大阪弁で喋りそう」と平言そ
のまま作った感で読め、句切り方には多
少の違いはあっても、三句にその優劣は見
出せない。ただ読者の好みによって、読者
の呼吸に、ピッタリ来るか、来ないかの差
が生じるだけであると思う。

叙法はいずれも、前述の三句と同様で、
すらすらと淀みなく詠いあげている。第一
句の「腕組みの」の句は父性愛を詠んだも
ので人情の機微をつかんでいる。第二句の
「腕組みへ」の句は経済的な悩みをやや楽
観的に表白しているが、その底に漂よう悩
みを見通がしてはならない句である。

第三句の「腕組みをして」は資本家の心
境を詠んだものだと思うが、少しく作った
という感じがする。ここらが課題の陥入や
すい難点だと言えよう。

課題「三味線」

壁に三味掛けて色香はまだ失せず

(雅城)

撥持てばちかよりがたい姉芸者

(方大)

惜春の音の一つに昼の三味

(薰風子)

いを生じて来る。「老社長」は「大阪弁で」
よりも穿ち味は強いが想に於てやや陳いと
言わねばならないだろう。その点、「大阪
弁で」の方は「とうとうものにして帰る」
で大阪人根性をズバリとつかんでいて、思
わずソヤソヤと同感させる力がある。そこ
に多少の差があると思う。ところが「おた
やんは」の句は穿ち味はあっても極く軽
い程度のもので、この句はすべすべとした
感じの句としてうけとれるのである。そこ
へネライの面白さが他の句よりも秀れてい
ると思う。

これ等の句について述べたいことは幾らで
もあるが、それらは読者の鑑賞にまかせて
次に移る。

課題「腕組み」

腕組みのようやく小さい鯉のぼり

(淀月)

腕組みへ百円札も降って来ず

(愛鳩)

腕組みをして鉄骨と対峙する

(どんたく)

題が題だけに、いずれも情趣がある。
第一句は既に花街の第一線からしりぞいた
女性を詠んだものと思うが、女性の持つ情
趣を味わされる以上には出ていない。それ
よりも、第二句の「撥持てば」の句の芸の
威厳のおかすことの出来ない力のあること
を発見したところにこの句の良さがあると
思うがどんなものであろう。

第三句は惜春の情趣を昼の三味からくみ
とったもので、なんとなく長閑さを感じら
れる。尤も今どきの若い人達にはこの味は
判らないかも知れない。

次は、

課題「赤字」

算盤を何度置いても赤字なり

家康を読んでも赤字まだ続き

(生 薑) (檜 雄)

社の赤字旋盤工の知らぬこと

(王 石)

この第一句「算盤を」は短刀直入に赤字を詠んだ穿ち句である。「何度置いても」がこの句のヤマで、詩味に乏しい点は争われない。第二句の「家康を」は会社の重役連中が経営面の参考に小説「家康」を読んだ時事吟とも言える点で句のいのちが短い。第三句の「社の赤字」は同じ赤字でも経営にタッチしていない旋盤工の知らぬことだと突ッ放したところに興趣を持ったのであろうが、それだけのものである。

課題「口先き」

さて借りに行けば口先きとは違ひ

(圭井堂)

口先きの礼は会う度ごとくに言ひ

(むじな)

口先きで一億軽うあしらわれ

(雄 声)

この三句はいずれもズバリと穿ちの句だと言えよう。第一句「さて借りに行けば」は柳橋式の匂いがいかにも強烈である。第二句の「口先きの礼は」も前句と同じようなことが言える。句に新鮮さが感れじらない。安易に作った証拠である。第三句の「口先で」の句は首相などの演説の批判ともうけとれるがせっかくの穿ちも胸を突き刺すような迫力がない。斯ういうところに安易に作った題詠句としての物足らさが出るのである。実感句だったら首相に対する

抗議とか、怒りの形とかでもっと迫力のある表現になると思う。

課題「宿命」

宿命にしては殺生な野つぼの死

(野迷路)

若坊んと呼ばれやくざを継ぐさだめ

(きさ子)

こけし造る家に生れて山おりず

(水 客)

この第一句の「宿命にしては」は野つぼの死という悲惨な出来事を批判した句だが客観的にスラスラと詠んであつて涙を誘ふぬところが題詠句の難と言えよう。題詠は何といつても説明に陥入り易いが、この句などは題詠として「宿命」を巧みに捉らえている方だ。

第二句の「若坊んと呼ばれ」の句も、宿命を巧くとらえているが、説明的な匂いのすることはあらそわれない。これも題詠の難と言えるだろう。前句が野つぼの死をつかんだように、この句が若坊んを捉えたこと、ネライの苦心は充分買つていいと思ふ。

第三句の「こけし造る家に」は前二句とはネライがガラリと変つていて文学的な情趣の豊さがある。ここまで来れば例え題詠句であつても題詠句と雑詠との差はないだろう。おそらく旅で拾つた曾ての詩想がたまふ宿命という題詠によつて生れたのであらうと思ふ。

課題「悪名」

経理部長ケチで通つて会社無事

(好 郎)

悪名が信じられない低姿勢

(良)

法律を守り金貸し憎まれる

(遠 二)

これ等の三句を見ても、何れも軽い穿ち味によつて構成されて居り、社会生活上の経験の豊富さが句の主軸をなしていると思ふ。

第一句の「経理部長」がケチで通つて、

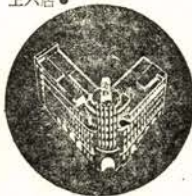
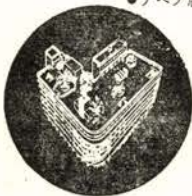
会社が無事であるという批判は何人をもうなすかせるであろう。経理部長自身が個人的にケチであるわけではなく、会社経営の立場から、ルーズな支出をしていては、会社そのものが、すぐに行詰まるので、部長個人はケチな性格でなくても支出に対しては出来るだけ引締めるのを、部長はケチだと悪名を売っているのである。しかしそれなればこそ会社が無事なのだというのがこの作家の批判である。斯ういう批判は作家自身に経理部長の経験はなくても、常に経理部長に接していた経験からはじめてつかみ得た句想なのだから、斯うした句はすべて経験派の作品と見てもいいのではないかと思ふ。と言つたところで経験派の作品だけが、句であるわけではない。しかし題詠句の特性として経験派の作品の多いことは否めない事実だと思ふ。その証拠には学者必ずしも名句が生れず、小卒の人でも社会の多方面に触れて多くの経験を持つ作家のあることは誰もが気づくところである。

第二句の「悪名が」の句にしても、第三句の「法律を守り」の句にしても、そうした事象に触れたり、見聞きしたりしなければ生れない句であることは前句と同様である。しかし斯うした事象がズバリとつかめるか、どうかは作家のアタマと、叙法の巧拙によつて差違を生じることは言うまでもない。その点三句の何れが秀れた句であるかは味読者の味読の力によつて違ふこともあるので、読者は常に鑑賞の力を養わなければならない。以上の三句の何れが秀れているかは読者自身で検討していただくことにしよう。

これ等の題詠句を觀ても、鋭く真理を探究した句や鋭敏な感覚を表白した句のない点から見ても、題詠は作句練習であつて、題詠が最後の目的でないことを知らねばならない。要するに、作家自身の個性を浮彫りにしたよき句を遺すためには雑詠による自己の教養と精進による外はないと思ふ。

(おわり)

●アベノ店 上六店●



*お買物はいちばん便利な
キンテツへ!!



アベノ・上六
近鉄
アベノ・上六
621-1231
771-3331
休 定



川柳塔

麻生路郎選

大阪市 中島生々庵

古都淋し千年の距離考える

今会うて来たとは見えぬ嘘の顔

まっすぐに歩こうとすると妻子を悲しませ

まばたき一つせぬを賢妻の様にいい

大阪市 市場没食子

いつか花咲くを夢見て反主流

淡い夢かけて今年も宝くじ

新参のノッポに課長見おろされ

切手趣味慾もチョッピリ顔を出し

この上の馬鹿に耐え得ず辞表書く

豊中市 若本多久志

いい便り持って帰れる空の旅

今年又嘘で固めた年を越し

砂時計のように終って年の暮

血圧がどうのと一本減らされる

求人難なさいないのも入社^{はい}って来

大阪市 正本水客

人生を考えるとき釣草がある

幸せそうに失業保険とりに来る

二部合唱のように意見を出してくる

高槻市 若柳潮花

白足袋が芸人と言う腰にする

逢いとなない逢いとおへんと書いて封

兵庫県 小西無鬼

人間のもう一ト皮がなぜ脱げぬ

又一人増えたマダムの立ち話

迎還暦之春

還暦よおまえはいつの間に来たの

大阪府 西いわを

ヤクザとも知らず看護婦口にり

手ぶらでもええから来いと云う便り

名利も時の流れに抗えず

大阪市 北川春巢

好きな人記念写真にすぐ見付け

スモッグへわが家も細い煙を立て

年末手当妥結バリバリもう使い

ホノルル 前山北海

献策のない不平続けうとまれる

米国へ膝までの日本背伸びする

修身と言えぬ日本の人造り

特種の写真仏壇からさらい

辞表受理反主流派の一人去り

金雨花の終る花びら踏み惜しむ

男知らぬ色気はただの物真似や

頼り得ぬ人をば頼る身の不安

労基法宵街暗く店を閉じ

大阪市 大坂形水

いささかの物得ただけか五十年

ねえやさんを社員待遇で抜きに来る

十二月二日初孫誕生

初孫のおむつにお湯に付きつきり

赤ちゃんのしっこが飛んだ初笑い

ハワイ 羽佐間柳葉

自我捨てて見れば世間は広いもの

しとやかき客となる日の妻に見る

堺市 吉田圭井堂

大阪城に水を張る

頼もしやお城に水を張る市長

掘返しみんな五輪に罪を着せ

わが道をゆかせて呉れぬこの老舗

俺の代だけはと墓を磨く父



防府市 長野 野井 蛙

女名の標札ヒモを飼殺し

野放しの走る凶器が夜を寝せず

岡山県 直原 七面山

冬眠の出来る蛙になりたい日

女教師の憂いはまたも子を孕み

ハンサムが居ないと娘社をかわり

作られた人形ですわと二号さん

大阪市 西森 花村

お位牌に知恵を借りたい十二月

腹を切るかわりに部下の首を切り

明日あるを信じて靴など磨きましよう

鳥取市 河村 日満

十二月小さな善意金でする

ボリーナスも決まり映画に居る師走

凡々氏母堂を悼む

十二月悼む言葉もなく黙る

死ぬものは死にゆく師走雲早く

二十年適材適所平社員

豊中市 足立 春雄

野戦ふと思ひ出させた焚火の火

箕面市 安岡 珊枝郎

マネキンと同じ様な人が立ち

温泉の味を覚えた小春の日

生々庵の助六

助六を格子越しでも見たかりし

倉敷市 木村 千容

瓦所管を踏みつけたまま永眠し

第二反抗期だと理屈をこねる孫

集団で慰藉料談義とは淋し

念仏を唱えるひまもなく事故死

倉敷市 田垣 方大

手を組まな歩けぬように外人と

亡夫の像かかげて女社長室

学園に学園会社古くなり

大阪市 木村 水洞

だまされた選挙と悟る歳の暮

会費より以上に飲んで欠勤し

平凡な夫婦で離婚沙汰もなく

大阪市 後藤 梅志

しらずしらず亡恩の徒となりぬ

人間じゃないなとおもう記事が増え

ハンガーもアパート向きでやり切れず

アパートの管理に田舎から来た夫婦

大阪市 平尾 太希志

俺の部屋は十二階で候ビルの街

米子市 小西 雄々

制服の乙女おしゃれの本も読み

アパートで飼われ勝手の違う犬

青春の大きい夢が歌になり

感触と値段を比べおんな振り

ボリーナスと言わず餅代呉れという

大阪市 山川 阿茶

衝突の乗ってた女性の名でもめる

キュー云うてまんねんと人並に

ノイローゼ吹飛びそうに笑わされ

公約へ落選一寸気が軽し

七光り六方ともに踏めていず

加賀市 那谷 光郎

継ぎ合わすはざれ座布団妻のもの

恋ごろ芽生えセーラー服に倦き

仲悪い隣へ鶏は越境し

堺市 中島 小石

老眼鏡人生終りに近くなり

ほめることなく白髪のないをほめ

三面鏡暮しのつかれみせつける

高昇に心ゆるした盗られよう

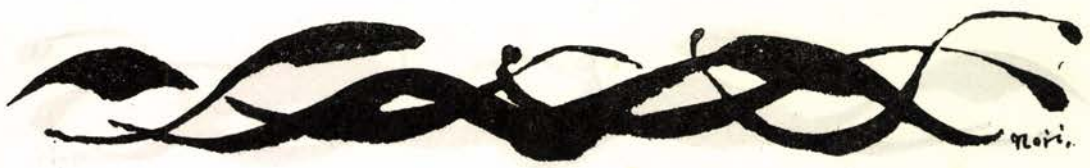
大阪市 福井 野迷路

パンのみで生きる人間のみが生き

商売も色々べーの運び屋とは

宣伝は先ず着目す施設の子

ごねどくは赤ン坊でもちゃんと知る



奈良県 麻生 アート

やや押売の観あれど理想貫かん

シクラメンの鉢抱いて行く春の陽ざしに

初発にも遅れず釣に出かけたり

妻あわれゼニのかからぬ趣味ばかり

ボーカーなら降りてもいよう星まわり

かどわかされた児の声がする虹のむこうで

岡山市 浜田 久米雄

人前でしゃべれぬ癖をもてあまし

将来は将来として金を出し

退職へ心残りもなく話し

出雲市 尼 緑之助

追ひ込みのようにニュースの続く暮

ケネディも歴史におさめ初日の出

大阪市 水谷 竹荘

手品のけいこして叱られる十二月

派手な服着ている方が年は上

ピアノまであるに税金滞らせ

大の字に寝る筈金のない休み

京都府 大鶴 喜由

横断のこれがいまいか家近し

花売りの大人の仕草して買わせ

子を二人産んでも財布母が持ち

心あけて待てど反応のないお方

尼崎市 小林 文月

初午ののぼりと死亡ゼロののぼり

寒参り袖に霞が二つ三つ

奈良県 飯降 白香

共白髪口をすぼめて笑いあい

如才ない男であるにもてていず

家元になって醜聞大きく出

奈良県 西辻 竹青

甲斐性なしでよかった選挙違反にはふれず

呉市 林野 甍光

シャンデリヤドレス捌きも馴れぬ娘と

お門違いでしようと仲居の眼が逃げる

元日の旗を見つめている平和

あれこれと云うてた女優も年を取り

門真市 福島 鉄児

大阪に住んで

心ぶらもよしふところは淋しくも

ネオンうつして汚水の美しく

岡山市 服部 十九平

京はよしバスのガイドも京訛り

出目金が手厚く子等に葬られ

女子大のトイレに若い師の似顔

鍍戸を漏れる冬日へ蠅の臨終

岡山県 大森 煥句楽

本年もよろしく後は借る話

離婚してまで二度目の舞台踏みたいの

枕頭へのんのん育つ子が並び

西宮市 若林 草右

入獄も経歴にして立候補

定退へボーナス月のあじけなさ

熱帯魚の異名をとって冬ごもり

岡山県 田村 藤波

国訛りまる出しにして無い悪気

狂人の喋った事が適中し

児島市 本田 恵二朗

とことんまで落ちて都会のゴミと化す

こけし古さびて愛の巢のしづけさ

千手観音が踊り出したような老母

京都市 松川 杜的

尾灯大きく揺れて今日の恋終る

気兼ねなく歌うて妻と二人きり

鳥取市 森本 法泉子

京の街なにを売るのが戸を閉めて

だみ声で首相数字を押しつける

病棟の下を連呼は容赦せず

京都入院一カ年

街路樹の姿再び冬になり

堺市 高崎 雄声



ない時の金は百円でも光り

遠慮なく欠伸の出来る味気なさ

島根県 藤井明朗

大雪の予報へ値上構え見せ

いい年を祈る娘も適齡期

岡山県 永松東岸

レタスなら噛める入歯をわびしがり

納棺へ貸してた句集を入れてやり

池田さん見たいな返事子にしとく

去声されつくして停年退職し

臨時ニュースたくあんくわえたままで聞き

倉敷市 野田素身郎

保守党支持株主の一人にて

忘年会いやいや出てるのも唄い

ケネディ大統領暗殺さる

残業残業大統領の死も知らず

岡山県 池田古心

豊作を祈った甲斐が棄てした

インタービュー涙もろさの声がのり

大阪府 早川清生

岩登り夫の声が頭上から

住宅に入りいっせいに姪み出す

傘さして出ただけ昨日との違い

五十路を勤めひとの家の裏通る

やや無智な娼婦故郷の霧をいう

大阪市 西出一栄

おしきせの桁が外れる松の内

かるた会老眼組が勝ちました

加賀市 中松恒雄

ちょっと下駄履く気程度の自家用車

風と共に去りぬ選挙も公約も

宴席で一滴も飲まぬのも勇氣

借る苦労返す苦労の一生か

大阪市 橘高薫風子

十二月子のやわらかき蹠(あしのうら)

恋人の膝は檸檬レモンのまるさかな

伊勢にて

磯笛の細きは海女の年寄れる

煮凍りよ少年の日は貧しかりき

土に字を書き残し入る試験場

下関市 中村九呂平

みんな出て二度の勤めも握手で出

演説の下手くそだったのが次点

昇給辞令突き返えしたいほど気取り

米子市 石坂新雪

私大でもゆくかと親をおどすなり

松江某亭にて

宍道湖の小波広間へ通される

大阪市 西川 晃

若者がぬぼっと佇てば不気味なり

立読みのこいつもヌードだけを見る

無常とはダウの安値を聞くところ

絶景へ僕は汚点のようなもの

ペラペラとしゃべり自分を見失う

神戸市 仲 どんたく

ぶぶづけの音が深夜の女部屋

ケネディ死す

陣笠もそれから撃たれる夢を見る

夜の門捨ててマッチは捨てて入る

平田市 久家代仕男

妻死んで晴れた日のなき台所

傷心をさとられまいと髭を剃る

凡庸で狙われもせず今日も暮れ

大阪市 本多柳志

町長になりたい顔の年賀が来

又一つ地蔵が増えた鶴見駅

茶毘の煙三池の月もけぶたから

出雲市 原 独仙

尋卒の局長村に親しまれ

余っ程近眼なめるように読み

レコードが鳴り鐘も鳴る奥の院

西宮市 野呂鶴汀



その中で貧乏人の子が遠慮

金ない恋が実って共稼ぎ

新潟県 高野むじな

新安値ですと銀行ぬかりなし

ポーナスの記事読み捨てて麦植える

大阪市 石倉旅風

松の内飲めない客が先に来た

じいちゃん怒らはれへんと知っている

大阪市 魚住満潮

続西成界わい

かくれんぼ良寛さまになってやり

算盤を置いて弁護士ひきうける

風の便りに父の死も母の死も

社会科の勉強十五で子を姪み

愛媛県 村上旭童

借金が暮らしのむちとなり四十

いつ暇があるのか冬の花咲かせ

いつからか朝の若さを見失い

神戸市 傍島静馬

ためになること云うて年寄りきらわれる

新聞少年は書かれ牛乳少年はとかれ

社用旅客を帰した飲みっ振り

本物の雪にはスター慣れていず

出雲市 野村岬月

風揚げた頃と変らぬ空のあり

発車ベル旅情のそばをせきたてる

布施市 森下愛論

家計簿の赤字エンビツかじられる

利にうとい男で浪花節がすき

大阪市 河井庸佑

初釜へ見栄いっぱいに着せて出す

できぬ子の丸は大きくつけてやり

仕事する心算はもとからない初出

大阪府 谷沢好祐

求人難だけど四十に職は無く

善峰寺

京都市もキリに五葉の松の寺

愛媛県 榎紫光

募金箱ミンク素知らぬ顔ですぎ

療養の身で懸賞の酒を当て

青森市 工藤甲吉

救急車うなり都会はたそがれる

ライターを器用に使う長い爪

感激は短かく離婚話が出

豊中市 林夢虹

女よ知るまい男は鳩と蛇の心持つ

情熱の跡もみせずに惹きさむ

籠を出ればカナリヤの声の小さし

大阪市 今西生薑

悪妻と女盛りをこきおろし

せんど苦勞させてと別れたくない瞳

銭湯のかんかんキロでなじめない

京都市 室井八九寸

話すぐ話に例え京言葉

他所産も上賀茂名乗る駅すぐき

器みな清水焼きの日本髪

清掃車も清き一票をPR

岡山県 横山一声

せわやきがうちの用事はして呉れず

額にあげて見たけど横書の表彰状

小松市 関戸宗太郎

若さすりへらして建てた家で病み

新国道外科医またまた増築し

ポーナスで今更ながら知る格差

美祿市 安平次弘道

妻の死を喜ぶ者がいる不幸

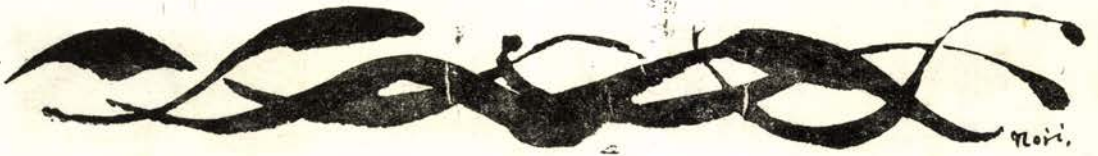
三権分立だが疑獄はもみ消され

実力者足して二で割る政治をし

宇部市 平田夷男

早足がジングルベルに乗る師走

アルバムに女へケチをつける妻



すき焼が匂うて宿題はかどらず

諫早市 川岡 靈眼子

力道山の死

ショーでない暴力リング外で鳧

腹の子に済まんこの世の旅を終え

ルビー、オズワルドを倒す

吸取紙のよう悪消すに悪のしみ

貝塚市 杉 本 一 鶴

総理の背伸び足許ルスにする

ハンサムと云われやせぎす苦笑する

富田林市 浅 川 八 郎

意思表示寡言なれども男の児

タイミングとてもよかった薩摩芋

岸和田市 内 藤 さ き 子

親切が平気で出来る癖がつき

出しにくいところへしまった体温器

枯れてゆく心をつつむものが無し

青森県 木 村 涼 人

金銭で保釈が何の人づくり

悪銭をボス経営のバー招く

屋台酒青函航路汽笛吹く

芦屋市 唐 崎 専 翁

ジャックリン^{ひそ} 窃かな室で祈り泣き

我がものとなったらテレビ古い型

倉吉市 奥 谷 弘 朗

汚れなき心へ月の丸いこと

栄転の予報へ立ったり坐ったり

言葉から見えぬ心が判り出し

兵庫県 遠 山 可 住

背なの児に西日を受けてまだしゃべり

いつからか子供を寝かす役になり

元地主の塀が大きな音で倒け

兵庫県 河 原 みの る

腹背に敵を受くるに細すぎて

博文をもう疑いの目ですかし

姫路市 隠 岐 不 醉

結局は賛成するのにいや味言い

落書きも心の憂さの捨てどころ

鳥取県 清 水 一 保

チップほどあればと妻の酌で飲み

取入れを終り背広が又似合い

キリストの教えとは別イブが好き

出雲市 中 川 晃 男

芋も食べきれいな嘘もつける口

母と娘の話へ父は浮き上り

松江市 柳 楽 鶴 丸

九十才子供も孫も死にました

帰朝談聞きあきました物価高

スポーツは嫌い女房の太い足

京都市 都 倉 求 女

文豪の小説子の名を借りている

クリスマス力を入れてネオン点く

それ妥結他人のボーナスまで弾き

兵庫県 大 江 秋 月

現実はそのでなかった新入社

安全帽しかと地下へつづく道

教養をくずさぬ程の酒の量

観光船お義理につけた救命具

大阪府 松 田 半 月

マラソンにトップは斜に風を切り

今治市 越 智 一 水

金貨の子の絵内でも貼ってやり

長男がいて僕々と長女云う

貧農の片手間と言う紙どころ

竹原市 山 内 静 水

母性愛胸をはだけてはばかりず

うらやまれるボーナスごとと引いてあり

マネキンも裸になった店じまい

ボーナス袋見せ借金を払って来



石原青龍刀氏

石原青竜刀を語る

高木夢二郎

青竜刀というペンネームが彼にはピッタリする。是ほどペンネームと実物が一致するのは他にあまりあるまい。

川柳現代一二号に、青竜刀の風貌が窺われる一文がのせてあるので一節を拝借して見る。

「わが歌こえの高ければ、酒に狂う」と人は言う。与謝野鉄幹の詩を愛唱したという、石原青竜刀氏の学生時代から、中国総領事館在勤中から退職までの人あらししVが、わががうた声の高ければVということも痛快な一文が、全専売労働組合の機関誌「職場文化」一一号に載っている。△在学中（拓植大）かつて片山内閣の農相になった平野力三らと、アジア主義運動に挺身、興亜会から、わが国学生運動の始りともいふべきアジア学生会に参加、この間の熱血漢青年青竜

刀の面目躍如たるものがあるが、後藤新平、永田秀次郎、簡井凡夫、宮崎竜介、鹿子木員信、帆足理一郎といった有名人数登場して、こ

の学生たちのアジア主義運動が当時の国際情勢下にあつて、特に日中間は二十一カ条問題で險惡を極め、若もの達の純情だけでは抗し得なかつたようである。拓大を卒業してから外務省入り、紋付袴で由井正雪ばりの蓬髪をふりかざし、場所もあろうに霞ヶ関へ初登庁したなど、その蛮骨ぶりなどいかにも青竜刀らしい。

―下略―

その後、ワンマン吉田茂が総領事として赴任して来た。その英国風偽善的態度に反撥して退職したらしいが、その辺、上司の鼻息ばかり窺つて汲々としている現時のサラリーマンとは比べものにならない青竜刀の真骨頂でこの精神が

今の「諷詩」運動に及んでいる
前置きが長くなったが、この切
から、川柳（諷詩）と石原青竜を
を語ろう。

大正十三年、「白頭家」（大島
濤明主宰）という柳詰が大連から
出された。丁度、森田一二や田中
五呂八、木村半文銭、らの新興川
柳運動がおこっていた頃である。

筆者が、生平可な、川柳革新論？を白頭家に送ったところ、湯本白庵（青竜刀曰う、白庵は川柳俳詩論の元祖の由）が、猛烈な反論を書いた、爾後、八、九カ月間に亘って駁論の応酬をした。他誌から「白庵、夢二郎追いつ追われつ」などと茶化されたが、間もなく、湯本白庵が死去。そこへあらわれたのが青竜刀だった。確か「通」だったか「蒙古風」だったか？（何れも大陸で発行されていた

柳誌。筆者保存目下番傘の「満洲柳壇想起片々」資料の爲字和川木耳氏に貸出中考証不能）青竜刀が白庵の遺志をついで、川柳非詩論を大上段にかまえて、打ち込んで来た。筆者もそれに応えて数カ月の間、世迷いゴトをならべた。これがそもそも、今日まで続いている青竜刀と筆者の悪縁の始りである。昭和三十五年五月三日、東京都品川の浴場会館で、第一回現代川柳連盟会が開催された。席上で「ライバルの青竜刀です」と声をかけられたのが初めての対面である。

彼に言わすれば、昔は、夢二郎が、革新で、戦後は、青竜刀が革新であるとの事である。あるいはそうかも知れぬ。そこで青竜刀の川柳非詩論なるものを御紹介しよう。

「『松原の茶屋はいづるが景になり』。この古川柳の対象になった風景は、ホトトギス一派をしてい
わしむれば、明らかに俳句のものか
だ。それを川柳は全然別の立場か
らこのように「うがち」の表現を
している。うがちは機智（ウイッ
ト）であり、詩（ポエジイ）では
ない。このような非詩的な文学も
あるということを発見した川柳の
創始者は世界的——といってわる
れば日本の文化史的にいってまさ

に敬服するべきである。惜しいかな川柳界に人無きたために、明治以来の復興運動者の一人としてこの根本に気がつかず、なまぬるい「人事詩」に低迷して今日に至った。彼等は川柳のレーゾレデートルに考え及ぶ力を持ちあわせなかったという外あるまい。人間には物事を肯定的詠嘆的に考える頭脳と否定的批判的に考える頭脳とがある。花を見て美しいと思うのが前者であり、「ナアにあれば蝶や蜂をさそうためだ」と考えるなどは後者である。同一人で同時にそのような相異なった頭脳を有するところに人間の永久のなやみ（あるいはおもしろさ）があるのだから、川柳発生以前においては、前者の想念だけしか詩歌詠詠の対象にならなかった。もちろんそれ以前俳諧連歌の附句にそのきざしはあったが、それは川柳のうんじょう時代というべきである——中略——古今集の歌は非詩的ではあるが、川柳の「うがち」が無い。ムシロ「狂句」的である。おそらくこの時代は、まだ川柳的想念とそれを表現しようという欲求が弱かったのであろう。徳川時代になって人智の進歩と思考の複雑化にともない、従来詠詠の対象とならなかった部分の非詩的想念を表現する欲求が強まったのに応じて、こ

に独立した詩型、すなわち川柳が発生した。この発生理由が、とりもなおさず川柳存在理由であり、今日においても変らないものである。(川柳祭、昭二二、一二月号)

引揚げ後、青竜刀がぶった、川柳非詩論の第一声であった。

俳句は芭蕉以来理論が山積しているが、「川柳は作るもので議論するものではない」と川柳家は口グセしている。詩性を論じたものはあるが大正時代に失敗している。単にユーモアなら他にジャンルがある。川柳の根本的な存在理由は上掲の非詩要素と「寸鉄殺人性」と「うがち」であるといつづけて説いている。

書くことが前後するが、——大正十四年八月、井上剣花坊が満洲旅行して、革新川柳論をぶって歩いた。白頭家の大島濤明、井上葉吉らが、これを肯定するに及んで、大連川柳界は、伝統、革新に二分された。青竜刀は、小林若八と同志を糾合して、大連川柳社を起し機関誌「青泥」を発行して、革新川柳撲滅論で活潑にうごき廻った。ついに「白頭家」は停刊し、微少ではあったが「青泥」は全満唯一の柳誌となり、大いに気を吐いたものである。「青泥」は、九九号を出し(昭和十三年)発展

を解消し全満的規模で「川柳大陸」を刊行し革新、及び反響率系の大同団結を組織した。「川柳大陸」は初め青竜刀が主幹であったが北京へ職場を(華北交通)かえ転居したので、高橋月南が、之にかわった。

北京では、故和田黙念人、堀天津郎らと北京川柳社を結成して、川柳人の養成につとめた。昭和十九年、敗戦の色こい頃、厳しい軍の統制下に反撥を感じ百万奔走し一流の大デパートで「大陸川柳展」を開き救済な戦時下の人心の緩和に一役かったなど、曾て学生時代に学生運動に情熱を燃した青竜刀の面影の再現を想わせてくれた。

○

我がために碌々と云ふ言葉あり
市の上が無く大の字であき
らめる
人慾の最後虚空を掴むなり
制服に女看守の気の安さ
蜂の巣は雨のたまらぬ仕掛けにて
つまらない顔で大正琴屋弾き
人ごみに揉まれ女の酔心地
鬼事を淋しく見てる泣黒子
蟲壳は蟲に鳴かせて煙草なり
敗け戦落ち行く先は祖界也

(句集川柳大学 大正一五年刊)

在満時代、前期作品として、大連川柳会から出した自選合同句集から転載してみた。

敗戦引揚げ後の青竜刀は前記の「川柳祭」の外、「すげ笠」「川柳人」「しなの」「ふあうすと」「川柳研究」「川柳文学」等につぎつぎ、持論を発表して、川柳非詩論旋風を捲き起した。「川柳祭」に、前記持論を発表してから六年後「人民川柳」復刊に参加した。「川柳は他の詩のごとく抒情でなくまたイメージを求めるものでもない。社会批判を諷刺リアリズムによって端的に表現し読者に対して否定精神の共感を求めるものである」と(人民川柳復刊号、現代川柳の意義と方向)論じ、終始変らぬ非詩論をすすめている。其後、「諷詩人」の創刊に当っては「今日既成の川柳も俳句もまた短歌も、すべて老衰の一途をたどりつつあって、ときに起伏する革新や前衛の運動も、暗中もさくを出でないが、伝統と時代との溶合を忘れた、まとはずれのカリモノであり、とうてい新時代の精神に適合すべく若返りの道を見出すことは出来ない。ひとりわが「諷詩」は民族短詩文芸の伝統の中から新しく生れ出ようとする唯一のジャンルである。それがどんなかたちで作品されるかは、これから各人の研究と努力によって、百花齊放的に示現すべきであって成果は必ずしも近きに期待しない。ただのむところはその「若さ」のエネルギーであり「民族短詩文芸」の最高峰という、ゆるがぬ大きな希望の星のかがやきである」と宣言した。

「諷詩」——それは長い青竜刀の川柳非詩論は、諷詩という終着駅までくる道程であった様である。筆者は長い間、非詩という文字に捉らわれずきていたが、ここへ来てはじめて、非詩とは、新しいジャンルの詩を創造するという青竜刀の真意を三十余年にしてようやく、悟った字違きは、自嘲外あるまい。

諷詩と青竜刀の戦後の句考えない葦
「考えない葦」ジグザグとせめられる
雪山へ続け「考えない葦」の列

——諷詩人創刊号——

賠償のせめても富士が残されて

(「タタリ」や「GHQ」より禁止の句)

新憲法嫁大つびらにぶッばなし

人間研究性交体位よりわかるかといえバカソはわからない

蹴出した観光資源ともなれば

日本中基地だと孟母サジを

投げ
肥車ひくとも軍馬にはなるな
マルクスもハシカも済んだ
サア銭だ
待つは恩赦粉屋の娘だろうと
ヘイカ御成り検便なんじを健康にす

○
集ためた資料の五分の一も使わない中行数がない。ここで、青竜刀の現在の川柳関係を一覧して掲筆する。

(1)全電通文化(2)全電通新聞(3)劇場文化(4)道楽(5)アハタ日曜版(6)東宝新聞 其他数個団体。

スマートで 着心地良い

GOLDEN
O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り



川傍柳初篇研究(一一)

丸 十 府 高須啞三味
岡 田 甫 前 田喜代人
川 端 柳 風 岡 崎 重 義
藤 井 和 雄 清 博 美

108 家名が不吉で縁きり喰ぬ也

三 朝

川端「家風に合わぬ」という離縁の理由が成り立たない、それだけのことか。

高須「不明。普通に考えては「家名が不吉で」「縁きりを食わない」とは、事が反対に思えて、句意がとり得ない。

前田「家名が不吉だ」という理由だけでは、縁きりを食うわけにはゆかぬ、何かはかに理由があろう、といった句か。

岡崎「前田説に賛。

清「わからない。

藤井「「家名不吉」で「縁談不成立」なら判るが「縁切り」と言えば、一たん結んだ縁を切ることだから、高須説通り、どうも原因と結果が反対である。

丸「不解。諸説拝見、納得ゆかず。この丁難多く、不勉強を恥ず。

岡田「難句の一。たしか王猫庵主人「縁切寺」(川柳松ヶ岡)の末尾に、この句を

未解句として、外骨翁があげられていたと思う。松ヶ岡関係の句としても「不吉な家名」が判らぬ。但し、松ヶ岡の句として、駄洒解を申せば、鎌倉の東慶寺入りを志して、道を急ぐ人妻(いわゆる「縁切り」)が、無事に六郷の渡しを越えてホッと、普通なら川崎の奈良茶飯(万年屋)か鶴見の米まんじゅう(鶴屋、魚屋)でも食べるところだが、今の身には、その名が不吉で食えぬ……というのではないか。

高須「いま田中彦十郎著「ずいひつ縁切寺」を読んでいるが。その「奈良茶・饅頭・焼餅坂」の項には、この句がなく「川柳補遺」の中に未解句として出ている。しかし、岡田先生解は正解と思う。

藤井「縁切り」馳けこみ嫁、不吉な家名

「万年屋、鶴屋としての岡田解、その広角レンズの正確さに敬服。我々の視野の狭さを恥じるのみ。

109 十ヲ斗大牛な袖でかくす也

眠 狐

川端「振袖芸者、の句振袖芸者とは踊り子で、いつまでも娘らしく装って、相当の年になっても振袖を着ていた。句は、年輩の踊り子が振袖を着て、年を十歳位も若く見せている。また十歳ぐらい年を若く言うて、客に愛嬌をふりましている、という句。踊り子は一種の売笑婦でもあった。

高須「大きな袖で、十ばかりかくすなり」だと思ふ。すなわち大振袖の着用で、年齢を十歳ばかり若く見せている踊り子のことである。

前田・岡崎・清・藤井「賛。

丸「高須説よし。

岡田「異議なし。

110 はんま千鳥の友呼ぶハづぶに儀太

鼠 弓

川端「儀太」はギダで、義太夫節の略称。「づぶ」は「甚だしく、きつく」の意だから「はんま千鳥(浜千鳥)の」という

のは、義太夫節だという意味か?

高須「「はんま千鳥」は、もちろん「浜千鳥」で、友呼ぶ浜千鳥である。だから、そんな連中が「友呼び」あって集まるのは素人義太夫だ、ということをもつてまわって言ったのではあるまいか。

前田「「づぶ」はづぶ六の略で、大トラのことと思う。従って、浜千鳥が友を呼ぶのは、酔っぱらいが義太夫をうなっているのに似ていると、解したいが……。

岡崎「高須説に賛。

清・藤井「賛。

丸「高須説の如く解している。但し、この上五中七は、何かの文句取りと思う。二編にも「風の上たる古簾づぶに儀太」の句がある。この上十二字も文句取りらしい。岡田「「づぶ」は礎稿通り「甚だしく、まるで、全く」の意だから「づぶに儀太」は「まるで義太夫をつくりだ」という事。丸氏のあげた「風のあげたる古簾」は、謡曲「葦刈」の「雨の芦辺も乱るる片男波、あなたへざらり、こなたへざらり、ざらりざらり、ざらざらざと、風の揚げたる古簾、つれづれもなき心、面白や」の文句取り。ところが、別に「葦刈はづぶで義太だと謡の師」(安四叶一)という句がある。安藤幻怪坊の「謡曲と川柳」の略注には、「この一曲は、まるで義太夫のような節回しや文句である」と、謡の師が弟子に教えるが話したのである」とあるが、不肖にして小生は謡曲を知らず、その「葦刈」の節回しが、義太夫に似ているや否やを知らぬ。一度ぜひ聞いて見たいと思っている。

さて主題句の「はんま千鳥の友呼ぶ声は：」は、同じく「葦刈」に「沖のかもめ磯千鳥つれだちて友呼ぶや」の一節があるもので、それをとって口調よく仕立てたものと思われる。とすれば、すべて謡曲「葦刈」に關係があり、謡曲「葦刈」は、まるで義太夫そっくりの節回しだという意味になる。

111 実名ハしらず互に懇意也

五 鶴

川端 〓 不明。故事と思うが、親の關係は知らず、子供同志親友ということか。

高須 〓 遊里で知りあった同志。「初会客名前は荒木又右衛門」で、無理に本名なんか知りあう必要はない、顔があった時だけその場かぎりのツキアイをしている、毒にも薬にもならぬ友人、しかし長く逢わないと、オヤ病気でもしているのかナ、と多少気になる友情？が感じられる。そんな「実の名を知らない友達」が、誰にも一人や二人はあるものである。「撞球場で、麻雀荘で、近頃では球場で、そんな友人を持てている人がある。「やア、また逢いましたナ」「はウ、今日は坊ちゃん連れですナ」なんていうめぐりあわせがある。

前田 〓 高須説に同調。遊里なんかより。一ぱい飲屋の方がびったりするが……。岡崎 〓 賛。よく同じ場所を顔を合わせるで、いつの間にか懇意になつてゐるのだが、改めて紹介されたり、正面きつて名乗りあうこともないので、どこの誰とも知らない友達……。

清 〓 諸説に賛。
藤井 〓 この場合、場所は問題ではない。

丸 〓 いや、この句は遊里の句である。解は高須説でよいが、当時の遊治郎は、実名でなく、表徳をふりまわしたから、互に実名は知らなかったのである。

岡田 〓 高須・前田説のように、あらゆる場合に通じる句であるが、この句としては丸説であらう。

112 白酒に酔 洛外へおん出され

五 雲

川端 〓 「白酒」は三月節句の雛の供物。

「洛外」は京の市街の外だが、ここでは飾り立てた雛の座敷を洛中と見たて、それに對して外を洛外と見立て、白酒に酔つて雛座敷の外へ追い出された、という句で、雛の客は女子供が主であるから、止むを得ない結果であらう。

高須 〓 雛飾りは、すべて宮殿のツモリで飾られる。だから、そこは「洛内」であつて、白酒で酔つた人などは、その部屋にはおいておかれぬ、すなわち「洛外へおん出され」てしまふのである。

前田 〓 岡崎・清 〓 賛。

藤井 〓 追い出されたのは、男の子と見た。雛座敷に男の子はオフリミット。然も白酒の乱暴飲みで酔つたのだから、女の子連中の治安維持法にひかかつて、追放されたのは当然の悪戯っ子。

丸 〓 諸説に尽く。

岡崎 〓 高須説穩當。

113 早追ひだのに南無さんと嫩かくれ

眠 狐

川端 〓 「早追ひ」が判らない。馬の早馳けのことか？ 松ヶ岡へ急ぐ嫁が、追手と

感違ひして「南無三しまつた」と物陰にかくれたという句か？

高須 〓 「早追ひ」は「早打ち」と同じ、略して「早」とも言った。句解は、鎌倉へ急ぐ嫁の後へ「早打ち」が来たので嫁は驚いて、道ばたにかくれた——それだけの句と思う。

前田 〓 高須説に賛。「南無三」とが、嫁のあてをぶりを現わして、面白い。

岡崎・清・藤井 〓 賛。
丸 〓 高須説でよい。松ヶ岡へ行く嫁は、そこへ着くまでは戦々兢兢であつた。

岡田 〓 「早」は、カゴカキは二人でなく四人立ての威勢のよいものであつた。それで、逃げる嫁は、それを自分への追手と感違ひしたのである。(ワウ)

114 たった今留った川へ仲右エ門

泉 河

川端 〓 「仲右エ門」は擬人名かとも思うが、不明。御教示を乞う。

高須 〓 「今とまった川」とは、大井川の川留めだと思うが、そこへ「仲右エ門」が来た、というのが判らぬ。

前田 〓 とまったから中止。それで「仲右エ門」と言ったものか、わからぬ。

藤井 〓 無理に解して「仲右エ門」は仲人の擬人名で、家出した嫁を、役目柄追っかけて来たが、川留めにあつて、長大息している句ではないかと思う。

丸 〓 無理に解したという藤井説でよい。

が、それを松ヶ岡の句とまで言わなかったのは、残念。この句は、逃けた嫁を、てっ

きり鎌倉にとらんで、仲人（その他）が追っかけ、やっと六郷まで来たが、たった今その日の渡しに留まった（終わつた）ばかりで、もう嫁に追いつくことは出来ない。息をきらして呆然と立つ仲人の、ゆがんだ顔が目につく。

岡田 〓 六郷の渡しは、もと橋だったが、度々の出水で、修理費用が莫大もなくかかり、元祿の頃から渡船となつたものだが、渡船でも増水になれば川留めとなり、また時間的にも終船があつたはず。

高須 〓 「ずいひつ縁切寺」（田中彦十郎著）の七五に、ちゃんとこの句が出ているのを、見おとしていた。失敗。

藤井 〓 めくらめつぽうに解して、先輩諸氏の解けないのが解けたのは、うれしかった。

115 口で切るのがめんどしく鎌で切り

龜 遊

川端 〓 そのものズバリで、解の要なし。小包など早く内容が見たくて、ナイフでブツブツリというところ。

高須 〓 ハサミで切るのが面倒で、口で切つたというのなら判るが、それが逆で「鎌で切る」というのだから、あまり「そのものズバリ」とは言えない。何か、他に解がありそうな気がする。

前田 〓 小包、手紙等の封と限定しなくても、このようなことは、よくあると思うが「口で切る」は少し下品。

岡崎 〓 本来「口で切る」のが常態のものを「鎌で切つた」というのだから、その口で切るべきものが判らなくてはこの句は解

けない。『談合ならず刃傷沙汰』ともとれるが、よく判らぬ。

清「鎌で切る」は、刃傷ではなく、鎌倉松ヶ岡で、この句は嫁が松ヶ岡へ逃げ込んで、縁を切った、という句と考える。

藤井「清説明解、敬服。」

丸「清氏、よく解かれたり。いくら口で言ってもラチがあかぬので、面倒くさくなり、鎌倉へ逃げて、手とり早く（といっても、足かけ三年はかかるのだが）さばきをつける、という句である。

岡田「このところ松ヶ岡の句が多い。清説通り「鎌」は「鎌倉」の暗示。

高須「ダブル・エラーで顔色なし。前述

「すいひつ緑切寺」に、説明はないが、この句（三二六）で出ている。お若い清、藤井両君のフィン・ブレイに救われた感あり、不勉強を恥ず。

116 よし原に居るから里見山とい

鼠弓

川端「不明。吉原を里と呼び、遊女のアリス言葉、里言葉というから、何か吉原関係の句と思うが、判らぬ。

高須「変な解だが、相撲取りが吉原に来たのを見て「あれは里見山だ」とシャレたという、それだけの句ではないか。

前田「高須説賛と言いたいが、少し不安な気もする。「里見山」に何かないか。

岡崎「不詳、大辞典でも、里見山は「不明の語」としている。

丸「難句、未だ解し得ず。

岡田「難句の一、但し、かねて考えているのは、大川（隅田川）から吉原へ入る山

谷堀の角に、ちょっと小高い待乳山の聖天がある。吉原へ行く連中と、行かぬ連中と

二手にわかれ、後者は待乳山で風景を楽しむ。吉原へ行った連中いわく「あいつらは話せねえ、今ごろ待乳山あたりか。おいらは吉原にいるから里見山だアな」などと笑

っている景ではないか、ということだが、大駄劣解、信すべからずである。

高須「それで、思いついたのだが、吉原にいる遊客が、ちょっと高く見える待乳山を見て「あれは里見山だな」とシャレを言っているのではないか。

117 股引ハそこら切さと内儀いい

亀遊

川端「「股引」とは義太夫の異称で、淨ルリの品位を諷した俚諺からきている。

「内儀」は町家の妻女に対する呼称。で、句意は、義太夫のケイコは「そこらできつて」店の方に出て下さいよ、と妻女が亭主に言っている、という句と思う。

高須「義太夫なんて、むずかしいものだから、いくら一生懸命にやっていた、それよりは出来やしない、つまりそこらに限度さ「切りさ」と、妻女に言われている、句と見たいが……。

前田「確稿に賛。

岡崎「高須説。但し、言われているのではなく、内儀が陰口をきいているニュアンスが感じられる。

清・藤井「岡崎説が、一番妥当と思う。

丸「遊び好きの亭主「今日は用事が済めばまっすぐ帰る」と、股引姿で出るのを、内儀せせら笑って「股引は用事までさ、用

事が済めば、股引をぬいで、どこへ行くか私にはチャンと判っているのさ」と言った場面。もっとも、股引姿で遊びに行った男だつてあったことは「ふんごみでよもやは女房油断なり」という句があるので、それも知れるが、それでも股引姿の登楼客は、少なかつたであらう。

岡田「その通り、真闇へ紅葉見物などと、股引姿で出て行く亭主へ、千里眼女房のせせら笑いである。

藤井「「股引」を、股引そのものと考えれば、何でもない句を、考えすぎて失敗。古川柳解のむずかしさがまた一つ判った気がする。

高須「全くその通り、考えていけず、考えずにいけずで、始末におえない。本解はうっかり確稿に引きずられた形で、確解を読まずに考えたら……と思うと、今後のよい参考になった。

118 廿人木にすると書茶の字也

五葉

川端「茶の字の分解。それだけの句。

高須「「二十人木」はよいが、それがなぜ「木にする」か、ちょっとひっかかるものがある。「茶」の字の分解にしても、それだけではないと思う。

前田「同感、何かウラがあろう。

岡崎「その通り「茶」の字の分解だけではない。浅草親音の境内にある二十軒茶屋の句である。その茶汲み女達は、口説きようによつては裏口営業もした。それで、そこへ来る客は、その娘達を張りに来るものが多かった「木にする」とは、男のエレ

品質優良

タチカワペン

TACHIKAWA PEN

タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画紙

大阪市東区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社

クト状態を表現したので、

べんべんとおやかして茶をのんでいる

(末二二)

などという類句もある。——水茶屋については、岡田本に詳しい。

清・藤井「岡崎説で、よく判る。

丸「岡崎説よし。但し「木にする」をエレクトまで考えず「氣にする」の秀句ぐらに見ておきたし。

岡田「小生は「木にする」を、極度のエレクトの形容と見る。拙著に一九の洒落本など引いて詳説してある。岡崎説正解。

119 団子がなひとつ命に及ぶ所

五盛

川端「「団子」は団子坂の略。本郷千駄木から東へ下る坂で、その坂の下に有名な藪ノバがあった。で、句解は、団子坂でない、と、手打坂になる所だった、と「手打」

を「かつ命」にかけた句と思う。

高須Ⅱ不明。礎解もコジツケ解の気がして、納得できない。

前田Ⅱ「かつ命は」手打ちではない。ノドがかわいて、命があふないこと。それで団子を食べる八月十五日の月見、すなわち吉原の紋日がないと、収入が少なくてひあがる、ということ、大グサに言った句ではなからうか。

岡崎Ⅱわからない。

清Ⅱ礎解に賛成。

藤井Ⅱ「花よりも団子に息子骨を折り」で、月見の工面をしないと、オイランから窮命される。女にいい顔をしてもらいたいために、色男またつらい哉という句か。

丸Ⅱ「かつ命」とは飢渴にせまっている命で、団子がないと、飢え死にする所であった、とは文字通りの解であるが、それが何故かはわからぬ。何か故事でもないか、難句の一。

岡田Ⅱ難句。故事がないとすると、小生はこう考える。八月十五日は、八朔（八月一日）に次ぐ吉原の大紋日で、現今のクリスマス・イブの切符を買われる如く、客は遊女からセビられる。その月見の紋日に抜けて、フラフラの朝帰り男、女房はブリブリで朝飯はおろか、昼飯も食われない。亭主腹ペコだが、自分が悪いのだからどうにもならぬ。台所を探がし回って、やっと昨夜の月見団子の残りを見つけ出し、やっと飢えをしのいだ、すなわち「団子」で「かつ命」をのがれた、でどうだろう。岡崎Ⅱ岡田先生解いただき。それより他ないと思う。

藤井Ⅱこの句、岡田先生解が無難。小生は吉原と考え、先生は自家と考えたわけ、「明日の団子」とは思いも及ばなかった。

二月十五日開

120 色直しにだっこしやうく

鼠弓

川端Ⅱ「色直し」は、白小袖を色小袖に着かえること。結婚式で、三々九度の杯事が済むと、花嫁は綿帽子をとり、色直しをする。だが、この句は、吉原の八朔を、それに見立てて「だっこしやうく」と言っているのは見物人の野次と見たい。

高須Ⅱ嫁に行く娘の「色直し」に、いままで可愛がっていた兄の子供が何か（親戚の子供でもよい）が、「抱いてくれ」とダダをこねている情景ではないか。「色直しだに」が利いている。今までは花嫁姿で、子供もちよっと近寄りにくかったが、それが次の間へ来て「色直し」をしたのを見て、子供はすぐ「だっこく」と甘えた、という句と見たい。

前田Ⅱ「色直し」を、子供が生まれて百日後、産婦と産児が色小袖を着ることにする。類句に

色直し前に一口乳をのませ（タル一六）がある。婚礼の句にしては、少し色気がなさすぎる。

岡崎Ⅱ連れ子をしての再婚と見たい。色直しの次ぎは床入りなのに「だっこしやうく」と、その子に甘えられている、のではないか。——但し、子供を連れての再婚ごときに、白小袖を着たかどうか、疑問だ……

清Ⅱ婚礼前に、愛の結晶があつて、式を

あげる日に、その子が母親に甘えている、情景と考えられないか。

藤井Ⅱ結婚式も初めのうちは静かだが、色直しになり、酒がまわると、そろそろワイ談まじりに、花嫁をからかう連中も出て来る。この「だっこしやうく」は、酔った客が花嫁にたわむれる酔態と見たい。田舎の結婚式に、よく見られる景だ。

丸Ⅱ岡崎説がよいと思う。「色直し」は礎稿にいわれる通りであるが、式服を略装にかえることをいうから、再婚説で差支えない。ちなみに、前田氏引用の「色直し前に一口」の句も、連れ子をしての再婚の句である。

岡田Ⅱその通り、岡崎説でよし。

121 江の嶋の留守に妾の高笑ひ

閑々

川端Ⅱ江の島の弁天様の縁日は、己巳の日で、二カ月に一度あるが、この日検校が参詣するので、検校の家は留守になる。それが「江の島の留守」である。盲人は疑い深いし、耳が敏感だから、平常はつつしんでいる妾も、その日は安心して情夫を家に入れ、自然高笑いの声も洩れようというものの。——女は、もちろん金の力で妾になっているのである。

高須Ⅱ検校の妾に間違いない。手当てがよいから、おとなしく囲われているが、その検校の留守中ぐらいいまいテンヤ物でも食べて、高声で笑ってみたいであらう。情夫とまで考えるには及ばまい。

前田Ⅱ賛成。「高笑ひ」は状況をよく出している。

岡崎・清Ⅱ我々は礎稿の方に賛。

藤井Ⅱ諸説それぞれに面白い。盲人はシツト深いから、その留守に情夫と笑い合う川端説、フダンはつつしんでいる笑い声を高くあげる高須説、どちらをとるか読む人の心々であらう。

丸Ⅱ片輪者のヒガミで、邪推ぶかく、シツト心の強いのに、気づまりな毎日をすごしている妾、今日は何の気がねもなく、心から笑うことが出来る。高須説通り、それだけでよいのではないか。

岡田Ⅱ丸説に賛。それだけでよい。

○ 輪講訂正（前々号誤植）

13頁下段二十一行目「最中、で」ハ「最中で、」

14頁上段二十一行目「モメン」ハ「モンメ」

同二十七行目「五島」ハ「五島」

15頁上段十四行目「一枚等を」ハ「一枚絵等を」

同二段十九行目「下思議」ハ「不思議」

同三段十一行目「寛米銭」ハ「寛永銭」

同下段二十七行目「座敷」ハ「座敷」

輪講訂正（前号誤植）

18頁二段九行目「……ほしですかなハ……」

ほし」ですか

同十行目「女ひでり」の句は並字

21頁二段二十六行目「……なんす」などハ……なんす」など

バック・ナンバー

本誌のバックナンバーの株が天井知らずに上っていますが、趣味的に製本される人達のために出来るだけサービスしますからこの機を逸せず在庫の有無を往復ハガキでお問合せ願います。



移りゆく世態

——去年の言葉から——

北川 春 巢

一 はじめに
「寝正月」という句を年賀状に書いて出したおかげか、この正月は訪ねて来る人もなく、ただ元旦に生々庵氏居の「おめでとう会」へ出かけただけで、全くの寝正月をさせてもらった。寝正月とはいっても、実際は寝てばかりもおれぬので、古い雑誌などを取り出して読む時間がふんだんにあったわけである。去年の「川柳雑誌」を読んでいると、川柳に現われた去年の事どもが次々と思ひ出されて来るのであった。その中でも特に頻りに出て来る言葉は、特に頻りに

人々の使った言葉であり、特に頻りに人々の頭の中を支配した言葉である、といつてよからう。
そこで私は、これら若干の「言葉」から、去年の事どもを振り返り、またそれについて少しばかり考察を加えてみようと思うのである。

二 去年の言葉

(1) 豪雪

豪雪に暮れて豪雪に明けたのが去年である。この「豪雪」という言葉は新聞が発明した新語であるといった人もあったようだが、チャンと見出し語に出している辞書

もある由である。「川柳雑誌」に現われるのはおそく、四月号（二月十五日締切）に俄然集中し、五月号まででピタッと止まり、六月号にはもう「豪雪」の句を作っている人はなかった。いかに「豪雪」の被害に苦しめられたか、またいかに人間は忘れっぽいものか。あるいはまた人間は身の廻りの環境に応じて心の反応も変わるものか、ということの証明にもなるだろう。

「豪雪」の句の例を挙げよう。

豪雪と名付け雪景色とは見ざる

みのもる

実際にあの豪雪を見た人は、豪雪という言葉は「すさまじさ」をビツタリ現わしたよい言葉であると感心して書いていた。

豪雪になるぞとネギはキロで買

い 味 平

豪雪がラッセル車庫にとじこめ

る 遊 星

豪雪へ社長もサロンパスを貼り

宗太郎

豪雪の世界へケロリと月が出る

緑之助

作者はいずれも裏日本の方々で、身を以て豪雪を体験された方である。

豪雪の新語を生んで降りつづき

恒 雄

「豪雪」が新語ではなく、既刊の辞書にも出ている言葉であることは前にも書いたが、多くの人は新

聞で見、ラジオで聴くのは初めてであったようだ。また「豪雪」という言葉は使っていないが、あさ夕刊ばん朝刊の雪続く

恒 雄

雪喧嘩ここはあんたのとこの雪

同

天気予報情らしい程雪降らす

宗太郎

雪おろしましたと飲茶街飲ませ

卯 翁

などと体験の句もあった。また路

郎先生が本誌四三二号「名句と難句」欄で称讃された、「北陸豪雪」と前書のある、

積雪一丈その下の金魚の朱

薫風子

という詩情溢れる句も「豪雪」の産物であった。

(2) 人づくり

この言葉は池田首相の議会演説に出た言葉で、本誌三月号から現われて以後消えることなく、今年の一月号（十一月十五日締切り）まで続いている。

「花づくり」といえば「花を作る人」を指し、「花づくり」とい

えば「花を作ること」を意味するよ

うに、本当は「人づくり」とい

わねばならぬ所を首相はわざと「人

づくり」と濁らずにいったので問

題になった。新聞も括弧をつけて

「人づくり」といつている。しか

し句はいずれも「人づくり」とな

っている。その教育上の問題や政

治上の問題はここには論ぜぬことにして、川柳作家の「人づくり」批判の句を挙げよう。

宰相の今更おそい人づくり

草 右

テストドリル子を追ひ立てる人

づくり 一 木

人づくり儲けることと抱き合

せ 柳 児

人づくり煙たい人も出来ように

阿 茶

うちの子をすべらせ何が人づく

り 王 石

違反した人が唱える人づくり

水 洞

工事工事へ人づくり等云うとれ

ず 季 賛

人づくり先ず池田さん襟ただせ

一 哲

人づくりその膝もとの偽証紙

阿 茶

人づくり教育勅語見直され

静 馬

人づくりしかし殺人続く日日

萩 路

転んだら起きるまで待つ人づく

り 珠 笑

今までは何しとったんや人づく

り 恒 明

最後の句は句会で課題吟として

作られたものであるが、ともかく

も「人づくり」に対する川柳作家

の批判にはきびしいものがある。

(3) バカンス

おとしはレジャーという言葉

が流行した。(本誌第四二二号参照) レジャーは英語で「ひま」という意味であるが、バカンスはフランス語で「休暇」という意味だ

そうで、レジャーよりも一まわり大きな消費を伴うもののようにである。消費景気をおおるマスコミの広告などに使われたのが元であらう。

この語が夏前からはやはり出し、九月号の雑誌から出はじめている。バカンスはフランス語では半月も一月もの休暇らしいのだが、我々の使っているのはただ「レジャーの大型のもの」ぐらいの意味のようだ。

バカンスで会った相手も連れており
人不足バカンス族の知らぬこと

涼人

バカンスに健気乙女のアルバイ

ト 繁太郎

妻のバカンスあくる日は寝てしま

まい 愛鳩

バカンスどころか子等は成長期

同

小娘にバカンスしないとおちよく

くられ 一声

「バカンスする」という動詞までできている。「ハイキング」に対し「ハイキングする」という言葉ができたようなもので、しまいに「ハイイクる」などもできたが、「サボる」もこの例であり、「バカンス」も余り流行すれば将来こ

ならない方もできるかも知れない。

冷蔵庫バカンスにして秋が老け

和三四郎

これは「バカンにする」といういい方である。

(4) B・G

B・Gとはビジネス・ガールのことで、学校を出てから銀行会社などに勤める女性の事務員、タイピスト、交換手などの総称である。この言葉は何も去年だけでなく、もっと以前から使われていたが、これは本来の英語では「いかがわしい街の女性」の意味である、という批判が出て去年の後年から年末にかけて話題になった。NHKではもうこの言葉は縮出すという所まで来たようだ。

「女性自身」はこれに代わる言葉を募集した所(十一月二十五日号)五十八種の名称が寄せられたとのことである。一位はオフイス・レディ、次はオフイス・ガール、サラリー・ガールの順であった。オフイス・ガールはB・Gよりも前に使われていたと思うが、B・Gの(日本語的)語感のよさに負けたのであらうか、一時影をひそめていた。英語のベテランから「いかがわしい職業の女性のことだ」などといわれたものだから、使うことを止めたにしろしい。オフイス・レディの、頭字を取ってB・G式にO・Lなどと書

けば、オールド・レディ(老嬢)の略だなどとふざける向きもあるとか。

B・Gの句は去年の初めから雑誌には出ている。もちろん悪い意味のB・Gではない。

結婚をしてB・Gの茶をくま

曉明

初出飾るようにB・G和服着て

柳宏子

B・Gがひと足早く春にする

鉄児

B・Gの美し過ぎて茶をくま

東岸

次々とB・G花散る如くやめ

愛鳩

休んでもいいのよとB・G赤電

礼子

話 B・Gのコヨリも知らぬホツ

尚史

キス ビールならB・G気軽について

隆子

行き B・Gも注がれしコップ辞さぬ

文月

なり ハイボール飲みわけB・Gまだ

光道

嫁かず 方針は決ったB・Gの英会話

保夫

(5) 少年A

非行少年がふえるのは年々のことで問題になっているが、それが新聞に報道される時には、少年の将来を考えて名前が載せず、ただ少年A(何才)と書くのが習わしとなっている。(「名句と難句」

本誌第四三七号)従って句にも「少年A」という句がかなり見られた。世相の反映というべきだらう。

世間から守ってやる気かA少年

保夫

藤吉郎も少年Aの頃ありし

路郎

僕の過去にもA少年は住んでい

アイト

少年A 叱らぬ父と母を持ち

一路

(6) スモッグ

ロンドンのフオッグ「霧」は昔から有名であるが、最近はこちらに石炭ストーブなどからの煙(スモ

ッグが立ちこめ、そのために気管支炎患者も発生、憎悪し死者も四千人あったといわれている。日本でも東京、大阪などの大都會でこの現象が起りかけ、去年だけではないが、去年は句にも作られるようになった。

スモッグが今日はなかった初荷

十九平

スモッグの空には映えぬ鯉のぼ

旅風

スモッグの街で古武士のように

生

句はもつと多かったと思つた

が、見落しがあつたのか、僅かに三句しかお目にかけられない。ま

た、首相の答弁スモッグに似て

路郎

というような比喩的な使用法もあ

つた。

(7) 小さな親切

去年三月、当時東大の総長だった茅博士が卒業式に際し、学生にこの言葉を贈ったのが起りである。その前に(確かおとしだつ

たと思う)東京都では「小暴力追放条例」が出るし、大阪府では

「迷惑防止条例」が發布され、

「小さな親切」という言葉に関連して「小暴力」「迷惑」などの句も

詠まれた。

小さな親切して遮断機慌たり

静水

絶安へ小さな親切身にしみて

静水

酒 清



灘・魚崎

金露酒造株式会社釀

ーク)が加わって、冬季にはそこそ街は手さぐりでしか歩けぬこともあるらしく、これをスモッグと名付けた。ロンドンでは一九五二年十二月、五日間にわたりスモ

一鶴

子の日記小さな親切見付けたり

独仙

小さい親切落ちていぬかと油断

瑞枝郎

なき

雄々

迷惑をかけ円満にスト妥結

与呂志

小暴力とやらの証人が遅刻する

草石

暴力の世に摘摸の手の器用さよ

(8) その他

(イ) 拜啓池田首相殿

水上勉氏の公開質問状(中央公

論六月号)から「拜啓〇〇殿」と

いう表現が一時流行した。「拜啓

天皇陛下様」という映画もあった。

汲取の不平拜啓市長様

三司

サラリーが足らん拜啓首相殿

杏花

倍增は支出の方かい池田さん

どんたく

この最後の句はちよつと表現が

違ふが、これは「倍增」の方に属

する句かも知れない。「倍增」は

おとしぐらしい言葉であらう。

池田首相が「所得倍增」を唱えて

一時「倍增」という言葉がよく使

われた。去年はその失敗を認め

よ、認めぬ、の議論が戦わされて

問題になった年だが、それでも

「倍增」の句もあった。

倍增は倍働けととる明治 恒雄

(ロ) 選挙の句

去年は四月に統一地方選挙があ

り、十一月には総選挙があったの

で、選挙に関する変わった表現の言

葉が生れた。

泡沫の候補へ入れた臍曲り

好祐

昔番号候補を長島も笑い

煩句楽

「泡沫候補」「昔番号候補」など

である。

(イ) 悪書追放

山梨県から起こった、書店の

「悪書不売運動」が次第に全国へ

広がった。

悪書追放ババがこっそり読んで

おり

「悪書追放」それから悪書ばかり

売れ

後の句は本屋さんの側から詠ま

れた句である。

(ニ) その他もある

「不快指数」は一九六〇年にアメ

リカの学者がいい出した由、「無

責任時代」もいわれ出して、二

年になるが、こんな言葉も散見さ

れた。

不快指数はあがり株の値は下り

愛鳩

無責任時代ドライな行状記

卯之助

無責任時代おもちの手錠出来

方大

これも去年からではないが「交

通戦争」という言葉が出来、「時

差出動」という言葉も生まれ、ま

たそれに伴って新しい商賈(しょうが)が出来、言葉も出来た。「押し屋」とかその反対の「はぎ屋」などである。

時差出動 彼の女への思いその

まんま

路郎

尻押しまでして定員違反する

むじな

女の尻押せる押し屋が羨まれ

同

「はぎ屋」の方の句はまだ見当ら

なかった。

その他かたかなの文字(外国

語)がむやみとふえた。

半分は片仮名という世を嘆き

甲吉

という句もあるが、これは川

柳に限ったことではないのである

。片仮名だから外国語かと思う

と、和製外国語というのもある

外国では通用しない。「アップ・

ヘアー」「サラリー・マン」「ガ

ソリン・スタンド」「フルーツ・

バーラー」等々である。(榎垣実

「言語生活」十一月号) 心ある

人の嘆きとなっている。外国語で

あっても、本来の意味と違った場

合もある。「B・G」然り、「アベ

ック」然りである。「ハイ・ウェ

イ」を「高速道路」などと訳すの

も日本的であるようだ。

去年もこのような片仮名の文字

を使った句が多く見られたが、例

句は割愛した。

三 むすび

私も以前に本誌へ書いたことがあるが、人間の精神の発達なんて微々たるものである。ことに人情とか物の考え方などは、二千数百年前の中国の孔子の時代でも、またギリシャの時代でも現代と余り変ってはいない。発達したのはただ技術の方面だけである。このことは今年一月三日の朝日新聞に、同社顧問の笠信太郎氏が書いておられた。

従って、川柳に新しいことを詠みたいと思えば、新しい言葉を使うことが必要になる。今まであり米りの言葉だけで詠もうとすれば、考え方は昔と余り違わないのだから、どこかに類句類想のありそうな句になってしまいうさうである。今までの言葉で作句してはいけない、というのではない。実はそんな平俗な言葉で作句することこそ川柳の理想ではあるが、先人よりも飛び抜けてすぐれた句想といふものはそうザラには発見できないことは思うべきである。ただし、新しい言葉というものがどれだけの寿命があるかということも考えておかねばなるまい。新しい機械が発明されれば、新しい名前が付けられるわけだが、技術の進歩によりその機械が使われなくなれば、その名前も忘れてしまわれるのである。「スモッグ」とか「押し屋」にしても、世の中が進歩し、環境がよくなり、「ス

モッグ」はなくなり、通勤車はいつでも座って行けるようになれば、こんな言葉は当然消えてなくなり、昔語りに過ぎなくなってしまうに違いない。

新しい言葉も、余り人口に膾炙(かいしや)するようになれば、句会の際にも出題されるようになるであろう。去年の本社句会では「人づくり」と「無責任」とが出題されている。これもやはり、今までの題では、どこかで誰かに詠まれている可能性の多い句が生れると思われるからであらう。またそんな言葉でないにしても、これからの新しい言葉をからませて作句するのも一法だし、そんなもの多いであらうと思われる以上、私は去年一年間の「川柳雑誌」を読みながら去年の言葉の句を集めて思ったことである。

なお最後にいつてながら、私の「寝正月」を助けてくれたという私の年賀状の句を紹介しておこう。

進学が二人おり 父寝正月

春巢

ただしこれは、「進学が二人おり」が案外利いたのではないかという気もする。

川柳雑誌社特製

投句用 柳 箋

一冊(五〇枚綴) 三〇円
送料(一冊分) 二〇円

明治大正柳誌巡礼

奥津啓一朗

九月十日、百万石、第三十七号、
菊判二十二頁、金沢市三五番丁、
北都川柳社発行、編集発行人小林
栄一、一部貳拾五銭。

唐木紹月坊
法然にだまされてもよし珠数をく
り

小西鬼絲子
朝飯を食ひ残ささせる客があり

浅田紋二郎
盗電の明るさゝるぎたない寝姿

小西鬼絲子(片釣瓶) 浅田紋二
郎(どんなもんやい) 募集吟窪田
銀波棲選(酒) 永山光林坊選(掌)
唐木紹月坊選(旅疲れ)、剣花坊
氏一行歓迎句会詠草等が載ってい
る。

大正八年四月二十五日創刊、六
十六号(昭和三年五月一日刊)を
以って廃刊。(いすれも未見)

十一月十日、椎の実、第二号、
四六横綴廿頁、神戸市八幡通四丁
目一八三番の実川柳社発行、編集
発行人神戸市湊町一丁目六〇八、
木村緑三、一冊拾銭。

木村 緑三
そくそくとしてアルパカの肌触り

富田 青波
長男は不仕合せにも厚司を着

観田鶴太郎
剃刀の恐ろしさは裸身ばかりなり

立花 晴夫

水道の捻子を夜警は締めてゆき

梶元 紋太

東西屋硝子に映り乍ら過ぎ
紋太生(自分のために) 富田青

波(無題録) 大島濤明(お悦びと
お礼と) 晴夫(とんびの輪) 古屋

夢村(掃き溜め) 鶴太郎生(寂心
抄)等が載っている。同人観田鶴

太郎、米田初雷、富田青波、立花
晴夫、木村緑三、前田青岸、梶元

紋太、西田艶笑。
十月創刊(未見) 大正十三年七

月十五日発行の第七号以下不明。
十一月二十三日、ホコリ、第二

年第五号、菊判和紙袋綴二十八頁
天津日本租界吾妻街天津川柳社

発行、編集発行人小林一考、非売
品。

堀 天津郎
角兵衛獅子口の中から見て通り

和田黙然人
臆病に注ぐ香水の量り売り
社中選唐様(支那事情風俗

吟) 創作(雑詠) 堀天津郎、和田
黙然人共選、募集吟湯本白庵選

(握) 大島濤明選(胸) 伊藤蘇堂
選(皺) 磯貝意想郎選(愚痴) 上

松巨頭子選(横) 外に大島濤明
(埃の中の塵) 等が載っている。
大正十三年五月三十一日発行の
三ノ四(四六判二十八頁) 以下不
明。



同舟近詠

和歌山市 秋月 宏方

つり皮にわが手はごついなと思ひ

貧乏でできたえた足だかいなだよ

楽しみの一つ土踏む道を行く

働けどまだ勲章もくれぬ僕

今治市長 野文庫

累卵の上にも似たり交通禍

相槌をうつが読んではいないらし

読むことも書くこともせずゴルフ族

停年後読む気とうとう読まず死に

その波紋順次おでん屋まで及び

大洲市 米沢 曉明

大半をおしめが占める旅かばん

略図ではこうも曲っていない道

旅心秋吉台を馬で行く

今治市月 原宵明

車、車うっかり唄も歌へない

咽喉巻いてことわりに来る十二月

法要と思えばなんと観世流

村の子の手型をつけた自家用車

椿落つ今年もお嫁にゆけなんだ

名古屋市長 谷川 鮮山

電器製品ずらりと見せて誇張めき

孝行をするにはちっと早い輪

正直に鳴って眼覚しけとばされ

貯金箱割る楽しみもお元日

東京都 阿部 佐保蘭

いつの世か鶴はめでたい鳥にされ

音もなく丹頂の鶴歩を運び

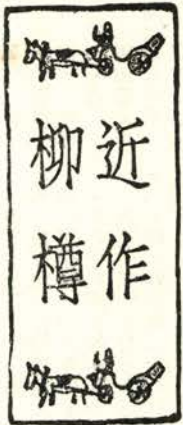
須坂市 高峰 柳児

病人の手先あなどる冬の蠅

小使の晩酌孤独を埋めている

師走の灯急ぐ歩調へからみつき

励げましてくるは易者ばかりなり



麻生路郎選

北川春巢選

叱られて来たとBG パフ叩く 仙台市 平野 光道

眼鏡かけカノ下け団地を出る日曜 同

ネックレスに十字架つけて女香具師 同

五十の顔写す鏡の埃拭く 同

もみあげをのばし柔道部員です 同

たかが市議候補が池田君と呼び 加賀市 木村 一路

札持てば妻と意見が早合わず 同

幼稚園から裏口のある国家 同

BG十年ボーカルフエース崩さない 同

眼を掛けてやればせつと使い込み 同

感心な嫁情なや四時に起き 鳥取市 鈴木村 諷子

宣伝宣伝帽子も服も前掛も 同

卒業をしたらもらい子巣立つちやい

無代進呈くさいぞくさいぞ

一升は一升同志膳につき

つねられてオーノーノーとやに下がり 倉敷市

宮仕えはつらいものとマダム酔い

珍客が妻を不発にしてくれた

預金より妻は振袖着せたがり

背信の肩うしろから吹く夜風 兵庫縣

荒れた手が自慢農夫は田を愛す

こころの詩口笛にするとき愉し

デイトして来た興奮でうどん食う

よく来たと迎え番茶で帰らせる 岡山縣

帰りには寄れと言ったが鍵を掛け

青畳敷けば見捨てた家でなし

甘酒でよし女らの笑い声

労組の自家用がとぶスト最中 竹原市

特飲街にいたとは見えぬ二児の母

名目は支店で親と別になり

同

同

同

水谷 谷水

同

同

同

常岡 孝風

同

同

同

秋野 萩路

同

同

同

杉原 愛鳩

同

同

現代柳人録

(一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号
(四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九) 自信の句一句 (一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二) 川柳に手を染めた年月

(224) 石島吐月峯

(一) 石島正三 (二) 吐月峯 (三) 吐月峯
(四) 東京都品川区東大崎一の四六二 (五) 明治三十六年八月十六日 (六) 長野県上田市 (七) 会社役員 (八) 側一七〇一 (九) 何時事故で果てる生命か街に住み (一〇) 麻雀・文学 (一一) 無 (一二) 大正七・八年頃

(225) 工藤胡里

(一) 工藤義男 (二) 胡里 (三) 春嶺 (四) 旭川市七条通二十三丁目右仲 (五) 大正六年三月三日 (六) 旭川市 (七) 安田生命社員 (八) 三局三七八八 (九) 孤独感しきり青空あるばかり (一〇) 切手・レコード音楽 (一一) 有 (一二) 昭和十五年一月

(226) 永先芽十

(一) 長崎輝喜 (二) 芽十 (三) 朱船堂 (四) 松山市北代町溪泉荘 (五) 明治四十一年七月十五日



一人息子が死んでガメツイ銭もうけ	同		一人息子が死んでガメツイ銭もうけ	同	
見晴らしのよさにも馴れた暮しむき	大阪市	林	宏子	同	
三千円安おっせと顔見世の	同	同	同	同	
帶きつく女性らしさをとりもどし	同	同	同	同	
ラストシーン涙もろさを持てあまし	同	同	同	同	
お説教聞いてる前へクモが降り	枚方市	宮川	珠笑	同	
巻かれないための腕組みうらやまれ	同	同	同	同	
退職金目当ての子等に迎えられ	同	同	同	同	
乳くれぬ顔確かめて泣き直し	同	同	同	同	
よく稼ぐ蜂の子孫かのように	バロアルト市	斎藤	流路	同	
農閑期予報をきかず寝るとする	同	同	同	同	
仕事着の襟を正して訃報きく	同	同	同	同	
すぐこよりひねる男で如才なし	高知市	須藤	俊江	同	
人間は弱し力道山も死に	同	同	同	同	
アイラブユー云わせぬ服付して動き	同	同	同	同	
幸福な仮面実母は知っていた	香川県	三井	酔夢	同	
母の趣味おさんどとは情ない	同	同	同	同	
晶子抄恋した頃は宙で云え	同	同	同	同	
苦勞した人で温和な貌を持ち	新居浜市	小林	孝正	同	
十二月某日笑い欲しくなり	同	同	同	同	
友の愚痴聞いて女房のよさを知り	同	同	同	同	
もう鳩を追わぬ子になり七五三	芦屋市	里田	一十	同	
天井に風船七五三の宮	同	同	同	同	
納め能心師走に遠くいる	同	同	同	同	
セールの家にはなかった洗濯機	岡山県	永宗	宗義	同	
割勘の屋台で上役こきおろし	同	同	同	同	
泣き泣きに受ける保険を羨まれ	同	同	同	同	
明日また逢える恋なり振り向かず	羽曳野市	古川	静波	同	
世話好きの貧乏これも生甲斐か	同	同	同	同	
例えばのお次ぎは意見する気らし	新居浜市	安藤	桂仙	同	
嫁が来て暖かひまで気を使い	同	同	同	同	
一人旅よわぬ薬をうんともち	今治市	小笠原	青女	同	
媚びる目にみがきをかけた十二月	同	同	同	同	
三行で親子の食べるめどが出来	大阪市	山田	李鳥	同	
にぎりすし大阪弁のサビが効き	同	同	同	同	
金儲けねたままなこは元税吏	高知県	山川	勝子	同	



肩こり・神経痛
筋肉痛・腰痛
疲れ目・便秘に
●アリナミン
●無臭性アリナミンF

薬ヶ家の 活性持続型ビタミン

疲れ! アリナミン

- (六) 高知県吾川郡春野村西分
(七) 電々公社員(八) 松山三の
九四〇一(九) 自信の句はまだ生
れず秋の風(一〇) 魚つり・盆栽
(一一) 有(一二) 昭和三年頃
- (227) 川口理休
(一) 川口政義(二) 理休(三)
(四) 大阪市東成区大今里本
町五の二七(五) 明治四十一年四
月二十九日(六) 富山県城端町
(七) 会社員(八) 大阪御五一三
〇(九) お月さまようこそ街は停
電だ(一〇) 有(一一) 有(一二)
昭和三十三年夏
- (228) 麻生アト
(一) 麻生アト(二) アト
(三) 一(四) 奈良県生駒町本
町一〇三(五) 大正十一年十月二
十五日(六) 西宮市(七) 音楽



踏んで来たアルミ貨スカーで後悔し 同

無理のきく間の無駄を老いて晦い ハワイ 林 蒼蛇楼

青春の悩みドラムに打ちつける 同

あばら屋に住んでも根性曲つてず 七尾市 松高 秀峰

干柿の様な男でたよりなく 同

見通しの明るい損をする笑顔 見島市 伊丹柳瓢子

禿げているおつむが好きとからかわれ 同

無銭の醒醐味は地下道で夜をあかし 河内長野市 森本黒天子

ボーナスの袋はウインド見て歩き 同

顔見世に花のかんざし派手にゆれ 兵庫縣 斎藤たけお

焼香の順が気になる年になり 同

人命へ車掌もころぶ急停車 大坂市 藤富 淀月

ボーナスへもろもろの皺よって来る 同

木馬の児支える親が楽しそう 今治市 八塚三五島

ベレー帽噂は知らぬままでいる 同

助太刀を求めた母に叱られる 鳥取市 近藤 秋星

本当の月給妻でいて知らず 同

折角のチャンスへ良心足踏みし 岡山縣 阿部 良江

お上手を並べてはずむお茶の席 同

夫には見せぬ素顔を知る鏡 玉島市 井上 旭峯

招待へ当然という顔も来る 同

忙中閑垣根越ての長話 ハワイ 由上 細香

頑固さが味方を一人ずつ逃がし 同

肩でドア開けてボーナス散らして来 堺市 青山慶之助

出世した子供に会うのに手間がとれ 同

職場の花です恩給もついています 静岡市 多々良英舟

病床でも不健康の書の面白さ 同

角とれた頃に定年御退職 松江市 内藤 喜夫

妹にほしい素直さ足がもち 同

人形の冷たさも持つ未亡人 新潟県 賀本 昇

三日月をおぐしにさしてみたい宵 同

閻魔を秘めて清濁あわせ呑み 岐阜市 日東 里

天人になり夜叉になり好きになり 同

時間潰しに寄ったと先輩面が云い 笠岡市 松本 忠三

伝統を守り老舗のさびれよう 同

見あいたる菊を仏に切つてあげ 岡山縣 鳥取 周甫

(八) 生駒二〇二七(九) 朝露の
厳しさに耐ゆ葩の如(一〇) 囲碁
その他(一一) 有(一二) 幼少の
頃

(229) 田中司馬亭

(一) 田中鑑次郎(二) 司馬亭
田中鑑次郎(三) 司馬亭

(三) 三太夫(四) 東京都文京区
初音町一五(五) 明治三十年八月

八日(六) 東京都港区芝三島町
(七) 椅子製作(八) (812) 三九

四四(九) 顔見世を親に往くだけ
のはとに乗り(一〇) 邦楽一切

(一一) 有(一二) 大正三年頃

(230) 猪飼長船

(一) 猪飼泰一(二) 長船(三)
猪飼泰一(四) 長船

(四) 北海道亀田郡七飯町字
緑町(五) 明治三十八年一月十八

日(六) 京都市(七) 海技講師
(八) 一(九) 足を知るくら

しの中の冬の湯気(一〇) 園芸
(一一) 有(一二) 昭和十三年六

月

(231) 西出一栄

(一) 西出一栄(二) 一栄(三)
西出一栄(四) 一栄

(四) 大阪天王寺区宰相山
町一四二(五) 明治三十六年十月

十日(六) 富田林市本町(七) 無
職(八) 岡四〇八(九) 混浴へ
タオル一本たよりにし(一〇) 日
本舞踊(一一) 有(一二) 昭和二
十九年三月



炭焼きに文化の風が強すぎる 八戸市 川村 映輝
不佞せ昔の恋をなつかしみ 大阪市 森川すみれ
協力で老後の親を旅行させ ハワイ 朝岡千代棠
美しい月ねと女寄り添わず 羽曳野市 稲本 凡子
手を洗うついでに心まで洗い 九尾市 馬場 天目
姑も嫁と一緒に産む若さ ハワイ 上田 紅溪
早やチョーク縄張り巻尺事故現場 栗木市 高木繁太郎
正直な渡世貧乏悔いもなし ハワイ 藤本 柳一
すぎ焼へ下戸一人ずつ配り 大阪市 西本 保夫
テロ憎む心一ぱい記事を読み 羽曳野市 三宅 ろ亭
古里の方言に妻とまどえる 山梨県 赤池 五朗
チップだけのこしてきたドライぶり 大阪市 山地 判志
梵漢のわからん経を死者へ読み 京都府 西村句楽坊
貧乏が忙しい人にしてしまい ハワイ 藤浦 美潮
叱られて飛び出た街の灯は点り 羽曳野市 広瀬 浪路
正直に選んだ人は税を上げ ハワイ 谷口恵津子
先生の真前に立ち関児さようなら 神戸市 友国 ゑつ
明日になう子にあさつての保障なく 神戸市 大野木真砂

やけくそになれぬ自分に腹が立ち 西宮市 鶴飼 鮎子
見られてる意識が石につまずかせ ハワイ 寺山 洗丁花
哀しさを笑顔に隠す事も馴れ 岡山県 梶川 瞳美
正直が資本で続く古ノレン ハワイ 秋田美津子
自民党ソングも出ました選挙戦 大阪市 宮尾あいき
ボーナスを貰えば欲が一つふえ 松江市 岡崎 祥月
嫁った娘の箸なつかしく食べて居り 大阪市 武居寿美司
味方だと思ふからこそ言ったのに ハワイ 秋田布敷庵
恋愛の話若さがほしい欲 松江市 岡崎 雪美
半生の汗が家建て子も育て ハワイ 森田 紅茶
生きるカテ観光客へ海女もぐり 金沢市 根上 杏花
慰安会どころか役員疲れ果て 貝塚市 行天 千代
また年をとるネクタイの派手を選び 玉島市 水粉 千翁
少々の無理はこらえて和を保ち ハワイ 瀬川 萩路
老人のまたへそくりを読む孤独 羽曳野市 古川 静波
孤独今日何を想てか酔うて泣き 羽曳野市 稲本 凡子
赤電話相曳先が社に知られ 大阪府 松田 つげ
此辺に横断歩道の欲しい町 香南市 伊藤 歌子
年の瀬やあれ欲しこれ欲しめぐるし 京都市 脇坂 照子

味のコー

モダン

心齊橋大丸北の辻東へ

御門

TEL(271)6684

御集会には階上御利用下さい



- (232) 木村三雷波
きむらみつとし (二)三雷波 (三)
—— (四) 島根県松江市西茶町七
〇(五)明治三十八年三月二十一日
(六) 松江市(七)菓子商(八)
松江②一九〇七(九)手袋をぬぐ
は十四拾う指(一〇)バラさつき
栽培(一一)有(一二)大正十五
年一月
- (233) 福井野迷路
ふくいのみちろ (一)福井信立 (二)野迷路 (三)
咆哮太夫 (四) 大阪市南区巖谷中
之町四 (五) 明治二十五年六月二
十五日 (六) 兵庫県三田市 (七)
内科医師 (八) 四三三〇二 (九)
幕切れに涙のまゝで手をたた
く (一〇) 義太夫 (一一) 有 (一
二) 昭和三十四年暮

ヒマだれ
財界人

東野大八

若いがあるやり手の財界人の御曹子がこんな話をした。

「大学へ通って教授の話をきいて勉強する。ただそれだけのことなら、何も学校へムリしていく必要はありません。誰かにノートを借りるとか、その先生の講義録でも読んどけば間に合う。しかし私があえて教室に入るのは先生のムダ話をきくためです。私はこのムダ話の中に本当の講義があると考えました」

私たちはよく商売でいろんなエライ人と会う。そのためには一応その相手の人となりについて予備知識を頭に入れておく必要がある。この人は電機工学の權威だとか、この人の著書にはこういうホンがあるとかという風に……。しかし、私はそんなものは相手にしない。趣味や道楽ばかりに眼をつ

ける。その方が適確に相手の人となりが手にとれる。日本碍子社長の野淵三治氏などはこのデンでいったらワイ談からはじまってワイ談で終ってしまった。こういうナン派の人物論は読んでも身になるし、第一書く方も読む方も肩が凝らなくてすむ。

野村証券会長の奥村綱雄氏は女
の話をよくやる。

「財界人でよく二号をもっているのがあるが、それが金の工面を持ち込んできたときは、まずその二号がどんな女か、ということを調べてみるとよい。私はこの人の愛人よ、という顔をしているのや、妙に威張り散らしている奴には金輪ざい金を貸してはいけない。こちらから頼んでも貸してやらないような人は、勿体ないようなりての二号と実にキレイに手

を切った男だ。要するに人物評價のファクターは女との別れぎわの手並だね」

松下電器の会長松下幸之助氏は、持つて回った気取りのある話は大キライな性分だ。彼が赤坂の料亭で飲んでいたとき、二人の若い芸妓がこんな話をしていた。

「あの建物なあと」

「国会議事堂よ」

「ギジドーって何よ」
「そうね、わたしたちの検番みた
いなものよ」

といった説明

のウィットに大いに感服したという。この松下さんがお初の新聞記者にはよくこんなことを話す。

「碁というものは、大体一万回やると初段になる。だが人によって五千回でなるものもあるし、いい先生にいたら三百回で初段がとれるかもしれない。だがわしは特殊

新聞記者にはいい話である。

帝人社長の大屋普三氏は、斜陽
帝人を今日までした親玉だが、こ
うした社にするために、高島屋の
営業担当の重役村田和一を引っこ

ぬいた。そのホレこんだ村田のブ
ロフィルを語る一つ話にこんなの
がある。

村田がある大臣にあうことになつた。秘書が名刺と村田の顔をひきくらべた瞬間、彼は

「この名刺を通して頂ければ大臣はすぐ私におあいになります」

といふ放つて自信マンマンなのだが実のところ初対面なのだ。太

臣とて官選のむかしとちがうのだから選挙区の誰かと考える。部屋に通ると彼は名刺を十枚ほどつかんでさし出した。

「オイオイ、こんなに沢山はいらないヨ」

という大臣をニヤリとわらって村田は、

「どうぞお収め下さい。これから大臣が私の名前を覚えてくださるまで何回でも十枚ずつお渡しいたします」

「わかった、君の名前はゼツタイ
忘れん」

と大臣も笑い出し、以後木戸御免となった。

山本為三郎といえばアサヒビールの社長だが、この人の親分が宮

島清次郎だ。この人の政治献金のやり口は財界の第一だった。吉田

は、献金する現金を古新聞にくるくるとくるんでシデ紐でかんたんに結わえ、料亭の床の間へ置い

「銀座を歩いていたらこの生地に
出くわした。あまりいいので大兄
の顔にピッタリだと思ったので手
に入れた」

これじゃあ頂かねば山本さんにすまなくなる。タダでモノをやるにも上手下手の見本をみるような話だ。

いろいろとクダラン話を聞いたが、要は、世の中はカタイ話よりヤワラカイ方、雑談や冗談や、適当なホラでタコをあげるところに人生の妙味が生れるということが言いたかったんです。

(最近私は財界誌の編集をやったりしますので、こういうゴシップデータベースみたいなものが書きやすくなったんです。財界も千者千別でクダランのもいれば、クソオヤジもある。賢すぎてハシにも棒にもかからないのもふくめて、それだけにまた面白い連中だと思います)

隨筆 孫と私



布哇 築山 快夢 起

最近の中央公論を見ると、グラフィックに、日本に於ける各界名士と孫の写真をのせ「うちの三代目」という見出しで、それぞれお祖父ちゃんの感想が面白く書かれてあった。

その中で作家の川口松太郎氏は、二才位の可愛い孫女を抱いたのが撮ってあり、その所感として「孫は玩具だ、子は自分に密着しているが、孫は距離を持っていて、勝手な時に来て好きな程遊んで、厭になれば親に渡して知らん顔が出来る。ほどほどに旨い事をいって、厭になったら引受ける親がついていて、玩具としては完璧だ」とあった。

僕が「うちの三代目」を紹介するととなると、何分、ロス、加味、ホルルの各地に散らばっているのが、総勢十一人もあるので、限りある紙面にその全部を紹介するわけに参らぬから、今日はその中の一人ティミーを引抜いて、その横顔を書いて見よう。

ティミーは僕達夫妻の次男下の三人ある内の末っ子で四才九カ月のイタズラ坊主。住居は違いが同じロットに住んでいるので、殆ど毎日のようにやってくる。孫はどの子でも皆可愛いのだがティミ

いはいつも顔を合せているためか、一番僕に近いようだ。上の二人は大大きいので、もうお祖父ちゃん、お祖母ちゃんと慕っては来ないが、彼にはまだ可愛い所があり、二三才頃までは此方の自由にもなったし、川口氏のようによく玩具になくなったものだが、近頃はそれが出来なくなった。それというのが、彼の頭脳が年と共に進んできた上に、自己意識が発達してきて、はやこのお祖父ちゃんの手におえないものとなり、孫もこうなってくると、最早玩具どころか、うるさくなる時が多く、その傾向

は先方が賢くなるだけ、此方が輪をとるのだから、益々加重してくるわけだ。この頃の彼の日課は、午頃、幼稚園から帰って一時間はど休み、それがすむと僕の部屋へやってくる。それから一活動が始まるのだが、何しても眼も早いし手も早い。それを一々咎めていたら此方がたまらないから、大抵は見逃してやることにする（奴さんこの辺の呼吸を呑み込んで祖父ちゃん手易しと甘く見ているらしい）。然し、たまたま鋭利な刃物や器具などに手をふれると、思わず此方の声も高くなる。所が、少々怒鳴った位では平気なので、無理にもそれを奪い取るうとする、先方もムキになって渡すまいとする。こんな時はチョイと他の方面へ誘いをかけて騙す工夫はあるのだが、騎虎の勢いで突進の智恵も出ず、年甲斐もなく、ムキになって腹を立てる。

この夏、次男一家が二週間ほどハワイ島へ休暇に出掛けたことがあった、がその時ヒロ市で観た日本映画「柔道一代」が特にティミーのお気に召したものと見え、帰った当分は柔道一代と、イチダイに妙なアクセントをつけて僕に挑戦し、そして必ず映画で見た背負いの型をしかけて僕の腕をとるの、わざと決まったように投げられたようにしてやると、それがとても嬉しう得意らしい。この柔道の型も祖父さん相手だと、此方が怪我のないように加減してやるから危険はないが、自宅で見貴（彼より三才年長）を相手にすると必ず泣かされるし、容赦のない兄のことだから夢中になって、どんな乱暴をするか分らない。母親は絶対に兄と柔道を遊ぶことは許さないで、柔道イチダイは祖父ちゃんお相手ということになっている。負けず嫌いなので此方が負けてさえやれば上機嫌で、もともとと一向やめる様子がない。此

方もわざと投げられたように見えるには相当に骨が折れるので長くは続かず、無理にもやめてもらうのが毎度の例だ。この閑静な隠居所も彼の来訪を受けたら最後、少しも落付かない。一時間もチョロ／＼されると、此方の眼も疲れて閉口するのだが、彼も長居は無用と思うのかどうか、散々荒れ廻った揚句、サッと引揚げてしまおうので、帰った跡は大風一過、その跡片付にまた一仕事という訳だ。それでも時には全く姿を見せないこともあるので、そんな時には何か物足りない淋しさで、よく家内に「奴さん、今日は見えないじゃないか」とひそかに彼の来襲を待っているというのがホントの祖父さんの気持なのである。

グラッパにキスそのあとで口を拭き孫にまで従う齢となりけり孫にまで敬遠される老朽車

金泥集

選乃菫生麻

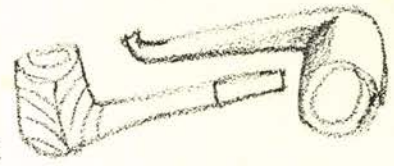
「猫」

小猫うとうと山寺にさくら散る	阿茶	食卓へ小猫の番を命ぜられ	同	ミイ子のお産みそをば食べ忘れ	みさ子
姉妹に猫は引張り 扉にされ	同	子無き夫婦猫に明け猫に暮れ	花梢	うちの屋根隣の猫の運動場	同
家族会猫も炬燵へ 仲間入り	同	珍客に猫押入れへほりこまれ	同	捨てる筈の子猫が器量よく生れ	美喜
畳替え猫ふたて、叩かれる	同	まねき猫うしろ向かせる酒の酔	酔夢	女ばかりの家に飼猫までがメス	同
鼠言う猫はやくぎのたぐいなり	清子	猫嫌い魔性の目だとなまみ上げ	同	珍客の膝へ子猫は泥をつけ	勝子
猫の背の丸さもまるし十二月	同	長尻へえ、あんばいにネコ甘え	弥生	猫のような声で催促きつおます	美代
猫の恋犬は鎖をうらむなり	同	猫の恋くもの巣つけて戻って来	同		
待人が来たらし猫も膝を降り	きさ子	思いきり投げも猫はひよいと立ち	周甫		
毛糸針身の猫へ話しかけ	同	猫ばかりが当ると猫をすて兼ねる	同		
髭書いてやと猫らしい顔になり	一栄	猫の子一匹通らぬとらでランデー	あいき		
		母性愛子猫にそ、ぐ不倅せ	同		

次回題「プラット」切二月末日

正誤 前号二十二行目と二十三行目、

正子とあるはみさ子の誤り。



隨筆

金に繋がる話

「金に繋がる話」は蓬萊ニュースの昭和三十五年五月一日号から九月一日号まで連載された随筆だが、その続稿を本誌に執筆されることになったので、一応旧稿から一愛読を願うことにした。

(編集局)

麻生路郎

のにと思つて実にバカバカしい話だ。

ホノルル市のローレイ街に住む稲崎スエノという夫人が五才の子どものときから一仙銅貨でコツコツと貯めた五千何百円を何者かに盗まれたそうだ。

五千円はコートのポケットに、百七十五円は菓子缶に入れ、四十円はドレッサーの抽斗に入れ、二階の寝室の押入れに隠してあったが、一寸外出しているひまに盗まれたのであった。

警察では家の様子を知る者のしわざだろうといつてゐるそうだが、それは、ともかくとして、今時そんな大金を押入れに隠しているのがおかしいと思う。銀行に預金すれば安全でもあるし、利子も生む

然し稲崎夫人には利子を生むことよりも、銅貨マニアとしての夢を楽しんでいたのであらう。その昔、私の友人の妻君にも、五銭が幾ら、十銭が幾ら貯ったと別々の缶に入れたのを算笥の小抽斗から出して誰彼に見せたものだ。

幾ら貯まっても人に呉れてやる訳でないから、黙って貯めていればよかりそうなものだが、ダンダン貯まるにつれて他の人に吹聴したくなるものらしい。こんなにも貯まったという快感が沈黙を守らせないのである。

稲崎夫人の心も私の友人の妻君と似かよったかの硬貨マニアと断じていいだらう。

そうなる、それらの金はどう通貨ではなくて、一種の愛玩物に過ぎない。

その昔といつても、明治末葉の話だが、東京の兜町の株屋さんで一円札や五円札、十円札や百円札を棚に積み上げて、それを一々、サシで計って、それぞれの高さを楽しんでいた紙幣マニアがいたがコレも斯うなると通貨ではなく一種の愛玩物に過ぎないことになつた。私も外国為替の研究をしている頃、世界の貨幣を参考のために蒐集しようとしたことがあるが、これは随分と金の要る話で余り集まらぬうちに断念してしまつた。

今でも、ロシヤのループル紙幣や中国やアメリカなどの貨幣が抽斗の隅から出て来て、その頃を思

い出し苦笑をしているが、これなどは若い頃の研究熱の名残りであつて、必ずしも悪趣味とはいへぬがコツコツと貯めて、隠匿し、時々出して、それを楽しむようになつては通貨としての神通力を失つてしまふので、これ以上の悪趣味はないといえよう。

政治力が悪化すると貨幣価値が激変したり、時には紙屑同様になつたりするので、なるべく硬貨を集め、それを壺やカメに入れて地中に隠匿したり、壁に塗りこめたりして、掠奪をのがれることが曾ての中国にはさかんに行われた。

おとぎばなしにある犬に教えられて土地を掘ると、大判や小判がザクザクと出るのも、悪政時代に地中に埋めた通貨に外ならない。金のありがた味は使つてはじめて判るのである。金の額の多い少ないではない。

今、一円貨が道バタに落ちていると、誰れも拾わないが、一円で切手を買えば新聞を遠いところまで送ることが出来るし、一円二枚だとタバコやマッチが買える。マッチが無いのでタバコが喫えない時にはどんなにありがたいか判らない。

自分が汗を流がして得た金はそうムザムザとは使えないが、運転手殺しや銀行ギャングのように、

不意に手にした金は、またたく間になくなつてしまふものだ。これはホントに金のありがた味が判らないからだ。

日曜の朝の新聞をひらくと、バサリと、はさみ広告が落ちる。それらの中には、きまつたように銀行の貯金勧誘のビラがある。

「オオ、そうそう。貯金をしなかつては」

と思うが、幸か不幸か今日は日曜だ。預金をしようにも、銀行はお休みだ。サテ、翌朝になると、銀行は開店しているが、アタマがもう、仕事の方へ行つてゐるので、銀行のギの字も浮ばない。どうせ僅かな金だ。呑んじゃえということになる。これでは金が貯まりつこはない。たとえ呑まなくても、百貨店が待ちかまえてゐる。月賦が手をうけて待つてゐるといふのは、金は貯まらないにきまつてゐる。

テレビや電気洗濯機の月賦が払えないでガス管をくわえて一家心中をした新聞記事を見たが、こんな人たちはいつまで経つても金に追われるより仕方がないだらう。江戸っ子は宵越しの金は使わぬといつたが近ごろの人間は宵越しどころか十カ月向うの金まで使う人がダンダン多くなつて行くよう

(二)

誰でも欲ほけや、けちんぼを、笑うが、金、金、金という生活が唯一の生きる道だと思っている人たちは人を押しのけても金を貯めようとするので、勢い欲ほけにもなるし、けちんぼにもなるのである。

そんな人たちに限って、金を使うという味などはテンデ知らずに、貯金通帳を眺めてはニンマリと、ほおえみを漏らすだけで、この世にサヨナラをするのである。

道修町に、戦前に百万長者といわれていた未亡人がいたが、戦争が苛烈になり食糧不足になってもヤミ米さえ買わず、とうとう栄養失調で死んでしまい、あたり人の物笑いになったことがある。

私の家のならびに、Mという未亡人が住んでいた。毎月何枚かの宝くじを買い二百万円当選の夢を楽しんでいた。ところが二百万円どころか千円も当たらないで死んでしまった。

あの空くじ券ばかりは少々たまって、あまりに小さすぎて、鼻紙にもならないし、トイレの落し紙にもならないのであった。この二人の未亡人こそ、けちんぼと欲ほけのいい標本であろう。

金を貯めようなどとは、微塵も考えていなかった私も、五十万円当るといふ銀行の定期預金を四つの銀行へ申し込んで見たことがある。これは宝くじのように元金は無くならないし、利息はつくし、あわよくば五十万円当るといふので、半力年て結果の判る定期預金をしたのであった。当たらずに連

へ行く旅費にしてやろうと思ひ、何年か続けたが、何の手ごたえもなかった。十万人に一人という当選率では当らない筈だ。そのうちに健康を害し、ソ連行をあきらめたので定期預金の目的を失ってしまった。振りかえて見ると、百万長者のお婆ちゃんのけちんぼや、M未亡人の欲ほけとあまり違わないことを発見して苦笑したのであった。こんなことなら道頓堀で映画でも見て、帰りにその辺で一パイ飲んで財布を空っぽにして来た方がサッパリしていいのにと思つた。

人間は柄にもないことはしないに限る。金、金、金とあまりに金に執着を持ちすぎるとロクなことはないものだ。畳の下に金をかくしたまま死んだ人が、幽霊になつて夜な夜な現われたということは昔からよく聞かされた話だ。他人の気のつかないところへ、金を隠すということも、あまり賢い方

法ではない。ある主婦が、かまどの中へ隠しておいたのを、そうとは知らぬ家人が釜の下を焚きつけて、一瞬にして灰にしてしまったという話もある。

三年ほど前に亡くなった劇作家の食満南北はへそくりを書棚の本の間に挟んでおく癖があった。ウツカリ古本屋に本を売ったあとで大騒ぎしたものだ。本にへそくりを挟むことは他人が気づかないから、なかなか気のきいた隠し場所には違いないが、イザという時にどこえ挟んだか忘れてしまったことがあつたらしい。そのうちに古本屋の手へ渡つてしまふ危険が多分にある。

大たいへそくりというものは、昔から女のするものであるが、戦後は男性が盛んにやりだした。その点、ズット以前からへそくりしていた食満南北などはへそくりの大先輩と言えよう。

今時は夫にないしで、株を買つたり、家を建てたりする女性がかかなりいるから女性のへそくりもバカにならない。近ごろは共稼ぎ族がウンと殖えて来たから、若い夫婦間でへそくり競争がはじまるわけだ。しかし、お互いに、自分の自由に使える金が殖えると、物を買うのに、あんだの金で、イヤお前の金でというせりあいもある

て、時には愛情にヒビが入ることを知っておかねばならない。

変にケチくさい話になつて来たから、私が学生時代に見学した大阪の造幣局や、中之島の日本銀行大阪支店のことを、チョッピリ話して見よう。

ご承知のように、紙幣は東京で印刷するが、金貨（今はつくらない）、銀貨、銅貨、アルミ貨のようない硬貨はすべて大阪の造幣局でつくることになっている。私が見学した明治末葉の頃にはアルミ貨はつくらなかった。そのころは一円、五円、十円などの金貨がザクザク湯気を立ててつくられていた。工場の中に煉瓦の形そっくりの長方形の金のかたまりが転がしてあつた。持つて見たら、なかなか重たい。

これで幾らぐらゐるかと、係りの役人に聞いて見たら、「四万円です」という。

「へへ」と目を丸くして驚いたものだ。今の四万円なら驚くこともないが、その頃は一厘や二厘や半銭（五厘）が通用していたし、たしかハガキが一銭だったから四万円という金は想像外の額であつた。私のアタマにいまに四万円がコピリついて忘れられないのいい証拠だ。

それから市役所前にある日本銀行

行の大阪支店を見学した時に、印象に残っているのは、丁稚ぐるまで、銀貨や銅貨を庫から庫へ運んでいたことである。丁稚ぐるまは遠くの昔になくなったが、以前は店の商品を丁稚（今の年少店員）に運ばせるのに使用させた車で、丁稚の修業もなかなかラクではなかったのである。その丁稚ぐるまに貨幣を積んで、洋館の中の通路をあちこちしていたので、コレ又驚きの目を見張つたものだ。銀貨でも銅貨でも、そこらの荷物同様に、平気で運んでいるし、それはど沢山なお金を見たことがなかった。驚くのもムリのない話だ。あるところにはあるものだという、はじめての経験をしたわけだ。

(続く)

著 鈍 亜 鷺 高

考 柳 川 詩

定価 ¥380

送費 ¥90

社 誌 雜 柳 川



堺の文学散歩

八木摩天郎

私は書齋のソファに靠れて夢

を見ていた。それは懐しい故郷の

夢である。その昔。神武天皇東征の

砌、膳所山を踰え中州に入らんと

した皇兄五瀬命が、長髓彦の流れ

矢に当って、海水で血を洗い給う

たという血泊海——そのちぬの海

は、神功皇后が三韓征伐の時、船

のへ先に、たいまつを附けて御上

陸された時の海である。夙に万葉

集に

ちぬの海の浜への小松根ふか

めて我が恋ひ渡る人の子ゆえに

と詠まれている。その茅渚の浦に

程近きところ、百舌鳥耳原なる山

紫水明のところに、大仙陵の名も

ふさわしい仁徳御陵がある。その

御陵は天皇御在世中に築造された

寿陵であつて、隙水を湛え三重の

壕には白鳥が浮び白鷺が飛んで松

樹鬱蒼、清爽襟を正さしむ。洵に

総面積十三万九百二十七坪、世界

ある。

謹んで拝せば御陵ただ蒼し

路郎

この御陵の附近に十二の陪塚が

ある。その陪塚の外の南の方に長

塚という塚がある。武内宿禰の墓

だと町人はいつている。

つまり、堺は海の町である。海

に依つて開け海に依つて栄えた。

堺が急激に栄えたのは、南北朝時

代の事で背後の吉野に南朝が出来

て堺は南朝における海運の門戸と

しての役割を果たしたためである。

ところが応永六年、大内義弘は堺

に籠城して足利義満と戦い堺はつ

いに全焼した。その頃の戸数は一

万戸、それから造明船が初めて入

港した文明八年以来、その後の黄

金時代の堺の十六世紀の頃は「東

洋のマンチエスター」として「東

洋のヴェニス」と謂れて天下の商

権を把握したところで、その頃の一

もっとも美しく、また栄えた町、

西の方には海波漫々としてた、

え、町は堺によって開かれ、共和

政治が布かれ、行政、司法の制度が

行届いて、他の都市が戦乱に悩ん

でいるのに、堺だけは平和で独立

を保ち一種の特権と自由を持つて、

イタリアのヴェニスのように

だ」と本国に通信しているのでも

判るのである。自由貿易港とし

て、支那、フィリピン、安南、シ

ヤムとの交易、ポルトガル・スベ

イン等の通商の為の御朱印船の出

船入船の町である。

堺の津南蠻船のゆきかへば

春秋いかに入り混りけむ

品子

豊富な財力を以て、戦国の大名

達を向うに廻し、兵備を整へ、こ

の堺の富に眼をつけて「矢戦」（戦

時金）を課した織田信長と一戦を

交える氣勢をみせ、大名でさえ膝

を屈して軍資金の融通を乞うたと

いう堺は誠に、戦塵の外にあつ

て、自由の楽天地として、悠々の

生活を楽しみ、芸能人、学者、文

人、宗教家が簇出し、市民の精神

的文化を高めると共に我が文化史

上に赫々たる独自の地歩を占める

に至つたのである。

堺が貢献した当時の文化の内に

鉄砲がある。当時の国民の夢を驚

かせた種ヶ島に漂流した外国の商

堺の商人なら、大砲を製造したの

も堺の人であり、織物も初めて支

那織工に依つて堺に伝え、今なお

錦之町、綾之町の名が残っている

だけではあるが、京都西陣織の本

家は堺である。三味線も堺なら、俗

曲の藍鰻も堺で歌沢の開祖と仰が

れて高三隆達の名が残っている。

医療の方面に於ても漢方医療が

輸入され、欧州人に依つて南蛮医

術が伝来した徳川時代の蘭法に堺

流の名を残すに至つた。

茶道に至つては、千利久は堺の

人である事も茶人ならずとも利休

の名を知らない人はいない。

浜松の名にやこたへしほとと

ぎす 牡丹花

日傘、雨傘も琉球及び呂宋か

ら、蠟燭千挺も呂宋から納屋助左

エ門が齎らしたものであり、その

外、町人の堺の街には、町人相応

の文学が起つたのも勿論で、貴族

階級の独占だった和歌、連歌の類

は堺の町人に解放され、文芸の勃

興は武人も町人も膝を交えて吟詠

を楽しんだ。

納屋助左エ門の邸宅は、大安寺

の絵襖と共に有名である。……泉

州堺に一国寺という寺あり、けふ

絵書き給はん鶴の姿はかくなるべ

しと心なき寺僧にいわれて去つた

エピソードはよく人の知るところ

二十六羽描かねばただの居

納屋どのの書院なりつるみ寺

にて 聞きならひたるいに

しへのこと 晶子

の寺である。その庭の佳き眺望、

利休愛用の手水鉢もあれば、利休

の時雨井戸もある。

よき庭や小鳥も囀を落すまじ

の詠まれたところ、その近くの

萩の寺には

口切に堺の庭ぞなつかしき

芭蕉

の句碑がある。

正平十九年の正平板論語、大永

八年の医書大全、天文二年の天文

版論語は、いわずもがな、医書の

刊行薬学の出版と如何ばかり日本

文化に貢献した事か。

宮尾流の一派を能楽に立てた宮

尾道三、車屋本という七十五番の

謡曲本を創めた車屋道悦、さては

喜多流を確立した初代喜多七太夫

も堺なら、今日の文楽の祖である

文楽座の浄瑠璃の初代竹本春太夫

も堺出身なら、四代、五代の春太

夫も三代の越路太夫と何れも堺の

人である。

昔堺に男ありけり夏祭り

の如き、堺の食満屋に生れ、鴈次

郎の座付作者として多くの作品を

残した南北や、

祝ひ酒いただきまする果報者

五郎

の如き岸和田の稲葉の和田の二男坊を父に宿院の大道で生れて一堺漁人のペンネームで自作自演実

一千を越え、長く喜劇の王者たる地位を占めた和田久一。曾我廻家五郎の生れたのも宜なる哉である

しかし、この文化の都邑堺も、

宝永元年、新大和川開き、竣工で、おびたしい土砂が流れ込んで堺の港を埋め、大きな船の出入が出来なく堺は衰微の一路を辿った。

大和川五月雨の水流れけり

草城

為に寛文年間に七万近くあった人口が、安政の頃には三万七千と半分近くに減少した。また忘れもせぬ昭和二十年七月十日未明に焼夷弾攻撃を受けて焼失した戸数一万六千、罹災者七万、古い伝統を誇っていた旧市街の殆んどは文字通り灰燼に帰した。塗壁に格子戸造りの古い堺の旧家が一望の焼跡と化してしまった。戦火の洗礼を受けたのは堺の町だけでは勿論無いが、堺は古いところだけに旧蹟として惜まれるものは、南宗寺の千利休の茶室夾相庵、沢庵和尚の開基にかゝる祥雲寺、腹切りの妙国寺は本堂だけ焼失し、宝珠院境内にある土佐十一烈士の墓は残った。かつて路郎先生は、

蘇鉄寺腹の切りようまで教へ

宝珠院墓はこちらに御座りま

す 同

と、土佐烈士割腹の寺と、その墓

所が道路を隔てて別々の寺である事を詠まれている。

神社では開口、方違、宿院御旅所、南御防が燃えたが、一茶や大江丸も昔、堺に足跡を残し方違幸あり武庫のほとゝぎす

虫も鈴ふるや住吉大明神 一茶

火を負へる堺の町や秋の風 同

と詠んでいる。

川柳界閑秀作家の第一人者としての麻生霞乃先生や、そのむかし堺の高等小学校で、大野翠峰氏らに、堺の歴史を講じた「堺史談」の著者吉村、河盛彦三郎先生（麻生霞乃先生実父）のゆかりの地、

畏れ多くも明治天皇が行幸の御途次、西南の役の勃発をはじめて聞こしめされた中之町大道明治天皇行在所（元、河盛仁平邸）旧蹟も昭和二十年七月十日の未明に焼失して、その石柱だけが残るばかりである。路郎先生が、むかし寂として明治天皇行在所

と詠まれたあの大きな門構えの家も消え去った。

大浜汐湯も七月十日の戦火に焼け水族館は幸に残ったが、学校官公衙の殆んどが戦火を蒙った。

行春や堺のうらの桜鯛 同

水族館にて 大江丸

ガラスまで来てバックする桜鯛 同

霞乃

と、堺の浦は、いつも乍らの桜鯛跳ねる海である。

堺市庁と堺北警察署が唯二つの主な建物となつて残るのみ、先祖以来土着の人の多い堺の街の人々は、ちりちりに住居を遷し町の様子も一変した。

今いかに柳の路もなほありし堺の街に娘となりぬ 晶子

堺の生んだ情熱の歌人、与謝野晶子とその昔堺の町人へ寄せた右の一首は遠い昔ではあるが、現実の焼野カ原に、柳の芽はえる日は何時の日であらうかと思わしめた

しかし、そのむかしから育まれた堺の人の土性骨は、「天野屋利兵衛は男で御座る」の名セリフの如く、焦土堺から立ち上った。堺商人の意気は……。

語に曰う「人生幸福の第一必要條件は名邑大都に生るゝにある」と。昔、南蛮渡来の際の港は、南海七道線のあるあたり、大船巨船の出現から大阪、神戸の両港の伸展に奪われて、堺港は火の消えたように寂れたとはいへ、堺の港は遠浅の海辺をもつていたので観光地として、海岸通りは、三階建の丸三、一力という高樓旅館料亭がな

らび桜花爛漫の春の汐干狩には、西条八十作詩の「姉さんかぶり」の女の人人の手拭姿が出現した。四つ辻に涙こそ見ゆれ東風の街 虚子

一力の団扇を腰に網の客 梅史

ドボン

春の海汀に於て動きけり 月斗

その、海辺に添うて出来た大阪堺間の南海鉄道は、わが国最初の私鉄として明治十八年開通し、明治の末葉、阪堺電鉄ができたころには大棧橋が出来、汐湯の余興で人々を楽しませたが、一にかかって堺の発展は、海面を埋立てて工業団地造成にありとして為政者は遂に構想をたて、大阪府の議決を得て「堺臨海工業地の造成及び譲渡の基本計画」を策定し、この基本計画に基づいて、一大臨海工業地を造成される事になった。総事業費六・一三億円、堺地区一・二三五平方メートル、泉北地区六・一三三平方メートル、いまや全関西唯一の一大臨海工業地帯として復興し、すでに八幡製鉄は有力会社の近代工場がぞくぞくと聳立し壯観を呈するに至った。今や堺は国際的規模の重工業都市へと「サカイ」

のエンジン。あるものは空高く延びる工場建設の鉄骨、あるいは緑の田園地帯にびくびくニュータウン敷地でのブルトーザーの音、すべてが理想的な「重工業都市サカイ」を建設する発展のシンフォニーである。人口百万の文化的福祉都市として、臨海工業地帯の造成と相俟つて背後地の開発、各般の整備も造成される日の近きと思えば「よくぞ堺に生れける」「二十世紀に生きる市民の誇り」を拝舞するとき、かつて往年の国際貿易港を築いた古き我等の祖先にも感謝せねばならない。など思っているときハタと夢がさめた。惜しき夢でもある。

人口百万仁徳帝陵へ立つ煙 摩太郎

南蠻はおるか世界につづく海 同

これは拙き私の句である。

大阪・名古屋・伊勢を便利に結ぶ

近鉄2階特急

大阪・名古屋 ノンストップ

2時間13分

大阪上本町発……毎時0分

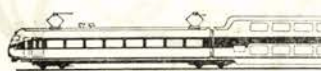
名古屋発……毎時30分

▶伊勢・名古屋ゆき

大阪上本町発……毎時15分

▶伊勢・大阪ゆき

名古屋発……毎時45分



特急券のお求めは
21日前から近畿日本
本ツーリストと日本
交通公社の各案内所

近鉄

続



川柳書架

(34)

類題別

番傘一万句集

番傘川柳本社編

★本書の巻首に岸本水府氏の序がある。

★目次概容を次に掲載する。

①天象・季節・暦日・行事・

宗教・歴史②教育・新聞・出版

・放送・宣伝・文化・文学・美

術③演劇・映画・芸能・音楽・

舞踊④スポーツ・娯楽・趣味・

行楽⑤恋愛・結婚・心理⑥家庭

生活・家族・社交⑦人物・人生

・人間⑧身体・衛生・保健⑨建

物・住宅・家財・家具・装身具

・衣服⑩飲食・嗜好品・飲食

業⑪動物・植物・鉱物⑫地理・

交通・通信⑬職業・商工業⑭政

治・社会・法律・勤労・金銭・

経済⑮戦線と統後

索引・凡例

★昭和三十八年十月一日発行、B

6 版横綴、五三八頁。定価八五〇

円。発行所大阪市北区樋上町四五
創元社。

★しばらく所収した類題句集が出
なかったが磯野いさむ氏が凡例で
述べているように、なかなか面
倒な仕事である。

句集新子

時実新子 著

★巻頭に川上三太郎、房川素生両
氏の序がある。

★目次——銃口・月の暈・くらげ
の海・子守唄。

★昭和三十八年十二月一日発行。

B 6 版一二二頁。定価三〇〇円。

発行所兵庫県姫路市野里月丘町二

七戸田醉古方、川柳ふあうすとひ

めじの会。

★著者はふあうすと川柳社同人・

川柳研究社幹事の女性作家で、あ

とがきの最後に「人間とは何とい

う孤独ないきものなのでしょう

か。にんげんという底知れぬ魔

物、新子という一個の女のやりき

れない存在を私は死ぬその日まで

追っかけてみようと思うのです」

と述べている。

富柳会

を育てて

摩 天 郎

忘れもせぬ十年前の本社の忘年

句会に、面識も無かった阿部柳太
氏から頼まれて、富田林市役所の

句会に行ったのが縁のはじまり、
勿論路郎先生のお許しを得ての

事、好郎、梅里、貴山、雄声の諸
氏も応援してやるとの事で意を強

うして行くと、会場には役所の人
や高校の先生、選挙管理委員等々

有力な人々で面喰ったが、名も富
柳会と附け事務所は公民館、役所

の人が必らず一切句会から句報ま
で世話する。毎月休みなく開く事

を決定して、彼は十年、市長さん
も見えろし、文化連盟会長の元議

長さんも見え、常連には市会議
員、会社社長、選挙委員、新聞記

者、婦人会長、民生委員、農協理
事、市役所の人や主婦達の人と有

力者ぞろいである。しかし、一時
火の気の無い冬の夜に公民館でふ

るゑた事もあったし、顔を出さな
いと多忙な人を失望させる。句の

向上と春秋の吟行を楽しみに続け
るうち、万葉、太路、六韻子の諸

氏も来て呉れたり、富田林から八
郎君が僕の方の支部や句会に来て

呉れるその御恩返しでと、白柳、
圭水の両氏や、富田林が郷土だか

らと一栄、清子ご姉妹も来会して
華を添えるという熱の入れようで

ある。一昨年であったが民生委員
の人々が鳥取方面へ旅行された事

があった。其の際川柳愛好の委員

新 神経疲労回復剤！

バランス

〔新 発売〕



山之内製薬株式会社

東京都中央区日本橋本町2ノ5
大阪・福岡・札幌・名古屋

神経も

レジャーがほしい！



●はげしい頭脳労働のため、思考力
に疲れをお覚えの方

●お仕事が思うようにゆかなくて、
イライラしておいでの方

●重要な交渉、商談などをひかえて
不安なお気持ちの方

ぜひ、バランスをおのみください。

一〇ミリグラム
六カプセル……………一〇〇円
二カプセル……………三〇〇円
三〇カプセル……………八〇〇円
(はかに保家向大入)
●お申込しい説明書、試供品を
送呈

五名が輪になって、車中、旅館で
作句し、褒めたり、笑ったり、張

切った楽しい旅行で他を羨ました
との事。市長杯、優勝楯の下附や

教育委員会の表彰も名誉である
が、大阪府教育委員会から表彰で

益々の張切り、今度は富田林は何
日と待たれる有様、毎月入れ換の

店頭の入選句を遠方から見に来る
人もふえた。

要之、富柳会は公民館の世話と
有力なバックと有力なメンバー、

平素の親睦、郷土愛、路郎先生や
柳友のよしみ等、之れらが一環し

た賜だと思ひ、恵まれた団体だと
私は思う。



いざなみのみこと

富士野鞍馬

伊弉冉の尊ト女房の始めなり

(タル五〇)

わが国の男女のはじまりは、伊弉諾尊(いざなぎのみこと)伊弉冉尊(いざなみのみこと)の二神だといわれている。その御子が天照大神と素戔鳴尊ということになっている。

伊弉諾、伊弉冉の二神が、はじめて夫婦の生活をいとなまれ、高天が原の天の神の命によって、天の浮橋に立ち、天の沼矛(あめのぬぼこ)を泥の中へつつこんで、その矛の先の滴りがかたまつて、オノコロ島が出来た。それが日本国ということになっている。

なぎとなみそして四海を生み給ふ
(タル八九)

二人にて青海原へ竿を入れ

(拾四)

逆鉾でオノコロ島の種おろし

(タル三三)

逆鉾で雫のはねた老岐対馬

(九七)

逆鉾の雫で国が二つ出来

(一一三〇)

などとそれが詠まれ、「逆鉾」は、天の沼矛のことで、老岐と対馬の二つの島は、その雫がはねたのであらうと、おもしろくうがっている。

その天の浮橋に二神が立ちたまうところへ、鵜飼がやって来て、男女のいとなみを教えたとき古記にあるので、それも多く川柳に詠まれている。

セキレイは極秘を神に伝授なり
(タル四九)

ああなるほどとイザナギのミコトのり
(一一四四)

この時の二神の会話を次のように伝えられ、

「イザナミのミコトに、汝が身はいかに成れるやと問いたまえば、吾が身は成りなりて、成り合わざるところ一とありと申し給いき。ここにイザナギのミコト、のりたまいつらく、吾が身は成りなりて、成りあまれるところ一とありと申し給いき。この吾が身の成りあまれるところを、汝が身の成り合わざるところに差しふたぎて、国生みなさむと思うはいかにとのりたまえば、イザナミのミコト、しかよけむと申し給いき」それを川柳もまた、あなうれし陰の欠けたへ陽を足し
(タル三七)

余ったを不足へ足して人は出来
(一一二二)

と詠んでいる。「日本書紀」にまた、

「ついでみあわせむとするに、しかもそのみちを知らず。時ににわくなふり(鵜飼)あり、飛び来たつてその首尾をうごかす。二神みそなわして、これにならいてすなわちこつぎ(交)の道を得つ」

とある。

セキレイは人よりさきに色気づき
(タル四九)

色のいの字のお師匠さんセキレイ
(一一一一)

かよう遊ばせとセキレイびくつかせ
(五八)

オホホとアハハ鵜飼の尾に見とれ
(一一二二)

セキレイの曰くさてきて御器用な
(一一〇四)

セキレイをみておつた二柱
(一一四六)

セキレイの尾は二神の株になり
(万宝九)

一鳥の伝が神代の祭り初め
(タル七二)

セキレイは一度教えてあきれはて
(七七)

こうして交合の道を会得された二神は、

「合点がゆく浮橋ゆるぎだし
(タル一二四)

教えられ給ふと橋がみっしりし
(九一)

日本が集ると伊弉冉言初め
(五二)

「日本がよる」とは、快感極致の表現である。そこで日本国が生れたことになる。またその時「あなうまし」といわれたので、

神でさへあなはうまいの嬉しみの
(タル九九)

神は正直平つたくなうまし
(一一三二)

浮橋のお出合い神もあな嬉し
(一一二二)

姫氏国のひらきははじめも穴嬉し
(九七)

などと作られている。「姫氏国」は日本国である。またいとなみのはじめの天の浮橋を、

天の浮橋お祭りの渡りぞめ
(タル一三六)

お祭りの渡りははじめは橋の上
(九三)

二神のお祭り御輿のつかいぞめ
(九九)

浮橋はおっぱじめたり終つたり
(一一六〇)

などと詠まれ、「終つたり」は「源氏物語」の終巻「夢の浮橋」をいったのである。

車
福壽司

心斎橋筋大丸前
電話(271)三三四番



私達の地下街

柳友が愛読者がお互いに言いたいことを言うページを設けました。例えば、「句評」でいろんな批評された場合に、作家は自分としての意見も述べたいこともあろうと思えます。そんな時、この欄へ投稿された。あまり長い時には多少の取捨は含みます。

(編集局)

有難し有難し

木山 遠二

腸疾患の為日市の国立病院へ入院してから十七日目——愈々三時間後には腸の一部切除手術を受けると言う私のベッドへ、畏友鮮秋から「君が入院したとは知らなかった。驚いた」と言う意味の歌を切め十首ばかりを書いた葉書が届きました。折が折とて、私はそれが大変有難くて嬉しくて、すぐ川柳十句を以て返しの葉書を出しました。入院の際は誰にも心配や迷惑をかけたくなかったので、手鞆一つだけを提げてブラリと家を出て来たのですが、それでもだんだんわかるものと見えて、「驚いた」「驚いた」とあつちからこつちから一応見舞状を貰いました。鮮秋は其後も追いかけて追いかけて便りを呉れました。便りと言っても文章は一切書かず、終始歌ばかりのもので、その数は十一通、歌は七十五首に達しました。歌で以て病床の私に同情して呉れ慰めて呉れ、励まして呉れ、又郷里の模様世間の出来事、自然の移り変り等、あれこれとこまめに報せて呉れました。

それに対し私は葉書六通、五十五句の川柳を以て返しました。齡のせいか近頃著しく頭が鈍ってしまつて、一句を作るに一日もそれ

以上も費し、それで尚碌なもの出来ない私ですが、鮮秋からの歌の葉書に対しては、別段頭を捻るでもなく即座に返しを書きました。鮮秋がうまくリードして呉れたからでしょう。句論こちらも文は書かず句ばかりのものです。手術後当分は目をあけるのも億劫で、数通は貰いつ放しでしたが、十日も経つと筆が執れるようになり、来れば返す、返せばすぐ来ると言う調子で、短歌と川柳のやりとりが続きました。次に其一部を書いて見ます。

鮮秋から遠二へ

こつそりと入院したまうを耳にしてわがおどろきのいかばかりなる
傷癒えて帰ります日をひたに待つその日までコスモスも咲きてあるべし
コスモスとダリヤを刈りてアロエを鉢にとりたり小春日あびて

文化の日笠岡市長表彰の顔ぶれの中に捷平もある
老いてなほ嫁がねばならぬつらいですと木山捷平がこぼすはきに
天使をば頭にうつし得るまでにたちなおりしとききてやすらぐ鵬柏やぶれ次には佐田と光と共に土つく大あれの博多
病室の南の窓ゆ入る秋陽ぬくときに心ほぐれてあらむ
すき間より吹き入る風のつめた

さを味わうまでは居ること勿れ十一月八日冬立つ朝のもやふかく一きはするどきもずの声きこゆ
涙骨抄原澄治翁が推賞の書なりときくむさぼりてよめや

汽車はかやり炭坑はつぶれる動かずにて居て暮すが一番安全並ぶ稻架かきわきて色をかえし田に穴つき麦まく人ここかしこ土しめり麦まきによき雨なりしを再び三度はもてあまし居りのいろうぜしよつくなどみな澄ふかき晩秋の天空にすいとらるべし

電灯を見上げつつすず夜のががきかこつものたのしきおもひでとなれ

半月の慎重の上のめすなれば再びの腹はきらずともよけれ連呼の声一度もきこえぬこの峽の秋更けゆき投票日せまる

遠二から鮮秋へ

君からと知る看護婦の手のほがき

有難し驚馬涙ぐむばかりなりこつそりと来し老ぼれのはみかみ屋

それなのに嗅ぎつけられたのもうれし
コスモスは好な性なり老いてな

おつれづれにコスモスを抜くまたよろし

捷平のこぼすことこそ羨まし
悪筆苦吾十日間忘れ居し

にこやかな天使の出番こそ待たれ

瘦せたねと天使が笑い経過よし敗けるから好き柏戸と豊山
なおしつ作りもしたい腹であり

そのために涙骨抄と云うを読む衝突はせぬが病院よう燃えるねていてもだから油断のならない世

もやの朝冬立ちしとぞよき歌信病院は百性よりはチョイとらく一ト月を今日超えたりと云うシヨック

顔の上の電燈と一対一の夜再手術せねば或はとも思うノイローゼはお止しなされと天使云う

厭な日は天が雨まで降らせたり以上何句しるし涙骨抄に恥ず病日によろし歌訓のありがたしこうして並べて見ると私の句には、どうも川柳とは受取れないよ

寒中御見舞

松の内

歌謡曲とはかわり果て

後藤 梅 志

大阪市泉北郡高石町

新 富木府宮住宅五三三号

電話塚の二五七四番

中 村 九 呂 平

下関市上新地町

うなしものや、何を言っているや
ら意味のわからぬ十七字が随分あ
るようです。そんなのは、鮮秋の
歌を持って来たとか、隣に並んで
いる句と繋んで考えるとかすれば
いくらか川柳味も感じられ、おや
そんなことかと合点がゆく筈で
す。

それにつけ私が思いますのは、
元来便りと言うものは相手にさえ
わかれば、他人にはわからずとも
よいではないか、句の場合もそれ
と同様——一般からは駄句と見ら
れようとも、相手がそれによって
心を打たれさえしたら上出来では
ないか、そこでその相手の心を打
とうとする為には、自分の句をな
るべく相手の歌又は句に凭れかか
らせたり繋がらせたり絡ませたり
すること、^{「十」}「十」^{「十」}或は^{「十」}「十」^{「十」}と言う風に働かせることが
必要と言うもの、便利と言うもの
ではないか、縦しそうしたが故に
独り立ちの出来ぬ句となつて、所
謂名句とか、命ある句に縁遠いも
のにならうとも、そこは我慢せね
ばならないでしょう。と言う事で
す。

これは短歌の側からも言える事
で、「三十一文字を並べたに過ぎ
ぬ」と鮮秋も後で語つて居ました
が、鮮秋の歌には私は心を打たれ
ました。大いに慰められ、励まし
れ、愉しませて貰いました。私の
句が鮮秋の心を打ったとは思いま

せんが、わかつては呉れたことと
信じて居ます。

ともあれ私がここに臆面もなく
私の駄句を並べた所以は「この程
度の川柳しか出来ぬ私だけれど、
川柳と言うもののお蔭で、病苦を
ある程度忘れて愉しませて貰いま
した。有難し有難しと言うに他な
らないのであります。

はらわたがすっかり治り寝正月

教室点描

麻生アート

○ レッスン場の窓にも、なんと無
く春のきざしが感じられる。この
ところ暫く焚いた事の無いスト
ープの傍に、鉢植の枸模が明るい
影を落している。

ピアノから少し離れた所に、一
年坊主が三人屯ろしている。その
中の一人がバイオリンの弓を提げ
て何事か言う

「そんなこと、嘘やなあー」

と他の二人が弓を持った少年を否
定した。「嘘や、なあー」と二人
が奇妙な声を揃えて合唱したとこ
ろのユーモラスなリズムと調子は
流石に現代ツ子の面目躍如。

三人の少年はバイオリンの弓に
関して何事かを主張し、張り合っ
ていたものと見えるが、その時、

レッスン場のドアが開いて、バ
イオリンの先生が現われた。三少
年の小さな顔が一斉に先生の方を
向いた。

「ほんなら、センセに聞いて見
な。」と、弓を持った少年が自信
に充ちた様子で他を顧みろ。そ
してドヤドヤと駆けて来て、銘々
が先生を包囲するような位置に佇
った。

「センセ、弓の毛、馬のシッポや
てはんまか？」

先生は幼い彼らの論戦？ に突
然巻き込まれて、口許から、おのず
と綻んで来るだらうの無い反射運
動を制し得ないようである。

「そうや、馬のシッポをひとすじ
抜いて顕微鏡で見たらな、恰度、
鋸の刃みたいにギザギザになつて
るや、そのギザギザの毛が沢山
あつて出来た弓でバイオリン
の絃をこすつたら、絃がふるえて
鳴り出すと言うわけや」

「ふうん」と一応の納得の下
から、A少年が又あらたな疑問を
産み出す。

「ほんなら白馬のシッポかあか
んのかいな」

「それは黒いシッポも栗毛いろの
シッポもあるけれどな、バイオリ
ンの弓に造る時、漂白剤と言うく
すりで、みんな白い色にさらして
しまふのや」と、念の入った説明
をしている先生も楽しそうであ
る。

と、B少年が急にいたましげな
顔つきて、「その馬可哀そうや
な」と言った。

一頭の馬がそのまま漂白剤の中
へさんぷりほうり込まれるよう
な、そんな無惨な場面が少年の心
に浮かんたのかも知れない。

○ H少年は七才、一人ツ子であ
る。色白で瞳が可愛い。丸い顔だ
ちで所謂りんごの頬である。自信
が強く、じゅんさいな所があり、
直ぐ早合点する子供である。

先生は今、運弓の為めの右手運
動の速度を教えている。
「この音符のように長い長い音を
奏く時には、弓の動いてるのが眼
に見えないくらい緩くくりく／＼右
手を動かすのや……」

「センセ、カタツムリみたい」と

その子供は巧まい表現をする。

「そうや、カタツムリは、じつと
見ているとなかなか動かないよう
だけど、ボクが何かお遊びして、
こんど来て見たら、さっきの所か
ら二〇センチも三〇センチも歩い
ている。……バイオリンも長い長い
音を奏く時には右の手がカタツム
リにならんとあかん。……ちよつと
先生の右手を見てごらん」

先生は弓を持たずに遅い運弓の
構え方を示す。然し右手は故意に
静止させている。そして、少年に
「どうや？」「……ウん、動いて
るわ」どうやら、このじゅんさい
な少年は先生が造った陥穽にまん
まとはまったようである。

かたつわりゆっくりあるけ銀の
道

一著名作家の川柳句集一

新刊



浜田久米雄著 麻生路郎序

定価300円
送費50円

★本句集の著者浜田久米雄氏は岡山の産。
多年不朽洞会員として又国鉄川柳人として
古豪の名をほしいままにしている。三十余
年の柳歴を飾る数千句中より百句を自選
し、各句に感想を附して世に問うもの。
★六〇〇部限定版につき証文はお早く。
★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番
をご利用が便利です。(切手代用可)

大阪市住吉局区内万代西5丁目25

発行所 川柳雑誌社

電話大阪局6081振替口座大阪75050

集路一

痛手

川村好郎選



痛手まだ癒えず原爆記念祭 どんたく

暴落の痛手と妻のヒスに耐え 可住

スト愛結痛手はお客ばかり負い 井蛙

少々の痛手にめげぬ寡婦の意地 十九平

痛手からハッスルさせる友あり 萩路

忘れたい酒が痛手をなほほしく 九呂平

ケネデーの死が痛手となった株 光道

失恋の痛手けろりと次の彼 酔夢

スーパが出来て小売屋職を変え 涼人

夫もう過去の痛手へ触れさせず 愛鳩

失恋の痛手を今日もやりとり屋 むじな

痛いとこ突かれ論旨がもつて来 三五島

痛手受け作業服から立ちはじめ 李鳥

競輪にすった痛手をもう忘れ 半月

あの時の痛手は忘れまい今の幸 藤波

立ち上る力を痛手から見付け 同

痛いところ一寸さわって子はねだり 句楽坊

見舞金もうても痛手の消えぬ事故 雄々

母の目は心の痛手もすぐ見抜き 同

失恋の痛手女は派手に嫁き 宗太郎

落選の傷が癒えぬに捜査状 代仕男

失恋の痛手化粧の厚くなり 秀峰

痛手なんかこうむるものと意地を張り 歌子

ボーナスが減って痛手の冬支度 東雲楼

大いなる痛手を秘めて歌手に生き すみれ

痛手にも世間はそんなに甘くない 保夫

胸底の痛手が生きる 舞扇 弥生

ライバルに金のあるのがちと痛手 千翁

不渡りの痛手も知らず賞与待ち 滋雀

この痛手知らせず息子に角帽子 寿美司

敗戦の痛手でさえも時が消す 恵二朗

耐えきれぬ痛手へ星の夜びえる 同

かすり傷ぐらいと痛手ひたかくし 生薑

脱脂にもめげずエノケン笑わせる 同

愛情にそとつとつんでおく痛手 宗義

未亡人の痛手子供が小さすぎ 静波

痛手など無いわと次の恋を追いつ 凡子

佳

痛手もうかくしおうせぬ鬼瓦 九呂平

その上に妻に臥れた年の暮 和三郎

ライバルの痛手を妻と笑うて飲み 十九平

身内だけ残り痛手へ知恵を貸し 静波

痛手ということにして手を握り 判志

痛手には触れず夫へ酌いでやり 宗太郎

新築落成過去の痛手を笑い合 軸

孤独

西森花村選

日本で死ぬ気帰って来た孤独 愛鳩

年よりの孤独を珠数の中に置く 和三郎

老境の孤独甘んじ市場籠 淀月

キャンパスに孤独の青をぬりたくる 光道

日溜りに眠る孤独は膝を抱き 井蛙

教師師いて孤独にはしてくれず 十九平

白昼の孤独救った排気ガス 同

年賀状三通孤独とは見え 同

八面六臂にすぎて結局孤独なり 同

人間国宝孤独見本のように生き 同

家中をきれいに飾っている孤独 同

孤独にはもう慣れましたと退職者 同

若劣性の母が孤独にしてくれず 同

ふるさとへ流れる雲に湧く孤独 同

孤独とは不自由ながら自由の身 同

冷え切った布団の中の孤独感 同

反感にいつしか自分を孤独にし 同

一人者万年床に陽が当り 同

俊寛は島の奇石を見てくらし 同

ここんとこ孤独たのしむ子のけい 同

この母の孤独の影がまだのこり 同

柳志寸言

本多柳志



◇オリンピックは参加する事に意義がある。川柳は作る事によろこびがある。

◇文芸を読むのは、ためになるから読むのではない。面白いから読むのである。

◇歌を唄わしたら神戸一郎や、ひばりにはかなわない。が川柳を作らせたら俺の方がうまい。俺は俺の道を往く事にする。

◇自分自身を除外して句の出来る筈はない。語りたいのは自分の事であり、語りたくないのも自分の事である。

◇墓場までもって行きたい秘密の、一つや二つは誰にでもあるものらしい。

◇批評家の出現を望む事よりも、批評家を必要とする様な、句の出現の方が先だ。

◇作家にとって最良の時は二回ある。自分の句が天にぬけた時と、全没になった時である。

◇学者は誰にでもわかる文章を、書く事はない。誰にもわからん文章を書く事でもない。

大言壯語に孤独の影を見る すみれ
前を行くアベックが邪麗な孤独性 保夫
孤独性適材適所に配置され 同
孤独になりなおいバールを意識し 判志
夕暮の鐘呼びかけてくる 孤独 立見
墓詣りする気になった孤独感 静水
孤独ではない名号を称えてみ 同
がむしむしに働かす孤独の身に気付か 浪路
妻の留守間借りも広うなる孤独 千翁
大器晩成孤独であつたとは見え 秀峰
よはよはと晩秋の蠅の孤独さよ 野迷路
口下手になるほど孤独続くなり 弘朗
不良化の底にひそんでいる孤独 三五島
ライバルへ祝電打った日の孤独 周甫
養老院元氣な孤独もてあまし 滋雀
肝しやくと氣まが孤独つくり上げ 句楽坊
膝小僧抱いて孤独の冬の雨 勝子
金守る孤独へ養子も来てくれず 雄々
えげつのう立身出世して 孤独 宗太郎
風貌はサトウハチローに似た孤独 八九寸
悪びれもせず孤独の甲斐がいし 藤波
歌謡曲孤独がラジオとうたつて 寿美司
長い床孤独に慣れたわれあわれ 惠二朗
孤独にも慣れてひねもす菊作り 照子
情熱があまり孤独へ逃避する 生薑
コケシみなふる里がありわれ 旭峯
アルバムの遺影にそつと話しかけ 宗義
出張のホテルしにみじ夜の孤独 どんたけ
チリ一つ落さず孤独の門閉し 可住
保姆となり子と戯れて姉孤独 雪美
騒音の中に孤独な地蔵尊 涼人
こだまして山の孤独が救われる 十九平

金貯めて見ても孤独の味気なく 代仕男

地
孤児にまだ亡母が生きる綴り方 光朗
留守番の孤独あれこれ拾い食い 千翁

ライバル

工藤甲吉選

ライバルへ小さな恩をさせて置き 杏花
ライバルの意識過剰をさげすまれ 代仕男
ライバルと座れば話題行き詰まり 周甫
見ぬふりをしてライバルは見て通り 弘朗
ライバルにばつたり会つた苦笑い 惠二朗
ライバルの前さりげなくさうりげなく 同
はた目にもライバル同士よそよそし 代仕男
ライバルに逢うてのん気な素振りする 李鳥
ライバルと作り笑いで手を握り 和三郎
それ以来ライバルとなり奴という 萩路
親友がライバルだった隣りの娘 三五島
会うたびにライバルの服新しい 惠二朗
ライバルに贈る祝辞のはろ苦さ 生薑
ライバルに恋を語つた立志伝 藤波
ライバルを尻目に玉の輿に乗り 旭峯
ライバルの袋の中味気にかかり 万竿
ライバルに勝たねばならぬプレゼント 雄々
ライバルに先手打たれた火事見舞 旭峯
老らくにライバルがあり加美乃素 光郎
あの頃はライバルだった廻り椅子 宗太郎
往年のライバル遙か床柱 野迷路
ライバルへ余つた年賀ハガキ書く 十九平
ライバルへやつぱり出した年賀状 秀峰
学歴のほかはライバルより勝り 雄々
ライバルのほくろの位置が気に食わず 十九平
ライバルの栄転を聞く寒い朝 涼人
暇と金あるライバルに押され気味 惠二朗

ライバルの姓名判断して貰い 十九平
佳作
ライバルへ当てこすつる車中談 八九寸
ライバルの意識が消える手術室 旭峯
ライバルに手を握らせた新記録 千翁
ライバルに祝辞を述べる破目となり 静水
共学のライバルいつか恋となり 八九寸
ライバルは金で女を丸めに来 雪美
二人共振られ旧交あたためる 宗義
ライバルの祝電一番先に来る むしな
ライバルに五十男の意地をたて 九呂平
ライバルを訪う呼鈴強く押し 和三郎
ライバルの小学校出が気に食わず 可住

人
ライバルに重役という紐がつき 淀月

地
ライバルの好意決然退ける 李鳥

天
ライバルの前で社長に叱られる 滋雀

軸
ライバルの弔辞にはたも泣かされる

色紙短冊
書画用品

大坂戎兵屋

丹月堂

電報セニセニ

◇より多く作る事よりも、より少く選ぶ事が大切な。

◇先生は自分が教えた通りの答案を見たから、がっかりするものだ。教えた事を土台にした、イマジネーションが見たいのである。

飛・燕・往・来

★小田無限氏より

一路 郎 宛

明けまして先生には益々御健筆のこと御慶び申し上げます。

御繁忙の為健康の限界迄来たとの御言葉は寢に沈痛の思いでお察し致します。川柳の極北で作る、は本望とは吾々にして更に奮起せしめる大号令と襟を正すものがあります。

他山の石として「層雲」誌の萩原井泉水先生も八十の寿で当激務と自由律の為に苦闘されていますことは先生と共に我国短詩界の為に万丈の気を吐かれるものと深く感銘致します。

願わくは御自愛御自重の上、且つ世界独特の短詩の為御大事になさるよう重ねて御祈り致します。

次に新年号で高木夢二郎氏を語るで往年の「川柳人」発刊の事を知り懐しいと思ひます。

寢に済みませんが柳誌の発行所を御指示下さいますよう御願ひ申し上げます。末尾乍ら奥様に宜敷く御清福を御祈り致します。

一月十日

順首

望展界柳



本社新春句会に於て三十八年度の路部賞の決勝が行なわれ、松江梅里氏が優勝され三十八年度不朽関係の永久保持者となられた。

句会

▼本社二月句会は七日(金)午後六時から千日前電停前自安寺で開催。寒さをもとめせず柳友お誘い合わせの上多数のご出席をお願いする。▼南海電鉄句会(大阪市)は一月十六日(木)午後六時から難波親和クラブで開催。▼コクヨ柳会(大阪市)新春句会は一月十七日(金)午後五時からコクヨ株式会社社会議室で開催。▼七面短詩文学クラブ川柳部新春句会(和歌山市)は一月三日(金)午後三時から奥新和歌の浦、魚又楼で開催。以上路部主幹出席▼大阪通信病院川柳会新春句会は二月一日(土)午後二時から北館五階会議室で開催。▼岡山県下川柳各支部

連合忘年川柳句会は十二月二十一日(土)浜田久米雄居で開催。▼川柳備前支部(岡山県)新春句会は芳月居新築祝賀を兼ねて一月十二日(日)芳月居で開催。▼川柳出雲支部(島根県)新春川柳大会は一月十九日(日)出雲市図書館で開催。▼川柳長屋連(東京都)の塚越迷亭氏ら数名は一月十四日箱根湯本温泉雅光園に遊ばれ三月二十九日(日)西念寺での故西島〇丸句碑除幕式の下の相談をされた。▼噴煙刊十五周年・甲斐田松里古稀・台信緑郎・赤松右一・坂口雅柳・三隅参平諸氏還暦祝賀川柳大会は昭和三十九年二月十六日(日)午前十時から熊本市辛島町電停角富国生命熊本本社ビルで開催。▼延原句沙弥・大山竹二句集発刊記念川柳大会は一月十九日(日)正午から国鉄神戸駅南側東百米電々会館大ホールで開催。▼第十五回愛媛春の川柳大会は昭和三十九年四月二十六日(日)午

前十時から松山市中歩行町PTA会館ホールで開催。兼題、未来図・手心・折り返し・紅生婆・綴込み・栄冠涙あり・夜桜、投句は各題三句を明記、投句料百円封入の上四月十五日迄に松山市道後上市九五塩見草映宛。▼川柳なごや三百句記念句会は三月十五日(日)正午から名古屋市中区小林町「東泉院」で開催。兼題、昇る・人氣者・継ぐ・新機軸、各題三句、投句は五十円封入の上二月末日迄に名古屋市中区鳴海町文木二七〇二名古屋川柳社宛。▼第九回柳都賞は藤井比呂夢・浜本千寿・稻垣冬民の諸氏が獲得された。▼第十回蟹の目川柳社自画像賞は高島とし竜氏が受賞された。▼故西島〇丸句碑建立記念川柳大会は三月二十九日(日)午前十時半からの除幕式に引続き新宿区若葉町二〇九西念寺で開催される。兼題は長身・にこにこ・筆まめ・酒豪・粹人、各題三句、投句は百円封入の上東京都中央区日本橋人形町三ノ四土橋芳浪宛。

消息

▼若本多久志氏(豊中市)は旧臘三十一日から尾道、広島を経て山口県周遊ドライブ旅行を続け、二日は秋芳台から萩市に出て松下村塾に安政の頃を偲び、湯本温泉に一泊された。「感深し長門の浦は波静か」▼川上三太郎氏(東京都)から「今年は路郎さんの喜寿

だから、祝賀会には何としても参加しなければならぬと思っています」とご厚情の寄信があった。▼阿部佐保蘭氏(東京都)は一月五日六日の両日、家業の組合の旅行で、熱海・伊豆山へ清遊された。▼田中辰二氏(熊本県)は手足が不自由なので生きた屍のようだとのこと。ご同情申上げる浜田久米雄著の「凡人」粒選りの句集とてうれしく拝見しました。▼八木摩太郎氏(堺市)は夫人同伴大晦日の特急で伊勢二見へ着き、元日に屠蘇を祝うも旅の宿「摩太郎」に二見まで来たに光見えもせず「二見まで来たに光見えもせず徳子」▼前山北海氏(ホノルル市)はこの程ホノルル新潟県人会会長とハワイ民謡会会長を兼任されることとなった。そのうちに、日本から専門家を招いて指導を仰ぎ、明後年の夏か秋に大挙訪日する予定だと張り切っておられる。▼米沢曉明氏(大洲市)は十二月十七日から二十日まで愛媛県代表教育調査の一環として鹿児島県教育委員会訪問の旅に出られた。「島かいて煙はかせて桜島」▼工藤甲吉氏(青森市)から、今冬の青森は雪がおそいようです。路郎先生ご夫妻ご健在で金婚をお迎え下さい。今年は是非大阪へ出かけたかと思っております。と▼本多柳志氏(大阪市)は一月十二日家族同伴で東海方面の神詣に行かれ、名古屋の繁昌に驚かれた。「城でもつ名古屋の城を見そない」▼深井凡々氏(奈良県)は、「母逝きて今年は鐘の音がかわり」と喪中の年始の感慨を寄せられた。▼本多露角氏夫妻(シカゴ市)からも、クリスマスカードを頂戴した。新聞の値上げを紙価が背負いこみ「露角」「色紙に悲願をこめて千羽鶴 紅女」と、それぞれ勸題「紙」の句を寄せられた。▼西貝篤氏(須坂市)は「老骨に頼で世相に小さく居る」と近況を寄せられた。▼小西無鬼氏(兵庫県)は目下一軒の店の南と北とで夫人と別々に商いをしておられ、暇のないうのが健康保持に役立っているのしょうとのこと。▼上田紅溪氏(マカベ市)はハワイウイロー社カワイ・支部が、間もなく二才の誕生を迎えるので、会員も増やし充実した会にしたいと努力しておられる。▼田垣方大氏(倉敷市)は今年の正月は、孫と一緒に賑やかに送られ、「初孫を祖父近所へ見せまわり」という張り切りぶり、また、年々歳々一年が短くなってゆくような気がするの、やりたい事が一杯あるからでしよう。▼野尻南海氏(メルローズバーク市)から、クリスマスシーズンのグリーディングが届けられた。ジゴベリ街も田舎も神の声」▼長谷川三司氏(尼崎市)は旧臘三十日の夜遅く、街頭で転倒

負傷され、三十一日左足膝関節骨折で尼崎の岡田病院に入院加療をされ、歩けるのは三カ月先のこと。ほんとうの寝正月になりました。病室で見る元旦の空は白。田村藤波氏(岡山県)は山陽新聞新年文芸川柳で一位を獲得、老兵は死なずの感慨にふけられた。「正月は勝手に来ても放つとけず」▼野村味平氏(加賀市)は昨年は八カ月間も欠勤した悪い事だったが、今年は健康な年でありたく念じております。▼安本美喜(旧姓沢田)さん(大阪市)は一月十四日新婚旅行の白浜から「イエスさまと共に二人のハネムーン」の句を寄せられた。▼山内静水氏(竹原市)は一月十二日広島交歓川柳大会に学生達を連れて参加、収獲を挙げられ、新人の育ちゆくさまを我が事のように喜ばれた。▼川岡豊眼子氏(諫早市)は長崎時事新聞の選者をはじめ、最近県事務所所の川柳会、諫早公民館主催の文化会川柳座等の選者で漸く柳友も多数になって来て、しかも、麻生路郎先生の直門というので甚だ肩巾を広く出来ます。元旦も子に起こされてどっこいしょ。▼安藤桂仙氏(新居浜市)は痔の手術のため病院で年を越されたが、十二日元気で退院された。「髪刈った退院の日を羨まれ」▼時実新子さん(姫路市)から、句集「新子」を路郎先生に見て戴けてこの上もない光栄

に存じます。「川柳雑誌」はずつと拝見していますが先生に何時の日かおめしをというのが長らくの夢でございます。▼山田李登氏(高槻市)は十二月二十二日広島へ日帰りの旅をされた。「年の瀬へ日帰りの旅をされた。鳥取周南さん(岡山県)は今年満七十四才になられるが、それでもそれでもと駄句ばかり作っていますと、「念願は遙かまだまだ死なないぞ」と気概を示された。▼中松一恒氏(加賀市)は念願の精神病院開院を達成、五十七床の病院の新しい大きな歩みを踏み出され



川柳雑誌社本社句会十年間全出席の努力賞を一月七日の初句会に受られた傍島勝馬氏。

三年以来「川柳雑誌」を読んでおられるが、この数年間は海上保安の勤務のため通読さえ出来ずにいましたが、豊乃先生の「職場の海の川柳を創れ」のお奨めにより今年から投句を始めたかと思っています。▼高瀬薫風子(大阪市)は一月十日から十三日まで家族連れで別府へ。由布院・志高湖など冬の高原の味を満喫してきました。「温泉の宿でも癖の深夜食」

上げる。甲▼弘津柳慶氏(柳井市)の母堂は一月一日八十一才の高齢にて死去された。謹悼。▼永松東岸氏(岡山県)の母堂は旧年八月以降より病臥されていましたが、一月十七日高血圧と胃潰瘍のため七十六才の高齢で永眠されました。お悼み申し上げます。

住居名称変更▼野本吞水氏(吹田市)の住所の名称が左記のように変更になった。大阪府吹田市泉町五丁目二十三番十三号

正誤▼前号四十二頁三段目十一行の句「質素にと……」と同じく四段十三行目の句「ニュースもう……」作者形水とあるは圭水の誤りに付訂正。(蕉)

不朽洞▼常任理事会は十二月十七日(火)午後七時から南区三休橋南詰中島小児科診療院で開催。

会から一、路郎先生喜寿、路郎豊乃御夫妻結婚祝賀の記念事業に関する件、一、その他の件、

につき協議、九時過ぎ散会。出席者、生々庵・梅里・榮・古方・春葉・文秋・恒明・静馬・柳宏子・薫風子・多久志の諸氏。

☆新入会員十二月

森川すみれ(大阪市)正

種目

チエロ・特設バレエ科

バイオリン・ピアノ・声楽

C・M・C 児童音楽サークル

千林教室
大阪市旭区北清水町九六
あびこ教室
大阪市住吉区南住吉四ノ一
西九条教室
大阪市西九条
生駒教室
奈良県生駒市北新町

北清水集会所
あびこ幼稚園
防犯会館
文化会館

バイオリン科
バイオリン科
バイオリン科
生駒2027

主 電話生駒 〇四三七 二〇二七
幸 麻生 アート
奈良県生駒市生駒本町三
お願ひいたします。
★サークルに関するお問い合わせは左記へ

☆池上知恵美さん(岡山県)は家事の都合により一月限りで退会。(多)

第百五十五回

大萬川柳

「美少年」

入選発表

選者 麻生路郎先生
 投句総数 四百十三句
 入選 四十五句

保護されに行くとは見えぬ美少年
 大坂 専 翁
 鳥取 法泉子

牛乳の匂いがしてる美少年
 松原 万 竿

割切って女は美少年を捨て
 八尾 弥 生

美少年故郷の土に親しめず
 大坂 ゆきを

美少年寸借詐欺と見えぬ顔
 大坂 一 栄

ナフタリン入れておきたい美少年
 大坂 薫風子

美少年門跡さまに恋してる
 貝塚 一 鶴

美少年大人の度風抜く遊び
 笠岡 桃 里

叔母さんというのがついてる美少年
 大坂 春 巢

美少年一人の時はシェンと居る
 岡山 東 岸

美少年美女へ興味を持たぬ顔
 笠岡 遠 二

つと立ちて席を譲りし美少年
 大坂 良

美少年の宿命おんなに養われ
 岡山 藤 波

美少年いまだに父の名が知れず
 大坂 晃

美少年虚無の深さをすでに知る
 神戸 静 馬

美少年オールドミスに借りがあり
 津和野 きさ子

鉄工所の隅に黙々美少年
 岡山 十九平

今日もまた遅刻して来た美少年
 大坂 水 客

フルートの音へ落けそうに美少年
 大坂 生 薑

横顔は旦那に似ている美少年
 大坂 雄 々

美少年孤独を好み仔犬抱く
 大坂 生 薑

女教師に淡い恋もち美少年
 大坂 雄 々

美少年置屋育ちで舞が好き
 大坂 梅 里

美少年さつま餅がよく似合い
 大坂 文 蝶

女教師の鞭をにぶらす美少年
 大坂 文 蝶

美少年生みの親とは知らず会い
 仙台 光 道

生みの親育ての親の美少年
 大坂 阿 茶

美少年だったと事故死惜しまれる
 大坂 阿 茶

二男の子とそしられながら美少年
 大坂 阿 茶

美少年の苦惱庶子と知りてより
 大坂 阿 茶

美少年だったんだと売れており
 大坂 柳 志

美少年不細工な姉にいじめられ
 大坂 柳 志

美少年まだ板チョコで釣れる齡
 大坂 柳 志

果人会唄う天草美少年
 大坂 柳 志

衆目を背なでうける美少年
 大坂 柳 志

美少年京はまつりの派手なとこ
 大坂 柳 志

五 客
 大坂 文 蝶

美少年日かげの母の美しさ
 大坂 文 蝶

腹違いの兄弟がいる美少年
 大坂 文 蝶

美少年赤いセーターがよく似合い
 大坂 文 蝶

剣道の方を選んだ美少年
 大坂 文 蝶

(天)
 笠岡 真 奇

美少年母は和服を着せたがり
 大坂 文 蝶

大万川柳ベストテン(二月現在)

一 薫風子 二八、五 大坂

二 梅里 二八、〇 大坂

三 水客 一九、五 大坂

四 方大 一九、〇 倉敷

五 文蝶 一八、〇 大坂

六 惠二朗 一七、五 大坂

七 柳志 一七、〇 大坂

八 晃 一五、五 大坂

九 好郎 一五、五 大坂

一〇 桃里 一四、五 大坂

一一 良 一四、〇 大坂

一二 真奇 一四、〇 大坂

一三 東岸 一三、五 大坂

下さい

投句先
 大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇

大萬川柳会

大萬川柳会

第12回大萬川柳大会

3月8日(日) 正午開場

会場 大萬階上

阿倍野区松崎町3の10

ご注意

三月兼題「きもの」にかぎり

3月5日〆切厳守

★大万川柳会主催の松江梅里氏は三十八年度の川柳雑誌社の句会で天位による不朽洞杯を一回獲得されましたが、三十八年度(十二ヵ月)の天位獲得者が十二人だったので、昭和三十一年一月七日の本社句会で決戦の結果、松江梅里氏が優勝され三十八年度の不朽洞杯の永久保持の栄冠を担われた。

次の兼題 「波の音」

〆切 二月十日

発表 二月二十日

昭和三十一年度第一回
 三月の予告 「きもの」
 年度代りですら奮って(応募)



投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社新春句会 (大阪市)

1月7日 午後6時
会場——千日前 自安寺

輝かしい、東京オリンピックの年の新春句会を迎えて、お互いの健康を祝し合い、川柳に親しみ得るその幸福感を胸に、歩を運び集う人々、会場は空席なきまでの盛況である。本日の路郎先生の柳話は、いつも以上に真に、力のこもったお話でありであった。先生のお話は、年を越して一場に会し得る幸福を祝福されると共に、私も既に健康上ギリギリの線まで来ているので、この中から私に代って、柳界のために働いて欲しいので、大いに作句其他について意欲を燃やされた。と述べられ、のち、題詠句と雑吟について詳述された。続いて、席、兼題の披露に移った。披露に挟んで昭和三十八年度の不朽洞杯の獲得者の優勝戦が行われその栄冠は、松江梅里氏の獲得されることとなった。本月の不朽洞杯は、前月に引続き新鋭宮川珠笑氏の得るところとなる。時に午後九時半。(摩)

出席者——路郎、専翁、行人、真砂、一栄、清子、瓢太、白柳、小松園、柳志、

井平、水京、古方、静馬、句楽坊、秀子、白溪子、たつみ、保美、晃、文秋、四郎、東天紅、与呂志、どんたく、柳宏子、弥生、みさ子、形水、旅風、茂三、珠笑、トメ子、天樹、八郎、庸佑、仲字呂、野菜、和郎、千代、圭井堂、女、太路。いさむ、恒明、すゝむ、あいき、摩太郎生々庵、梅里、計光、舟遊、南宗、鉄児、六童子、栗、薫風子、暮石、季費、清人、霞乃、宏子、

兼題「天気晴朗」 中島生々庵選

古稀の春天気晴朗義歯をはめ 太津朗
勿体なや日本晴れとはツイデー 野迷路
煙草の輪天気晴朗妻は留守 滋 雀
釣り鮎の宙に閃く日本晴れ 八九寸
天気晴朗寝正月では済まされず 与呂志
富士見えたその仕合せにグイグイ 白溪子
天気晴朗留守番を買ってやり 旅風
天気晴朗観光バスの砂埃 小松園
罪とも天も晴れたと吉田老 摩太郎
天気晴朗どの顔も 善意満ち 晃
女房の誤解もとけて空も晴れ 多久志
連休は天気晴朗金が切れ 文秋
天気晴朗釣糸流れに任かせきり 珠笑
天気晴朗明日を約して茜雲 八郎
天気晴朗調子の窓を明け 梅里
祝辞みな天気晴朗入れてあり 和郎
風高き子供の顔も日本晴れ 清子
天気晴朗養老院の陽も暖し 清人
敬老会天気晴朗菊匂い 阿茶
晴朗な天気8ミリ酷使され 六童子
天気晴朗記事は人出のことにふれ 白溪子
天気晴朗先ず洗濯とは女なる 清子
天気晴朗大漁の旗を浜が待ち 井平
天気晴朗ハッスルしてるアドバラン 一栄

天気晴朗笑い止らぬ番師の声 与呂志
天気晴朗若さが挑む冬の山 水京
天気晴朗君よ憂いを捨てたまへ 舟遊
子を負うて天気晴朗むぎを踏み 白柳
いつみても天気晴朗といった顔 柳宏子
天気晴朗家裁の門を小そ出で 和郎
天気晴朗若さはなにか物足らず 夢紅
天気晴朗一文なしで来たベンチ 珠笑
天気晴朗日曜大工は御機嫌さん 生々庵

兼題「振出し」 菊沢小松園選

振出しから買飛ばして書く日記 滋 雀
振出しに立つて若さを振返る 判志
振出しの僕に地の声 天の声 花村
振出しへ返っただけと妻はいい すみれ
振出しは希望にみちた春だった 野迷路
古いのか振出しの薬 性に合い 光道
十兩落ち振出しの気の十五日 生 薑
振出しの腹をくくって二号 八九寸
人生五十未だ振出しに在る自分 舟遊
定年の又振出しに立つ覚悟 清子
振出しからやる気になって運が向き どんたく
振出しに返ってからのくそ度胸 静馬
振出しに返った同志で意気が合い 圭井堂
振出しの漢方薬を信じ切り あいき
振出しは石橋叩くばかりなり 多久志
振出しの頃なつかしむ社長室 南宗
振出しが丁度時勢の波に乗り 恒明
振出しにもどった気持で再結婚し 庸佑
振出しへ戻った心算屋台引く 一栄
振出しの漢方薬をのみしぶり 美都子
振出しへ帰る日が出た不倖せ 天樹
振出しへ帰る日が出た不倖せ 阿茶
みんな白捜査振出しから初め 柳志
振出しに返り定年出直す気 柳宏子

振出しからやる気の元日酔い 静馬
ふり出しへ戻れと先輩こともな 栗
ふり出しへ戻り見事なカムフラ 鉄児
振出しへ戻れば金のことになり 和郎
振出しに返る家裁の庭に立ち 一栄
振出しへあせらぬ様にいいかせ 阿茶
振出しは畳一枚だけの店 圭井堂
振出しのシグキャップに気がつかず 柳宏子
振出しへ戻る覚悟の都落ち 梅里
厚生の振出し他人水くさし 恒明
屋台店出直す土性骨 晃
七転八起振出しは夢に満ち 恒明
離婚してもとの四畳半から始め 鉄児
振出しに返ったままだと株止めず あいき
振出しへ戻れば風の冷たすぎ 和郎
振り出しの頃の苦労が今実り 太郎
振り出しの朝の空気のうまいこと 弥生
振り出しへ戻ればそこに友もいた 夢紅
七転八起き一回休みまでもつき 柳宏子
やがて亦この井池へ戻る胆 圭井堂
振り出しにもう年令が迫りつけ 南宗
振り出しへ戻れぬ齢になっていた 文秋
振出しの理由を女は口にせず たつみ
振出しからやる気へ世間冷めたすぎ 静馬
振出しへ戻ってからはうそつかず 小松園

兼題「あだ名」 松江梅里選

新任のあだ名顔より先きに来る 八九寸
久しぶり昔のクマもはげばかり 光道
紅一点あだ名も付けて親しまれ 宗義
お目通りあだ名を呼んで許さる 野迷路
ホステスの客のあだ名は真をつき 生 薑
あだ名にも慣れて先生らしくなり 静馬
転校の教師にあだ名もって行き 静馬
愛される教師あだ名を知っており 野菜
狸親父ベストセラーにのしあがり 瓢太

雷のあだ名で恩師老けたまゐ
グジグジのニツクネームで敬遠し
髭はないけれど鯨というあだ名
気にして頭のことあだ名にし
飯場ではあだ名で聞けばす判り
竿頭の鈴の仇名で お人好し
一箇のドラマがからむ渾名なり
河馬さんはあんなにかいからかわれ
あだ名からふと旧悪がばれてくる
あだ名みな覚え会社の生字引
いみじくもオチコチオチといふあだ
肩書はいらず仇名で呼べる友
ニツクネーム「よう」と答へる間柄
ハリーさんと呼ばれ別れられぬ仲
聞えるにあだ名の口で眼で叱り
常連もあだ名のままで良い屋台
あだ名呼び肩たたかれた国の駅
舞妓がつけたあだ名で且さん嬉しが
あだ名しか出て来ず声をかけられ
うっかりと返事あだ名へ苦笑する
本名を忘れる程に親しまれ
本人も感心させるあだ名つき
傑作なあだ名本人まだ知らず
才能とは別にあだ名で人を魅き
友達をニツクネームで母も呼び
小、中、高、大、同じあだ名で卒業し
得々とあだ名もじって雅号にし
結婚式ニツクネームもひろわれ
廻らない舌にあだ名をおぼえられ
火星さんチヤン竹の園生の御衆
余生まだあだ名で呼べる友があり
あだ名で呼んで随行をはつとさせ

兼題「輝く」

吉田圭井堂選

母子家庭輝きわたる入試パス 野迷路
仕切る眼光輝く小兵大力士 八九寸

かやいていゝのは過去のことはかり
一代記輝く陰に内助あり 多九志
団体旗へ強勸菩薩の眼がまぶし 六竜子
初日の出航にかがやく名古屋城 井平
輝きの陰の労苦を人言わず 和郎
百万ドルの夜景輝く灯の眺め 文秋
輝かしい記録土産に羽田着 庸佑
露地奥に孝子輝く美談秘め 天樹
栄転の車窓富士もひとりの輝けり 静馬
峯鉦烈火火いどむ冬の汗 どんたく
シヤンダもまぶしい被露宴の二人 清子
星一つ輝き話題をときらせず 白溪子
初日出合掌の顔へ光満つ 行人
文化煎茶に輝く頃は杖がいり 馬
輝かしいその栄冠にある涙 庸佑
七十と見えす輝く晴舞台 どんたく
栄光に輝き顔をようあげず 白溪子
守銭奴の眼にはせにしかかやかず 晃
藍綬褒章へ内助の妻の輝く日 一栄
是非論と別に日の丸輝いて 茂三
只一つ輝くものはおともだけ 多九志
日章旗輝くオリンピックへの夢 鉄児
輝きをまして我が子も恋を知り 美都子
チャンピオン腹に輝くベルト締め いさむ
ほの暗い堂に輝く飛鳥像 句楽坊
暖かいして帽章を輝かせ 白柳
弔詞今輝く過去のことふれ 鉄児
輝かしい足跡のこし土俵去る 庸佑
ウインドの輝くダイヤ見てるだけ 天樹
シャッターが波の輝きまで捕え 珠笑
恋を得て星は輝くものと知り 梅里
餅つきへ幼い瞳輝いて 千代
輝かしい記録コーチも記事にされ 白溪子
栄冠に輝くポーズ撮り直し 梅里
ヨボヨボの胸に輝く文化章 文秋

通信簿抱いて輝く瞳が戻り 保美

席題「赤ちゃん」 西尾 栗選

すぐ泣くせに赤ちゃん抱きたがり
赤ちゃんと赤ちゃん意志が通じる
男の子出来て妻の座あたたかし
赤ちゃんをはめてあやして旅つれ
赤ちゃん時代知られる目に合出る
赤ちゃんも年玉天はかせいでる
ここに幸あり赤ちゃんの目よ妻の目よ
赤ちゃんをカラーで撮す春の陽よ
赤ちゃんのお乳臭きさの手の魅力
父に似て赤ちゃん大いに泣きわめき
初めまして赤ちゃん私はおじいん
赤ちゃんも四人目というさばさよう
赤ちゃんも初夜に宿つたことになり
横綱も赤ちゃんだけはもてあまし
赤ちゃんを機嫌に日人を耐えて生き
赤ちゃんをお腹に二人誓詞読む
赤ちゃんが出事て猫の座崩れ出し
正月の赤ちゃんやっぱり上機嫌
赤ちゃんが出来て素顔の日がつつき
赤ちゃんのもう大学へやる予算
赤ちゃんを抱いて認知の法廷に起ち
赤ちゃんも突如気もちの良しおなら
赤ちゃんもはつちにも似ず猿に似て

席題「地下街」 清水白柳選

地下街を出ると空あり空あり
地下街を貫けて何にも買おとせず
スモッグの無い地下街で易を見る
地下街を出て方向を取り違え
地下街へ月へとのびや事故もなし
地下街のまた入口へ出てしまひ
上阪の土産地下街通っただけ
地下街の出口ばかり見て廻り
雨降りのデパート地下街見て歩き

雑沓が地下にもぐつただけの街
これが敗れた国か地下街よくはやり
地下街を出てスモッグに突当り
買物もないのに地下街を通られ
地下街の広き銀行までつくり
地球への疵を深めて居る地下街
地下街を出て満月に見降され
雑沓を避け地下街でもみ抜かれ
もう一度考え直す為の地下街
衣食住地下にもぐって行く生活
交通信号もう要りそう梅田地下
地下街のここにも用のない人間
地下街で喰べてデパートは木の下で
降り出して地下街で用を足し
蟻の巣に似て地下街から人が出る
地下街で良きく鼻を持て余し
地下街に勤務屋の陽を忘れ
地下街でスリもとまどう程の混み
言葉だけは馬鹿丁寧に初対面
初対面と思えぬ程に話しこみ
初対面酔うてからでる国訛り
初対面心と別な女客
初対面話してみれば面白い
酔うほどに初対面は消えてゆき
爪先をじっと見られる初対面
初対面女同志の目は光り
紹介状読む間の長い応接間
初対面男はなんてはれつぽい
初対面うわさは聞いておりました
さり気無くサット見て取る初対面
通訳がいる初対面へ気をつかい
初対面子はなぜか首を振り
初対面互いの視線同じ位置
生活のみだれも目立つ初対面

席題「初対面」 戸田古方選

すゝむ 摩太郎
天樹 柳志
白溪子 井平
たつみ 鉄児
小松園 東天紅
太路 晃
多九志 東天紅
茂三 珠笑
恒明 白柳
清子 白柳
白溪子 六竜子
失名 失名
保美 保美
弥生 弥生
柳宏子 柳宏子
恒明 恒明
晃 晃
風 風
白溪子 白溪子
トメ子 トメ子
一栄 一栄
真砂 真砂

妻の口と決めてかゝった初対面
初対面大が残りた縄のれん
低姿勢で来る初対面が
初対面美人でないのが気やすく
初対面こまでうまがあおうとは
君だったのかと老年の初対面
初対面でわがいのけの取って置く
初対面すばりと干支を当てられる
初対面相手の笑顔に救われる
初対面コネが効いてる話しぶり
初対面そろ／＼しびれされる頃
初対面みたいに座るのも見合い

小松園 柳志 太路 水京 すすむ 白柳 清子 柳志 柳宏子 白溪子 南宗 古方

特売ヘラッシユアワーをもとせず
好きだわと一度も云わずに添い遂げる
売切れと聞けば尚更はしくなり
ほどのええ好きを安売する男
歳暮えらび自分もいしものを買い
チラリ見た顔に引かれてあとを追いつる子
買物のメモは最低だったけど
チラリとみえる下着がよくはやり
買物と云う格好でデートする
好きな人出来て化粧に念を入れ
買物の婦唱夫随と云う平和
買物に付き合ひ不足はわされ
素読みでは惜しい日曜付録記事

紫水 清子 秀子 悦子 嘉代子 八郎 靖一 喜仙 あいき 宗義 藤間 失名

金井文秋報

川維 阿倍野支部句会 (大阪市)

西出一栄報

十二月犬も昼飯忘れられ

欲しいものだらけで何も買わずに出
二人だにけになりたバコ買いにやり
ただ逢うて顔見るだけでいい二人
ボーナス期社長弱気になりはじめ
予想屋になつても馬をあらめず
むこ養子付録のようにあつかわれ
人生譜愛の付録も 数を決め
釣銭の用意も出来て大晦日
買好きが人のものでこつかり
女世帯弱味見せまい 男文字
悔いのない一年でした大晦日
意地つ張り好きといえないまま別れ
好きな人の前で巡査に叱られる
これでもかこま新年号の付録
つまずいて急に家相を気にしだし
女湯ののれんちらつく方に向き
泰然自若として君が好きだよ
買上手ちらりと札ビラのぞかせる
月刊誌付録の方に金をかけ

野菜 柳志 良馬 静馬 圭井堂 洋敏 生薑 文蝶 一栄 柳宏子 市郎 梅里 小松園 文秋 晃 双楽 白柳 東天紅 専翁

御同情申すスカートでおすわり
ショートスカートの自信足にもヒップにも
カレンダーとれば直らぬ壁のきす
金貰えなくともカレンダー置いて去に
鼻唄のこきげんさんを犬が吠え
鉄骨の上で鼻唄うたう 齋
逆境に負けまい鼻唄を歌う
鼻唄が聞こえて社長留守と云う
鼻唄で帰ろう借りも貸しもなし
うらやまし鼻唄まじりでバタ
忘れものとり返して火にまかれ
大びらに行けば顔さす忘れもの
忘れもの探す目付を怪しまれ
連れ同士安心してた忘れもの
忘れものゆづり飲み屋さきまわり
金策が出来て手袋忘れて来
出稼ぎも顔を揃えたみそかを

柳志 天真 良舟 珠笑 六童子 白柳 秀子 美祥子 文秋 八郎 半月 生薑 正彦 柳宏子 静馬 市郎 幸雄

川維 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

塩の白きを清らかと見て 久し
清らかに物をたずねん旅に居る
湯の街までは清らかな谷川である
岐路の階段を登らねばならぬ
吸取紙産業スバイの岐路を知る
これが岐路のふところ手の女性
泣きすれならぬ岐路に負けて居る
子午線の真上太陽光つて居る
旋風の中別な自分がさけんでる
旋風にマフラー色彩動かせり
知恩院の鐘をく／＼つてみるいのち
文化財鐘は鳴るとは限られず
撞きへった連座煩悩欣求の数

幸男 小きら 白石 磔 枯粒 紫蘭 紅鳥 句桑坊 尚平 司郎 和三郎 親生 鳥雀

川維 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

とんがった鼻で妹嫁おくれ
美人秘書鼻毛もよめる術を知り
鼻風邪も休にや損とサラリマン
鼻つまみされて金溜め五十過ぎ
鼻つまみされているとも気がつかず
鼻紙の捨場に困るホノルル市

暁舟 紅茶 紅溪 北海 太

川維 備前支部句会 (岡山県)

ひざ枕鼻毛の白髪教えられ
おかず代へらしてテレビでと据え
やりくりの智恵は女房に教えられ
やりくりを袖にかくして役を受け
やりくりも母と二人で丸くゆき
やりくりも上手に妻が金を貯め
やりくりもつかずドロンをきつと決め
やりくりで又焼石に水をかけ
やりくりを高く利貸など云うとれず
やりくりのあとより云う始末
ジリ貧へやりくり遂に追付かず
土壇場へワイフいくら借りて来る

泉水 蒼蛇楼 快夢起 三石 雪女 内海 拜山 美潮 魔花麗 カロ女 斧平 エス子 柿葉 平八郎 峯園 あき坊

横山一声報

一人だけ死んだ電波が良くしやべり
ケネディの死へ日の丸もちとしをれ
ネオンには迷わずシグナル 確かめる

久米雄 東岸 秋月

食品と原資材機械包装の総合誌

食品と科学

Food Science

本社 大阪市北区源蔵町 5 (361) 9373 代

支局 東京都千代田区神田鍛冶町 2 (291) 9629 代

名古屋昭和区村田町 2 (88) 9069

割勘の屋台下役こきおろし 宗義
拾てたろと思う仔猫のようなき 真奇
寺の鐘ほんのう解脱の顔で突き 良江
宿切りへ候補したしく声をかけ 伊久野
極道に掛けた保険に助けられ あやめ
保険外交あかくてうすい口を持ち 其月
保険などうでも良いと言う若さ 正洲
停年がまた保険でかせいでおり のぶ子
大口の火災保険は怪しまれ 弥寿子
残り火を埋めて除夜の鐘を聞き 美佐子
母の会残り火埋めて解散し 千秋
残り火に口とがらせて芋を焼き 静子
もう来ない残り火埋めて吐息する 胡風
残り火がちらちら鳥も夕焼る 一声
手枕で読んでる本は辞書でなし 計

維 木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

来年があるため息慰める 佳仙
ため息の出る開票の伸び悩み 政吉
出すまいとため息追つかける 祥月
百姓のため息じつと空を見る 清泉
ため息が出るまで説教されて居る 清風子
ため息を女医あつさり片付ける 夢草
ため息の背を友情に叩かれる 芳正
ため息をする元元につ引かれ 富雄
ため息で電話を切った一大事 あきお
ため息の度にパチンコ玉が減り 雄々
女世帯留守でも居ても錠おろし 晃男
灯をつけば女世帯の部屋となり 早苗
亡き夫の標札のままだ女世帯 鶴丸
一円の差を買いに行く女世帯 昌
ため息を大きく吐いて年を越し 正二
クリスマス泣き笑いの銀帽子 勇

女世帯にも春が来る婿がくる 明朗
負けまいとするため息の二つ三つ 緑之助

維 出雲支部句会 (出雲市)

尼緑之助報

もう一つ荷物にならぬ出雲そば 独仙
虎の子の行方が知れぬ思いつめ 澄水
あの目つき思いつめたる物を言い 松風
新人の真向からのキッスシーン 李朋
父さんは偉い方だと思いつめ 壮
自信ある顔で割子を積み上げる 芳正
思いつめ心に秘めた恋の道 湖水
新人と思つて我は胸を張り 紅葉
思いつめたとたん彼女土地を去り 昭
思いつめた揚句が三面記事に載り 晃男
発車ベル旅情のそばをかきたてる 岬月
田満を仲人里へ持ち帰り 正治
喰いつめてくよくよと思いつめ 雅行
田満な仲はめかす姉の笑み 治
田満へ炬燵の猫が顔を出し 重信
田満なの家庭にすわっている一人 緑之助

維 土佐支部句会 (高知市)

川竹松風報

とった金皆逃げて行く年の暮 小雀
除夜の鐘聞いても腕はまだ解けぬ 呑洋
病む妻を病舎に残し年の暮 松竜
犯罪のヒント気になる年の暮 天花
年の暮火の用心にかり出され 寅一
聞えないふりをするのも十二月 松風
突っぱねてみて暮の義理は義理 寛
十二月女房も恐いことを言う 紅雨
札束が三味とたいこの音で飛び 遊子

音のする方へ赤ちゃん首をまげ 窓花
足音も静かに帰るうちの人の 吹雪
音のせめように昼寝の蠅を打ち 勝子
ダム現場音に化学の粋集め 波浪
販買機十円だけの音で出る 斐山
噂して風たら足音 近うなり 幸葉
足音に驚くような仲しやなし 千佐子
酒よしてバーの女に忘れられ 蟬蛇

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

森下愛論報

急患に児はタクシーを雇れしが まさる
急患へ医者おいそれと腰上げず 没食子
上を見て歩るうづぎ足しビル工事 風仙洞
安全策会議は今日も黙るとし 春雄
老妻はいとし安全弁になりおせ 宏子
安全へ君子は自重をおこたらす 竹青
死に絶えた血筋他人の世話になり 竹志
親子だといわでも知れる売工合 よしを
あまりにも血筋よすぎてもとら 竹莊
血筋でんなどぼんぼんおだてられ 愛論

席題「通天閣」

酔うて見る通天閣のあばら骨 草石
王将碑通天閣へ蘇り 没食子
通天閣庶民の味でそびえ立ち 宏子
通天閣絵ハガキになり海を越え 竹青
母ちゃんと来て通天閣はあ足りず 愛論
大阪は眠る通天閣の灯も消えた 没食子

杏林川柳会 (大阪市)

中島生々庵報

シグナルであすのデートの相手きめ 太希志
人生のシグナル無視して飲み続け 瑞川

気のせいにデートへ信号赤になり 小石
黄色でも赤でも走る酔っぱらい 一哲
監督のサインがへまの上塗りし 野迷路
シグナルを附つけるも政治力がいり 生々庵
危険信号ババの不機嫌目でしらし 瑞技郎
目の合図きかず判こ押されけり 野迷路
展示会財布のシグナル赤と出る 阿茶
つぶされた面子をそれら疎遠なり 小石
実力のない奴面子を大事にし 瑞川
宿題へババの面子がつぶれそう 阿茶
面子にこだわりすぎて売れ残り 一哲
御両家の御手を拝借顔たてる 野迷路
男の面子涙をみせぬだけのこと 生々庵
めんつ故僕も一生失恋し 瑞枝郎
政治屋が何の面子ぞおこがまし 阿茶
面子面子とその頑固さに気がづかず 生々庵

帝化川柳会 (大阪市)

谷沢好祐報

役人を止めて役所の無駄をいい 一徹
デパートに来て見りや頭を下げる役 好祐
苔の味バカンス族に解るまい 一男
見覚しが喝って五分の朝の床 九紫
国作りに未練の故郷沈められ 辰始
泣きどころついで集金成功し 白水
秋淋し抜毛四十の今朝の櫛 京楼
四十代加減どうだとコマール 雄水
ホステスへ金ももてる四十代 繁三
メニユーをはき見合の眼がもつれ 雅堂

コクヨ川柳会 (大阪市)

川口理休報

正月を通天閣から眺めよう 留鈍

この台地ドル換算で見る 夜景 理 休
見晴しがよき 彼女チヨットてれ 昭 一
空港での記者会見がトップに出 卯左吉
振袖や日の丸で空港埋められ 卯左吉
空港の広さ少年の日を想う 留 鈍
空港に家の子郎党揃えさせ 留 鈍
送迎の空港 通いも宮仕え 留 鈍
夜の蝶になる迄を知る三面鏡 留 鈍
うれしさに三つの顔がウインクし 広 彦
新世帯三面鏡だけ光って 卯左吉
世も移り「美人」がト声はり上げる 武
美人になった 気度美容室をお出ましに 卯左吉
顔よりも八頭身をはめちぎり 卯左吉

丸 紅 川 柳 会 (大阪市)

村田 飄 太 報

大都会に背を向けてゆく療養所 美 幸
敗戦で大日本の大が飛び 飄 太
相性の大凶だけが気にかかり 巴 子
大の字に寝て見て思うこともなし 立 児
大将といわせ小さな店を持ち 泉 睦

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻 圭 水 報

タクシーを拾いに走る役もあり 鳥 莊
メータ無情とまる瞬間にあがり 圭 水
タクシーの料金の針のさえ 句 念 坊
ダンブカリに挟まれタクシーにこまる 專 翁
花嫁を乗せてタクシーバックセ 昭 月
タクシーへパパの運転心細く 八 郎
円タクの頃から乗って事故も 貴 山
タクシーを待せ亭主を借りて行く 路 郎

どんぐり川柳会 (羽曳野市)

古川 静 波 報

裏街も恋が嫉妬が夢があり 五 郎
朝やけの美しさ病みて知り 功 雄
北欧へ輸出したいよな夏の陽よ 佳 代
魔窟へも太陽惜しみなくそそぎ 果 芳
養老院日向ぼっこにある余生 則 子
太陽に負けずひまわり強く生き 越 郎
徹夜マージャン朝日はれどまだつかず さん子
太陽のようなおふくろくにおり 浪 路
平凡な人生でよし陽も 正 太郎
訣別の丘に太陽燃えて落ち のん子
下着干しながら孤独かみしめる 松 子
水虫が背広窓に下駄はかせ かつを
地下足袋と下駄がアツた火を囲み 怒 城
趣味の下駄はいて集るお茶の会 松 森
初サラー母へ贈った下駄一足 宜 子
夕映えに子は古い下駄を蹴り け 子
癒えそめた素足に下駄の心地よく 容 子
心配の裏に悟りが待って居る 六 双
お茶会で湯呑の裏を拝まされ 広 坊
逆境が裏も知っている子に育て アキコ
裏書がふえて約手の長の旅 嘉 保

あすなる川柳会 (大阪市)

山本 素 郎 報

督促の葉書符箋で舞い戻り 梅 里
彼奴まだ生きておったか年賀状 幸 児
葉書では猫も達者といってきた 一 枝
天照らす神もネオンをみそむれし 百 枝
分別がプールの波に乗り切れず 百 枝
分別も思案のはかという迷い 醉 泉

富 柳 会 句 会 (富田林市)

阿部 柳 太 報

バカンスは次のデートに発展し 菊 代
発展家妻子同時に 双児出来 とみえ
ご発展同志南地の角であい柳 太
冬仕度ふところ寒う手も出せず 笑 照
初雪の便りにあわて冬仕度 ふ じ
子沢山お下げ渡しで冬仕度 吉 太郎
停年へ冬の仕度がわびしおす 美 代
ポーナスの頃まで待てぬ冬仕度 静 林 庵
菊の香をかか要領で接吻し 日 出 夫
菊の香を秘めて旧家の格に生き きはち
菊花展自慢の顔も見てもらい 栄 一郎
嫁してから母のしつけが解りかけ 一 栄
よその子をほめて 吾が子の鼻をかみ 三 次
しつけい父はアグラをかいており 尚 吏
昇給はならず値上げがつづくのみ 太 路
月末に値上げがしみる市場 籠 六 竜 子
仲人してときどきのぞくおせつかい 八 郎
あれを飲めこれを飲めよとおせつかい 花 梢
お人よし人の二号の世話をやき 半 月
おせつかい過ぎると妻のこぼすこ 摩 天 郎
こき使こて置いておせつかいなのや 清 子

諫 早 川 柳 会 (諫早市)

川 崎 靈 眼 子 報

初詣で坊やは何と掌を合わす 好 子
元旦はナフタリンの香静かなり 茶 人
元旦を一人ゆっくり寝たい母 重 幸
辛抱をせよと雄煮のよくねばり 美 寿 栄
幸あれと初日に祈る職場あけ 七 三 郎
書ぞめの見事な竜が披露され 忠 恕
差出人探すも 楽し 年 賀 状 良 隆
屠蘇の順くるい淋しい春にする 歌 人
年頭の酔の機嫌も唄に 昇 竜
元旦は子の年数え老わすれ 随 心
昇折で無事におがんだ初日の出 三 鶴
松の内明治は遠くなりけり 隆
松の内だけは我世の春なれや 晴 紫 朗
初詣で鎮守の宮に羽根姿 哲 信
友情を今年もつなぐ年賀状 三 重
ここに幸サラーマンの寝正月 重 信
元旦の挨拶妻のあらたまり 嘉 象
地下足袋も正月らしく美しく 水 叫 峰
朝もやの何処かで鶏のなく初つ日 靈 眼 子

宴会・出張パーティ・折詰弁当

梅里ノ店

大 萬

料 亭

阿倍野区松崎町三ノ一〇

TEL (三三) 三九三五番

アベノ橋近映地下食通街

TEL (三三) 〇一四七番

串の店

南区豊屋町三ツ寺センター

TEL (三三) 九一八四番

柳 樽 室



路 郎 生

★暖冬異変のまま、もう二月へ踏み切ろうとしている。病臥している私にとってはありがたい暖冬ではあったが、それすら私には寒さがきびしい。足の感覚が少しもない。オーイ足よと、足の存在へ呼びかけて見るが、答えては呉れない。医者には脚気ではないというだけだ。血がアタマの方へ行くが、足の方へは行かぬらしい。春を待つより仕方がないのであるうか。★旧冬に十二月号と新春号を出して、ヤレヤレと思っ

た途端、健康状態は最悪の状態に陥った。それがために、新春のお芽出度う会へも出かけられなかった。★愛読者の柳友諸君や支援してくださる多くの皆さんからの賀状をベツトの上で拝謝した。賀状廃止問題も久しいが、どこまでも廃止されないだけでなく、年賀状が殖えてゆくようだ。私は本年の年賀状の中から意外にも、私の名簿で既に亡くなっている二人の人の賀状を発見した。一人は東都の大学の先生で、古川柳の研究家である。先年家族からの

知らせで弔電まで出した。一人は親しい療友からの知らせで、彼も亡くなったかと、アン然としたものであるが、私と同じ住吉区から賀状をもらって驚かされたのであった。こんなことを考えると、賀状廃止には、にわかには踏み切れないと思う。元旦には出会う同じ会社の同僚などへ出すのはよしだがいいとは思う一人ではあるが、★本社の新春句会へは柳話の責任を思い辛うじて演壇に立った。精神的には少しの衰えを見せない私だ

が、昨年以来体力的にはどうすることも出来ない一線に來ていることを知った。★私は明治、大正、昭和の六十有余年を短詩川柳と共に生きて来たが、微力な私にとって、これ以上を期するのはムリであろう。今はただ若い柳友たちが、冬山へ挑むような勢いで、川柳と取っ組んでくれるのを祈るばかりである。★昨年、川柳改称問題を引っさげて立ち上った老友正木龍樹君からその後の消息と、新呼称の多くを報じて米られた。人によって、その新呼称の文字に対するイメージもあることであろうから、すぐに取り決めることは困難であろう。一部の人間で選定したところで、広く世に行なわれなければ龍樹君の努力も空なしい訳だ。敗戦より少し前の話であるが、ある柳人から、川柳

はほろびるから、「先柳」と改称せよと進めてくれたことがあったが、私はその人の占による改称にはしたがわなかった。なるほど昭和二十年十二月に「川柳雑誌」は国策により奉還号を出したが、昭和二十二年七月にはマツカーサー元師の許しをうけて再刊今日に至っている。「川柳」の名を、そうやすやすと捨てられぬ幾多の憶い出もある。老友は健在であれといいたい。★相変らず、郵便物の配達がいまぐいかな。善意の発受者の迷惑にならぬよう、ストのやり方にモット検討がのぞましい。

川 柳 友 部 句 会

— 二月 —

★玉造句会・10日(月)

七時半、題、会費・お

好み焼・善意、所、市

電玉造南百米大阪信用

金庫。★かがみ句会・

2日(日) 正午、題、

あなたの句帖が再版
されました



一人一冊素らしい句を

発行所 川 柳 雑 誌 社

一冊八〇円
(送料廿円)

★路郎好み
だけに、す
ばらしく、
がきいて、
ます。句会
でお使いに
なるなり、
抜けた句の
整理にお使
いになれば
何冊か、
あなたの句
集の礎が
出来ず。
又柳友への
贈答に句会
の賞品にも
最適です。
是非ご利用
下さい。

人気・手袋・ぬかるみ
・官庁・名目、所、池
田古心居。★明和研究
句会9日(日) 一時、
題、蟹・足跡・所、
阪神電車鳴尾駅東南二
百米鳴尾公民館。★南
海電鉄句会・13日(木)
六時、題、社宅・一夜
漬け・信じる、所、難
萬。

波高架下親和クラブ。
★京都句会・16日(日)
夕、題、猛火・貫(ぬ
く)・身持、所、未定
★阿倍野句会・20日
(木) 六時半、題、二
枚目、二号・二の舞・
二世、所、阿倍野区松
崎町三ノ一〇割烹大



活力を高める

強精と長生への天然の強壮効果



日本新薬株式会社

ドイツ・マック社製

強力 ローヤル・ゼリー 製剤



正式名 アピフォルティール

会長・麻生霞乃女史

川柳 婦人友の会 会員を募る

川柳雑誌社内 川柳婦人友の会

入会希望者は往復はがきで……

連絡事務所 大阪市南区ニッ井戸町23

山川阿茶

若本多久志著 麻生路郎序

川柳 親でころ子心

価 150円
送費50円

「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳樹の中から親でころ子心を詠った秀句を多年に亘って根気よく拾い蒐めたのが本書である。登録された柳人三百余名、集句二千余は親と子の愛情が如何に深いものであるかを知ることの出来る実に有意義な書である。

東野大八著

風流 人間横丁

価 250円
送費70円

B 6型二五八頁

★異常な競争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザックバランな人生批判が、その雄筆からほとばしるさまは凄く。まるで腕の冴えた板前の切れ味にも似ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

橘高薫風子著 麻生路郎序

句川 集柳



価250円
送費60円

▼著者は新進作家で、繊細な新感覚の持ち主である。川柳不朽洞会に入って採まれ、川柳編集部員として精進を続けている前途ある好作家である。

★ご送金は振替口座をご利用が便利で安全です。(切手代用可)

川柳雑誌社

発行所 大阪市住吉局区内 万代西5丁目25

振替口座 大阪 75050
電話 大阪 (671) 6081

Printed in Japan

募 集

課題吟募集

- 山一 宿筋 (千句以内) 松江梅里選
- 視線 (千句以内) 山根白星選
- 深山 (千句以内) 木村水洞選
- うたた寝 (千句以内) 西尾至選
- 忘れる (千句以内) 森田若人選

毎号募集

- 近作柳樹 (雑誌十句以内) 麻生路郎選
- 川柳塔 (雑誌十句以内) 北川春葉選
- 文章 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎選

投稿規定

- ▼ 投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
- ▼ 「近作柳樹」は一般作家の雑吟を募る。
- ▼ 「課題吟」は誰でも投稿が出来る。「川柳塔」の投稿は不朽洞会員に限る。

川柳雑誌 三十九年 第二号

定価 一〇〇円 (送料六円)

(禁転載)

半力年 七五六円 (千社負担)
一力年 一四四〇円 (千社負担)

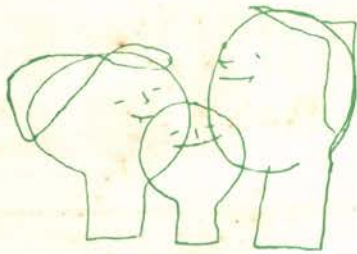
昭和三十九年一月廿五日印刷
昭和三十九年二月一日発行

大阪住吉局区内万代西五丁目二五番地
行印刷人 麻生 幸二郎

発行所 川柳雑誌社

振替口座 大阪 七五〇三八
電話 大阪 (671) 六〇八一

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL (641) 551-2

疲れをとり
抵抗力の強い
からだをつくる

高単位綜合ビタミン・ミネラル剤

ポポン-S

20日分 350円・60日分 950円・120日分 1600円



塩野義製薬株式会社

麻生路郎先生著
川柳とは何か
—川柳の作り方と味わい方—
川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。
絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもの
もろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短
詩型、それは伝統的であると共に常に革新
的である。その川柳がいかんして発生し、
経過し、今日に至り、将来に動くか、しか
もその作り方は、味わい方は——以上を最
も明快にわかりやすく、斯界の第一人者た
る著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区弘方町27 振替東京29507

価 二五〇円
送 七〇円

麻生路郎著 好評噴々



川柳の味い方・五百数十句

ものである。

(毎日新聞評)
麻生路郎さんは明治三十七年から
川柳を手がけていいるというから
川柳歴はもう六十余年にもなる。
この新著は麻生さんが毎月出し
ている「川柳雑誌」に掲載された
ものを中心にその他の雑誌や句集
からひろった五百六十三句につい
て、ひとつひとつ丁寧な注釈を加
えて、鑑賞の手引に資そうとした

發行所 川柳雑誌社

大阪市住吉区西五丁目二五番地
電話大阪(671)六〇八一
振替口座 大阪 七五〇五〇

価 二五〇円
送 八〇円
B 6版
二五〇余頁